# 法輪大法

## 法輪功

日本語版

李洪志

# 目次

# 第一章　概　論

気功は我が国において、太古の昔からの悠久の歴史があり、そのため、我が国の人々は気功を修煉するのに、とりわけ恵まれた環境にあります。正法修煉として、佛・道二大系統の気功は、すでに多くの秘伝大法を世に公開しました。道家の修煉方法は非常に独特ですが、佛家にも独自の修煉方法があります。法輪功はほかでもなく佛家気功の高い次元における修煉大法です。講習会では、わたしはまず皆さんの身体を、高い次元を目指して修煉できるような状態に調整してあげます。それから皆さんの身体に法輪と気機を植え付け、そのうえで皆さんに功法をお教えします。この他に、わたしには皆さんを守る法身もあります。しかし、功を伸ばす目的を達成するには、それでもまだ足りません。皆さんには高い次元における修煉の道理をも理解してもらわなければなりません。それが本書が語ろうとする内容なのです。

わたしは高い次元で功を講義しますので、どの脈、どのツボ、どの経絡を修煉するのかは語りません。わたしが述べようとするのは修煉大法のことで、本当に高い次元を目指して修煉する大法のことです。初めは摩訶不思議のように聞こえるかもしれませんが、気功修煉に志のある人は、注意深く悟ろうとさえすれば、あらゆる奥義がおのずと見えてくるのです。

# 一、気功の源流

　われわれが現在気功と言っているものは、そもそも気功とは呼びませんでした。それは中国古代人の単独修煉、または宗教の修煉に由来しています。『丹経』や『道蔵』、『大蔵経』を全てつぶさに調べてみても、「気功」という二文字は見あたりません。現在の人類文明は現段階の発展してきた過程において、原始宗教の時期を経ました。宗教が生まれる前に、気功はすでに存在していましたが、宗教が現れてから、それはある程度の宗教色を帯びるようになりました。それの本来の名前は修佛大法や修道大法でした。その他にも、九転金丹術、羅漢法、金剛禅などの類いの名前も持っていました。われわれが現在それを「気功」と呼んでいるのは、現代人の意識によりよく合わせるためであり、社会で普及しやすいようにするためであって、実際はそれは、我が中国における正真正銘の人体修煉のものなのです。

　気功は今期の人類文明が発明したものではなく、かなり悠久の歴史を持っています。では気功はいつ頃生まれたのでしょうか？　気功はすでに三千年の歴史を有し、唐の時代には最盛期に達していたと言う人もいれば、五千年の歴史を持ち、中華民族の文化と同じように悠久だと言う人もいます。あるいは、出土した文物から見て、七千年の歴史を持っていると言う人もいますが、実は気功は現代人類が発明したものではなく、先史文化なのです。功能を持つ人が調べたところによれば、われわれが暮らしているこの宇宙は九回の爆発を

経た後にできあがったものだといいます。われわれがいるこの天体はすでに度重なる壊滅に見舞われてきました。天体が新たに組み合わされてから、人類も新たに発生するようになります。今、われわれはすでに、現代文明を超える多くのものを発見しています。ダーウィンの進化論に従えば、人類は猿から進化してきたので、文明はたかだか一万年を超えていないはずです。ところが、出土した文物から、ヨーロッパのアルプス山脈の洞窟で、二十五万年前の壁画が見つかりました。その芸術的鑑賞価値の高さは、現代人も及ばないものです。また、ペルー国立大学の博物館にひとつの大きな石があり、その石には、望遠鏡を手にして天体を観察する人が刻まれています。この彫刻は三万年も前のものです。皆さんもご存じのように、ガリレオが一六〇九年に三十倍の天体望遠鏡を発明してから今日まで、せいぜい三百年余りの歴史しかないのに、三万年も前にどうして望遠鏡などありえたのでしょうか？　インドには、鉄の純度が九十九パーセント以上に達している鉄の棒があります。現在の冶金(やきん)技術をもってしてもこれほど純度の高い鉄を精錬することはできません。そのレベルはすでに現在の技術水準を上回っていました。誰がこのような文明を創り出したのでしょうか？　人類はその頃はもしかするとまだ微生物に過ぎなかったのに、どうしてこのようなものを作り出すことができたのでしょうか？　これらのものの発見は、世界各国の科学者の注目を集めました。ただ、解釈のしようがないので、「先史文化」と呼ばれることになりました。

それぞれの時期の科学水準はいずれも異なっていました。われわ

れ現代人類の水準を上回る、相当高い時期もありましたが、その文明は壊滅しました。わたしが、気功はわれわれ現代人の発明でも、現代人が作り出したものでもなく、現代人がそれを発見し改善したに過ぎず、本来は先史文化だ、と言っているのはそのためです。

気功は我が国独特のものではなく、外国にもあります。しかし彼らはそれを気功とは言わず、アメリカやイギリスなどの西洋諸国では魔術と呼んでいます。アメリカに、実際は超能力のマスターである魔術師がいて、万里の長城の壁を通り抜けるパフォーマンスを披露しました。通り抜ける時、彼は白い布をかぶり、自分を壁にくっつけるようにしてから通り抜けたのです。どうして彼はこんなことをしなければならなかったのでしょうか？　こうすれば、魔術に見えるからです。彼はそうせざるを得ませんでした。彼はわれわれ中国にレベルの高い人がたくさんいるのを知っており、妨げられるのを恐れたので、自分を隠してから入らなければなりませんでした。出てくるときは、片手を伸ばして、布を突き上げてから出てきたのです。「玄人は肝所を見、素人はうわべを見る」、こうすれば観衆は彼が魔術をやっていると思うのです。彼らがこれらの功能を魔術と呼ぶのは、それを用いて身体を修煉するのではなく、舞台でパフォーマンスをやって人を驚かせ喜ばせるからです。したがって、低い次元から言えば、気功は人間の身体の状態を変え、病気治療と健康増進の目的を達しますが、高い次元から言えば、気功は本体を修煉することを意味するのです。

# 二、気と功

われわれが現在「気」と呼んでいるものを、古代人は「炁（ちー）」と称していました。本質は同じで、いずれも宇宙の気を指し、宇宙の中の姿かたちのない物質を指しています。それは空気の気を意味しているのではありません。人体は修煉を通して、この物質のエネルギーを活かせば、人体の状況を変え、病気治療と健康増進に至らすことができます。しかし、気は気にほかならず、あなたに気があれば、ほかの人にも気があり、気と気の間に制約作用はありません。気で病気治療ができる、あるいは誰それに向かって気を発して、その人の病気を治すと言う人がいますが、これらの言い方はきわめて非科学的です。なぜなら気はまったく病気の治療に役に立たないからです。煉功者の身体にまだ気がある間は、その人の身体はまだ乳白体になっておらず、まだ病気があるということを意味します。

煉功の高い次元に達する人から発せられるのは、気ではなく、高エネルギーの固まりであり、光のかたちで現れる高エネルギー物質であり、粒子は非常に細かく、密度が非常に高いものです。これが功で、この時になってはじめて常人に制約作用を持つことができ、人の病気を治療することができるようになります。「佛光が普（あまね）く照らし、礼儀が圓明となる」という言葉がありますが、正法修煉者の場合は、身体に持つエネルギーがきわめて大きいので、彼の通過するところ、彼のエネルギーの届く範囲内で、一切の不正常な状態を正常な状態に正すことができる、ということを意味しています。たとえば人の身体に

病気があるというのは、身体に不正常な状態があるということであり、その状態を正せば､病気も消えることになります。分かりやすく言えば、功とはエネルギーのことです。功は物質性を持っており、煉功者は修煉を通して、その客観的な存在を実際に体感することができます。

# 三、功力と功能

### (一) 功力は心性の修煉によって得るものである

本当に人間の功力(こうりき)の次元を決める功は「煉」によって得るものではなく､「徳」という物質から転化され、心性(しんせい)を修めることによって得られるものです。この転化の過程は常人が想像するような「鼎(かなえ)を立て竈(かまど)を設け、薬を採集し、丹を煉る」ことによって得られるものでもありません。われわれの言う功は、体外で生まれ、人体の下半身から始まって、心性の向上に従って螺旋状に伸びていくもので、完全に体外で形成され、それから頭のてっぺんで功柱をなすものです。功柱の高さがその人の功の高さを決めます。功柱は非常に見えにくい空間にあるものなので、一般の人には簡単には見えません。

功能は功力によって加持されるものであり、功力が高く、次元が高い人なら功能も大きく、使い勝手も自由自在、功力の低い人なら功能も小さく、使い勝手も思う通りにいかず、あるいはまったく使えないことすらあります。功能自体はその人の功力の大きさや次元の高さを表すものではありません。人の次元の高さを決めるのは功力であって

功能ではないのです。「鍵を掛けられて」修煉している人もおり、功力が非常に高くても、功能は必ずしもそれほど持っているとは限りません。功力は決定的な役割を果たすものであって、心性の修煉によって得られるものですが、これこそがもっとも肝要なものなのです。

## （二）功能は煉功者の求めるものではない

すべての煉功者は功能に関心を寄せており、神通力は社会で非常に誘惑力がありますので、多くの人は何らかの功能を身につけたがります。しかし、心性が良くなければ、こうした功能は身に付くわけがありません。

一部の功能、たとえば天目（てんもく）が開く、天耳（てんに）が通じる、テレパシーが使える、予測する、などの功能は、常人でも持ちうるものです。しかしこれらの功能は人によって異なり、漸悟（ぜんご）状態にいる間はすべて所持することはありえません。一部の功能は常人が持ちえないものであり、たとえば現実空間の物体を別の種類の物体に転換させるなどは、常人にできないことです。大功能は、修煉によって後天的に得られるものです。法輪功は宇宙の原理に従って演化してきたものなので、宇宙に存在する功能は法輪功にすべて備わっており、煉功者がいかに修煉するかにかかっています。何らかの功能を身につけたいと思うことは、間違っているとは言えません。しかし、過度に追求しすぎると、普通の考え方ではなくなり、良くない結果を招きかねません。低い次元で功能を得てもあまり用いるところがありません。しょせんそれを披露し、常人の前で腕をひけらかして、常人の中の強者になりた

がるだけです。もしそうならば、まさに心性が高くないということですので、当然功能を与えてあげるわけにはいきません。一部の功能は、もし心性の良くない人に与えれば、悪事を働くのに用いられてしまいます。心性がしっかりしていなければ、悪事を働かないという保証がないからです。

一方、およそパフォーマンス用に表に出せる功能は、どれも人類社会を変えるのに用いることができず、正常な社会生活を変えることができません。本当の高い功能は、影響と危険が大きいので、パフォーマンスに用いてはいけません。建物をパフォーマンスで倒してはならないのと同じです。特別大きな功能に関しては、特殊な使命を負っている人なら使わせてもらえますが、さもなければ使用することが許されず、表に出せるわけもありません。師によって制御されているからです。

しかし常人のなかに、是が非でも気功師に腕を披露させ、強引に実演させる人がどうしてもいます。功能のある人は皆、功能を見せびらかそうとはしません。それは公に持ち出してはならないものであり、公に持ち出すと社会全体の状態に影響を及ぼしかねないものだからです。本当の大徳の人の場合、彼の功能は公に持ち出すことが許されません。嫌々ながら実演させられて、家に戻ると泣かんばかりに悔しがる気功師がいます。彼らに実演を強要しないでいただきたいのです！　彼らにとってそういうものを持ち出すのは非常に辛いことなのです。ある時、ある学習者が雑誌を持ってきたのですが、それを読んでわたしは非常に反感を覚えました。それにはおおよそこんなこ

とが書いてありました。国際気功会議を開催するので、功能のある者は試合に参加してほしい。功能の強い者を募る、と言うのです。それを見てから、わたしは何日も気分がよくありませんでした。そういうものは試合に用いてはいけないもので、用いると必ず後悔することになります。常人というものは、世間の現実のものを重んじますが、気功師は自重しなければなりません。

功能を求める目的は何でしょうか？　煉功者の思想境地と煉功者が何を追求しているかがそこに表れています。心のなかで求めるものが不純であったり、危ういものであったりすると、高い功能を得ることはありえません。それにはわけがあります。つまりまだ悟りを開かないうちは、あなたに見えた物事の善し悪しは、世間の法の善悪の基準に基づいているものであって、物事の真相も因縁関係もあなたには見えません。人と人との間の喧嘩やいじめには、必ず因縁関係があるのですが、それが見えなければ、あなたはかえって相手にとってありがた迷惑なことをしてしまうことになります。常人の間のいざこざや善し悪しは、世間の法に任せればよいのであって、煉功者が口を出すものではありません。悟りを開く前に、あなたに見えた物事の真相は必ずしも見えたとおりのものとは限りません。誰かが誰かを一発殴った場合は、もしかすると彼らの間で「業（ごう）」を清算しているのかもしれません。ですからあなたが口を出すと、彼らの間の「業」の清算を邪魔してしまうことになるかもしれません。「業」は、身体のまわりにある黒いもので、別の空間の物質的存在です。それは病気や災（わざわ）いに転化されることがあります。

功能は誰にでもあります。問題は絶え間ない修煉によってそれを開発し、強化することです。煉功者として、もし功能ばかり求めるならば、それは近視眼的で、思想が不純ということになります。功能を求めれば、それがどんな目的であれ、そのなかに必ず私心が含まれており、間違いなく煉功を妨げます。そうなれば結局、功能が得られないことになります。

### （三）功力の制御

煉功者のなかに、それほど煉功もしていないのに、本当に効くかどうか確かめたいがために、人の病気を治そうとする人がいます。功力の高くない人の場合は、手を出してちょっとやってみただけで、患者の体内のおびただしい黒い気や病の気、濁（にご）った気を自らの身体に取り込んでしまいます。あなたには病の気を防御する能力はなく、身体に防御の覆（おお）いができているわけでもないので、患者と一つの場を形成してしまいます。功力が高くなければ防御することができず、自分が非常に辛い思いをします。もし見守ってくれる人がいなければ、時間が経つと、体中病気だらけになってしまいます。つまり、功力の高くない人は、他人のために病気治療を行ってはいけません。すでに功能を備え、一定の功力を持っていてはじめて、気功で病気治療をすることができるのです。一部の人は功能を備え、病気治療をすることができますが、非常に低い次元にいる間は、実際は蓄えていた功力で、自分自身のエネルギーで病気治療を行っているのです。なぜなら功はエネルギーであり、霊体にほかならず、ちょっとやそっと

で蓄えられるものではないからです。この功を体外に出すということは、自分を消耗していることにほかなりません。体外に功を発するにつれて、あなたの頭上の功柱の高さが縮み、消耗されていきますので、これは非常に割の合わないことです。ですからわたしは、功力が高くないときに人のために病気治療をすることをお勧めしません。あなたがたとえどんなに腕が良いとしても、自分自身のエネルギーを消耗しているに過ぎません。

功力が一定のレベルに達すると、さまざまな功能が現れてきますが、これらの功能を如何に用いればよいかについては、非常に慎重を要することです。たとえば天目が開いた場合は、見ないわけにもいきませんし、ずっと用いなければ、閉じてしまいかねません。ただ、見るにしてもしょっちゅう見てはいけません。過度に見るとエネルギーもそれだけ多く漏れてしまいます。それでは、皆さんに永遠に用いないようにと言っているのかというと、もちろんそうではありません。もし永遠に用いないのであれば何のために修煉するのでしょうか？　問題はどんなときに用いるかにあります。修煉が一定のレベルに達し、自分で補(おぎな)う能力が備わったときには、用いても大丈夫です。法輪功では修煉が一定のレベルに達すれば、放出された功の分だけ、法輪が自動的に演化してそれを補い、自動的に煉功者の功力の水準を保ってくれるので、一時たりとも減ることはありません。これが法輪功の特徴です。このときになってはじめて、功能を用いることができます。

# 四、天目

## （一）天目を開く

天目の主要通路は、額（ひたい）の真ん中と山根（さんこん）との間にあります。常人が肉眼で物を見るのは、カメラの原理と同じで、距離の遠近と光線の強弱によって、ガラス体あるいは瞳孔の大きさを調節し、神経細胞を通して画像を大脳後半部の松果体に送り、そこで顕現させます。特異功能による透視というのは、松果体が天目を通じて直接外を見るようにすることです。一般の人は天目が開いておらず、主要通路上の隙間は非常に狭くて黒く、中に霊気もなく、光もありません。人によっては塞がっているため見えない場合もあります。

われわれの言う「天目を開く」とは、一つには、外力あるいは自分の修煉によって通路を開かせることです。通路の形は一人一人異なり、楕円形であったり、円形、菱形、三角形であったりしますが、修煉が進むにつれて丸くなります。二つには、師が目を与えてくれることです。自分で修煉する場合は自分でその目を修煉しなければなりません。三つには、天目の部位に精華（せいか）の気がなければならないことです。

通常われわれは両目で物を見ていますが、まさにこの両目がわれわれの他の空間への通路を遮断しています。それは障壁となって、われわれがこの物質空間の物しか見えないようにしています。天目を開くというのは、この両目を避けて見ることにほかなりません。非常に高い次元に到達すれば、修煉によって真眼を得ることができますが、そうなれば天目の真眼あるいは山根のあたりの真眼で見ることが

できるようになります。佛家の言い方に従えば、どの毛穴も目であり、全身が目ですし、道家の言い方に従えば、どのツボも目だということになります。しかし主要通路は天目にあり、まずそれを開かなければなりません。講習会で、わたしは全員に天目を開くためのものを授(さず)けました。一人一人の身体の素質が異なるため、現れる効果も違います。深い井戸のような真っ暗なトンネルを見た人がいますが、それは天目の通路が黒いということです。白い通路を見た人がいますが、もしその先に物が見えた場合は、いよいよ開かれようとしているということです。何かが回転しているのを見た人がいますが、それはほかでもなく師が授けてくれた天目を開くためのものであり、天目が開削(かいさく)され貫通すれば、それで見ることができるようになるのです。また、天目を通して大きな目が見え、それを佛眼だと思った人がいますが、実際は自分自身の目なのです。これは普通、先天の根基(こんき)が比較的良い人の場合です。

　われわれの統計によれば、どの講習会でも天目が開いた人は半数以上に上ります。天目が開いたあと、心性の高くない人がそれを使って悪いことをしかねない、という問題が起きてきます。ですからこれを防ぐために、わたしは皆さんの天目を直接慧眼通(えげんつう)の次元まで開かせています。つまり高い次元まで開かせて、直接他の空間の様相や、煉功中に現れてくるものが見えるようにしてあげるのです。そうすれば皆さんはそれを信じて、煉功への自信を強めるようになります。煉功を始めたばかりの人は、心性がまだ常人を超える高さまで至っていないため、いったん常人を超えるものを手にすると、良くないことをし

かねません。たとえば冗談ですが、もしあなたが町を歩いていて宝くじを見かけたとしたら、一等賞はあなたにとられてしまうかもしれません。たとえばこういうことが起こりうるのですが、こんなことは許されません。もう一つの理由として、われわれはここで広範囲にわたって天目を開かせているのですが、もし低い次元に開かせてしまえば、考えてごらんなさい、誰でも人体を透視でき、壁を隔てて物を見ることができるようになります。そのようなものを人類社会といえるでしょうか？　そんなことをすれば、常人社会の状態を甚だしく混乱させることになりますので、許されません。しかもそれでは煉功者にとってためになるところがなく、煉功者の執着心を助長するだけです。ですから低い次元に開かせずに、直接高い次元まで開かせてあげるのです。

## （二）天目の次元

天目にはさまざまな次元があります。次元が違えば、見える空間も異なります。佛教の言い方に従えば、「五通」、つまり「肉眼通（にくげんつう）」、「天眼通（てんげんつう）」、「慧眼通（えげんつう）」、「法眼通（ほうげんつう）」、「佛眼通（ぶつげんつう）」があり、どの次元にもさらに、上、中、下の区別があります。天眼通以下の次元では、われわれのこの物質世界しか見えません。慧眼通以上の次元に達してはじめて、他の空間が見えます。透視功能を持ち、CT スキャンよりもきれいに、しかも非常に正確に見ることのできる人がいますが、その人に見えたのは、相変わらずわれわれのこの物質世界なのです。つまり、われわれが存在するこの空間を超えてはおらず、天目の高い

次元だとは言えません。

人の天目の次元の高さは、その人の持っている精華の気の量と主要通路の広さ、明るさおよび通路の塞がりぐあいによって決まります。天目がきれいに開くかどうかは、内部の精華の気が肝心な要素となります。六歳以下の子供にとって、天目を開くのはいたって簡単なことで、わたしが何もせずとも、一言言えば開きます。子供は先天的に物質世界の良くない影響をほとんど受けておらず、自分でも何も悪いことをしていないため、その先天の精華の気が非常によく保存されているからです。六歳以上の子供になりますと、天目がだんだん開きにくくなります。年齢の伸びとともに、外界の影響も多く受けるようになったからです。とりわけ良くない後天の教育や放縦(ほうじゅう)などはいずれもその人の精華の気を散逸(さんいつ)させることになり、ある程度に達すると、散逸し尽くすかもしれません。精華の気が散逸し尽くした人は、後天の煉功によって徐々にそれらを補うことができますが、非常に長い時間がかかり、たいへん苦労することになります。このように、精華の気はきわめて貴重なものなのです。

わたしは人の天目を天眼通の次元に開かせるのに反対です。なぜなら、煉功者の功力が大きくないときは、透視をするのに必要なエネルギーが煉功の間に蓄えたエネルギーより多いからです。霊気が散逸しすぎると、天目が再び閉じてしまいかねません。いったん閉じると再び開くのが難しくなります。ですからわたしは普通、人の天目を慧眼通の次元まで開かせるのです。きれいに見えるかどうかは別として、ともかく修煉者は他の空間のものが見えるようになります。先

天的な条件によって、とてもきれいに見える人もいれば、ちらちらとしか見えない人もおり、はっきり見えない人もいますが、少なくとも光が見えるようにはしてあげられます。こうすれば、煉功者は高い次元へ向けて進みやすくなります。もし、きれいに見えなければ煉功を通して後天的に補っていけばよいのです。

精華の気が足りない人の場合、天目で見た光景は白黒であるのに対して、精華の気の比較的多い人の場合は、天目で見た光景はカラーであり、見えた光景もいっそう鮮明になります。精華の気が多ければ多いほど、鮮明度が高まります。しかし、人によってそれぞれ違います。天目が生まれつき開いている人もいれば、固く塞がっている人もいます。天目が開くときの光景は、あたかも花が咲くように、一重ずつ開くのです。坐禅をしているとき、まず天目に光の束があるのに気がつきます。初めはあまり明るくありませんが、その後次第に赤くなります。天目が固く閉ざされている人の場合は、開く際に激しい反応が起きることがあります。主要通路と山根のあたりの筋肉がぎゅっと収縮し、まるでそこの肉が一つに固まって中へ押し入ろうとしているかのようです。それからこめかみと額が張り、痛み出すのですが、これらはいずれも天目を開くときの反応です。天目が容易に開く人は、偶然に何かが見えることがあります。講習会で無意識のうちにわたしの法身を見た人がいますが、意識的に見ようとすると消えてしまいます。実はそれは目で見たからです。目を閉じているときに何かが見えた場合は、そのままの状態を保っていてください。次第にきれいに見えるようになります。ところが、はっきり見ようと意識してしまえば、目を働

かし、視神経を通したことになりますので、見えなくなってしまいます。

天目の次元が違えば見える空間も異なるのですが、この道理を理解していない科学研究機関があるため、一部の気功テストが予期された効果を得られず、さらには逆の結果を招いてしまうこともあります。たとえばある機関が特異功能を測定する方法を考案して、密封した箱の中に何が入っているのか気功師に当ててもらったのですが、気功師の天目の次元が異なっていたため、結果もまちまちでした。そこで、テストをした人は、天目なんて嘘で、人を騙すものだと思い込みました。このようなテストでは、往々にして天目の次元の低い人が透視で良い結果を出せます。なぜならその人の天目は天眼通の次元にとどまっており、物質空間の物事を見ることにしか向いていないからです。それで天目の分からない人は、その人の功能が最高だと思ってしまいます。どんな物体でも、それが有機物であれ無機物であれ、異なる空間では異なる様相を呈するのです。たとえば一つのコップでも、それが作り出されたときに、すでに一体の霊体が他の空間に同時に存在しています。しかもこの霊体はそこに現れる以前は別のものだった可能性もあります。天目のもっとも低い次元で見えるのはコップですが、一つ上の次元で見えるのは他の空間のその霊体であり、さらに高い次元から見えるのはその霊体より以前の物質形式です。

### （三）遠隔透視

天目が開いたあと、遠隔透視ができるようになる人がおり、千里隔たった遙か遠い空間の物が見えるのです。人はそれぞれ自分の占

める空間があり、その空間においてその人は宇宙のような大きさをしています。そしてその特定の空間では、その人の額にわれわれのこの空間では見えない一枚の鏡があります。この鏡は誰でも持っているのですが、ただ煉功しない人の場合、裏返しになっています。ところが、煉功する人の場合はこの鏡が次第に表向きになり、彼が見ようとする物を照らし出すことができます。その人の特定の空間では、その人はかなり大きいのです。体が大きければ、この鏡も非常に大きく、見たい物を何でも照らし出せます。しかし照らし出せてもまだ見えません。画像は鏡にしばしとどまります。鏡は回転するので、照らし出した物体をちらっと見せては裏返し、そしてまたすばやく裏返すというように、繰り返し反転します。映画のフィルムは一秒二十四コマで連続した動作を映し出せますが、鏡の反転の速度はそれよりも速いので、見た目ではつながっており、非常にきれいに見えます。これが遠隔透視です。遠隔透視の道理はこんなにも簡単なものなのです。これらはみな秘密の中の秘密ですが、わたしは二言三言でそれを明らかにしました。

## (四) 空間

空間は、われわれには非常に複雑なものに映ります。われわれ人類は人類が現在存在する空間しか知らず、その他の空間についてはまだ探り出す手だてがありませんが、われわれ気功師はすでに数十次元もの空間を見ました。理論の上でもそれを説明できます。しかし科学ではまだそれを証明することができません。一部のものはあなた

がその存在を認めなくても、すでにまぎれもなくわれわれの空間に反映されてきました。たとえば、世界にバミューダ群島というところがあり、魔の三角地帯と呼ばれています。船がそこへ行くと行方不明になり、飛行機がそこへ行くと消えてしまいますが、数年後再び現れてきます。誰もその原因を説明できませんし、現人類の思考論理を超えることもできません。実はそれはほかでもなく他の空間への通路なのです。そこにはわれわれの門のようなきちんとした門があるわけではなく、陰陽がくいちがえばそういう状態になるのです。ですから、ちょうど陰陽のくいちがいにより門が間違って開いているときに船が出くわしてしまえば、簡単に入ってしまいます。人間はこの空間の差を感じられないので、一瞬のうちに入ってしまうのです。それとわれわれの時空との差は、距離で表すことができません。十万八千里のような距離は、そこではほんのわずかなもので、同じ時間、同じ空間に存在しています。船が入ってしばらくゆらゆらすると、陰陽のくいちがいによりまた出てきます。しかしこの世ではすでに数十年が過ぎ去っています。二つの空間の時間が異なるからです。どの空間にもさらに単元世界があります。あたかもわれわれの描く原子の構造図のように、一つの球に一本の連結線があり、どこまでも球がつながり、どこにも連結線がありますので、きわめて複雑です。

第二次世界大戦の四年前に、イギリス空軍のあるパイロットが任務遂行中に、暴風雨に出会いましたが、日頃の経験に頼って廃棄された空港を見つけました。空港が目の前に現れたとき、突然、空一面雲ひとつないというまったく違う光景が現れ、まるで別の世界から

抜け出してきたかのようでした。空港にある飛行機はすでに黄色に塗り上げられ、地面では人々が忙しく動き回っていました。彼は非常に不思議に思いました！　着陸してからも誰もかまってくれる人がいないし、管制塔も彼と交信しようとしません。空も晴れてきたのでさあ帰ろうかと、彼はまた飛び立ちました。空港を飛び去って、先ほど空港が見えたあたりに来ると、またもや暴風雨の中に飛び込みましたが、結局なんとか帰ることができました。彼は一部始終を報告し、飛行記録も書きましたが、上司は信じてくれません。四年後、第二次世界大戦が勃発し、彼はその廃棄された空港へ配置転換されたのですが、たちまち四年前の光景が思い出され、目の前のとそっくりだったということに気がつきました。われわれ気功師にはこれがどういうことなのかよく分かります。彼は四年後のことを先んじて一通りしてきたにほかなりません。時間に先んじてそこへ行って一幕を演じてきたわけで、第一幕がまだ始まらないうちに先に一幕を演じてきて、それから戻って順番通りに演じるわけです。

## 五、気功治療と病院治療

理論から言って、気功治療と病院治療とはまったく違います。西洋医が病気を治療する際に用いるのは、化学検査であれレントゲン検査であれ、常人社会の手法ですので、この空間における病の様相しか観察することができず、他の空間の信息を見ることも、発病の原

因の所在を見ることもできません。もしその病気が比較的軽ければ、薬物で病原（西洋医で言う病毒、気功で言う業）を殺したり追い払ったりできます。しかし、病気が重い場合、薬物が役に立たなくなり、薬物の量を増やせば患者が耐えられなくなります。なぜなら病気というのは、全部が全部世間法の枠にとどまっているものではなく、一部の病気はかなり重く、世間法の範囲を超えており、病院では治療できないからです。

漢方は、我が国伝統の医学であり、人体の修煉や特異功能と一体となっています。古代では人体の修煉を非常に重視し、儒家をはじめ道家、佛家、さらには儒学生までも坐禅を重んじていました。坐禅は一種の功夫であり、煉功をしていなくても、時間が経つうちに、功と功能をもつようになります。漢方の鍼灸（しんきゅう）はなぜ人体の経絡についてあれほどはっきり分かっているのでしょうか？　ツボとツボがなぜ横につながらないのか？　なぜ交錯してつながらないのか？　なぜ縦につながっているのか？　どうしてあんなに正確に描かれているのでしょうか？　現代の特異功能をもつ者が目で見たものと漢方が描いたものとは一致していますが、それは古代の名医がたいてい特異功能をもっていたからです。我が国の歴史上における李時珍（りじちん）をはじめ、孫思邈（そんしばく）、扁鵲（へんじゃく）、華佗（かだ）などは、実はみんな特異功能をもつ気功大師でした。漢方は今日まで伝えられてくる間に、功能の部分を失い、手法のみが残りました。昔、漢方は目（特異功能を含む）で診察を行なっていましたが、その後、脈を見る方法が考案されました。もし漢方の治療方法に特異功能の方法が加われば、あと何年経とうと西

洋の医学は中国の漢方に追いつけません。

気功による治療とは、根本から発病の原因を取り除くことです。わたしに言わせれば、病気とは一種の「業」であり、それを治療するのは、業を消す手助けをすることにほかなりません。病気の治療に際して黒い気を追い出すことを重んじる気功師がおり、気の排出と補給により、ごく浅い次元では黒い気を追い出すことができたとしても、彼には黒い気を生み出す根本的な原因が分かりません。ですから黒い気が再び戻り、病気が再発します。実は、黒い気が発病の原因ではなく、黒い気がその人に苦痛を与えているだけです。その人に発病させている根本的な原因は、他の空間に霊体があるからです。多くの気功師はこのことが分かりません。その霊体が非常に手強いものなので、普通それにはさわれませんし、さわる勇気もありません。法輪功は病気を治療するとき、その霊体に照準を定めて、発病の根本原因となるものを取り除き、しかも病気のあった部位に覆いをかけ、病が再び侵入しないようにするのです。

気功は病気を治療することができます。しかし、常人社会の状態を撹乱するわけにはいきません。もし広範囲にわたってそれを用いれば、常人社会の状態を撹乱することになります。そんなことは許されませんし、良い効果も得られません。皆さんが知っているように、およそ気功診療所や、気功病院、気功リハビリセンターを開設する場合、開設されるまでは治療効果がけっこう悪くないかもしれませんが、いったん開業して病気治療を始めると、効果ががたっと落ちてしまいます。つまり、超常の法で常人社会の職能を代行することは許され

ないということです。そういうことをすれば、間違いなく常人社会の法と同じ低さになりさがります。

特異功能で人体を透視する場合、スライスするように、一つ一つの断面を見ることができ、軟体組織や身体のいかなる部位をも見ることができます。現在のCTスキャンは、はっきり見ることができますが、しかしそれはなんといっても機械を使っており、非常に時間がかかります。多くのフィルムを使いますし、時間もお金もかかります。人間の特異功能はそれに比べて便利であり、正確です。気功師は目を閉じてちらっと見ただけで、患者のいかなる部位をも直接見ることができます。これは、現代の科学技術よりも進んだ高度な科学技術だといえませんか？　しかし、実は中国の古代ですでにこのような水準に達していました。つまり、これは古代からあった高度な科学技術なのです。華佗は曹操(そうそう)の頭のなかに腫瘍があるのが見えて、手術をしてあげようとしました。曹操はそれを受け入れることができず、自分を殺害しようとしているのだと思いこみ、華佗を捕まえましたが、結局曹操は脳の腫瘍で亡くなりました。歴史上の多くの偉大な漢方医にはみな特異功能がありましたが、現代社会では人々が過度に現実のものを求めているために、古い伝統が忘却されているだけです。

われわれの高い次元における気功修煉は、伝統的なものを改めて認識し、再び人類社会に幸福をもたらすように、実践においてそれを継承し、広めていこうとすることです。

# 六、佛家気功と佛教

われわれが佛家気功と言うと、多くの人がすぐに、佛家が佛道を修めるものだというように連想し、佛教の中のことを思い浮かべます。しかし、ここではっきり断っておきますが、法輪功は佛家気功であり、正伝(しょうでん)大法であって、佛教とはかかわりがありません。佛家気功は佛家気功であり、佛教は佛教です。修煉の目的は同じですが、歩む道は違いますし、同じ法門ではなく、要求も異なります。ここで「佛」という字に触れておきましょう。高い次元で功を説くときに再びこれに触れることになるのですが、それ自身には何も迷信的な色彩はありません。「佛」と聞けば大騒ぎし、あなたが迷信を宣伝していると責める人がいますが、そんなことはありません。「佛(フォー)」はもともと梵語(ぼんご)で、インドから伝わってきたものであり、「佛陀(フォートゥー)」(Buddha) という音訳の二文字でしたが、「陀」が省略されて、「佛」になりました。中国語に翻訳すれば、「覚者」、すなわち悟りを開いた人ということになります (『辞海』)。

## (一) 佛家気功

現在伝えられている佛家気功は、二種類あります。一つは佛教から分離したもので、数千年の発展の過程で、多くの高僧を輩出しました。彼らは、修煉によって非常に高い次元まで達したときに、師からなんらかのものを授かって、さらに高い次元の直伝を得ます。これらのものは昔、佛教の中では一人にしか伝えませんでした。高僧がい

よいよこの世を去ろうとするときになって、はじめて一人の弟子に伝えるものであり、それは佛教の理論に従って修煉し、全体の向上を目指すものです。たしかにこのような気功は、佛教と密接なつながりがあるように見えます。その後、たとえば「文化大革命」のときに、僧侶たちが寺から追い出されたので、これらの功法は民間に落ち、民間で大いに発展しました。

もう一つも佛家気功ですが、この佛家気功は歴代において、佛教とかかわりをもったことがなく、ずっと民間あるいは山奥で静かに修煉していました。このような功法には独特なところがあって、いずれも良い弟子、本当に高い次元へ修煉できる大徳をもった人を選ぶのが条件となっています。このような人は、長い間に一人しか現れません。この功法は公にされてはならないものであって、心性に対する要求が高く、功の伸びもきわめて速いのです。このような功法は数多くあります。これは道家も同じであり、同じく道家功でありながら、崑崙(こんろん)派、峨嵋(がび)派、武当(ぶとう)派などなどの区別があります。どの派にもさらに違う法門があり、どの門の功法も大きく異なっており、混同して修煉してはいけません。

## (二) 佛教

佛教は二千年あまり前に、釈迦牟尼(しゃかむに)がインドに本来あった修煉の基礎をふまえて自ら証悟した、修煉方法です。それを概括すれば、「戒(かい)・定(じょう)・慧(え)」の三文字にまとめることができます。「戒」は「定」のためにあります。佛教は煉功を唱えませんが、実際は煉功しており、

「定」になってそこに坐ればすなわち煉功です。なぜなら人間が静の状態に入り、入定すれば、宇宙のエネルギーが彼の身体に集まり、煉功の役割を果たすことになるからです。佛教の「戒」は、常人のもつ欲望を断ち、常人が執着するあらゆるものを捨て去ることであり、それによって清静無為の状態に達すれば、「定」に入ることができます。そして、「定」のなかで絶えず次元を高めていくと、悟りを開き、慧を開き、宇宙を認識して、宇宙の真相を見ることになります。

釈迦牟尼は伝法を始めた頃、一日に三つのことしかしませんでした。説法し（主に羅漢法を伝えた）、弟子に法を聞かせること。鉢（お椀）を持ってお布施を乞う（乞食をする） こと。そして坐禅して実際に修行することの三つです。釈迦牟尼がこの世を去ったあと、バラモン教と佛教の闘いが起こり、結局二つの宗教が一つにまとまって、ヒンズー教となりました。ですから、現在のインドには佛教がありません。その後の発展と変遷の中で、大乗佛教が現れました。中国内地に伝わった現在の佛教がそれです。大乗佛教は釈迦牟尼のみを始祖として信仰するのではなく、多佛信仰であり、多くの如来や阿弥陀佛、薬師佛などを信仰します。戒律も増え、修煉の目標も高くなりました。当時、釈迦牟尼が個別の弟子の間に菩薩法を伝えたことがありますが、後にそれらのものが整理され、今日のような菩薩界を修める大乗佛教に発展しました。現在の東南アジアあたりでは、依然小乗佛教の伝統が守られており、神通力によって法事を行っています。佛教の変遷の過程で、一つの流派が我が国のチベットに伝わり、藏密（ぞうみつ）と称されるようになりました。また、新疆（しんきょう）を経て漢民族の地域に伝わった

流派があり、唐密 ( 会昌年間「滅佛」の後に消失した）と称されています。いま一つの流派は、インドで形成された瑜珈功です。

佛教では、煉功を唱えず、気功もやりませんが、これは佛教の伝統的な修煉方法を守るためであり、佛教が広まって二千年以上経っても衰えない重要な要因でもあります。外来のものを受け入れなかったからこそ、それ自身の伝統を守りやすかったのです。佛教の修煉方法も完全に同じではありません。小乗佛教が自分自身の済度、自分自身の修煉に重きを置いているのに対して、大乗佛教は自分を済度し、他人も済度し、衆生を普く済度するよう発展してきました。

# 七、正法と邪法

## (一) 旁門左道

旁門左道は奇門修煉とも言います。宗教が現れる以前に、各気功はすでに存在していました。宗教以外の功法も民間で多く伝わっていますが、それらのほとんどは整った修煉体系を成しておらず、整った理論ももっていません。それに対して奇門修煉法には、系統的で完璧な特殊強化修煉方法があり、同じく民間で伝承されています。この類いの功法は通常、旁門左道と呼ばれます。どうして旁門左道と呼ばれるのでしょうか？　字面から見て、旁門とは別に開かれた門、左道とは不器用という意味です。佛、道両家の修煉法が正法で、その他の功法はみな旁門左道、あるいは邪法と思われていますが、実

はそうではありません。旁門左道は歴代、ずっと密かに修煉され、個別に伝承されており、人に見せてはいけないものなのです。ですから、たとえ公にされても、人々はそれをあまり理解できません。彼ら自身もその功法を「佛に非(あら)ず道に非ず」と称しています。その修煉方法には心性に対する厳しい要求があり、修煉は宇宙の特性に従って行われており、善を行うことや心性を守ることを重んじます。その中の優れた人は、みな奥の手をもっており、独特の技能にはすごいものがあります。わたしは奇門の優れた人三人に出会い、いくつかのものを伝授してもらいましたが、佛、道両家のどちらにも見られないものでした。これらのものは修煉の過程においていずれもかなり難しく、修煉して得た功も非常に独特なものです。それに対して、現在伝わっている一部のいわゆる佛、道両家の功法の中には、心性への厳しい要求をもたないものがあり、そのために高くへは修煉できません。ですから各家の功法に対しては、弁証的に見なければなりません。

### (二) 武術気功

武術気功は長い歴史のなかで形成されたもので、整った理論体系や修煉方法があり、独自の体系を成しています。しかし厳密に言えば、それは内修功法の最も低い次元に顕現した功能の現れです。武術修煉に現れた功能は、内修功法の中でみな現れるのです。武術気功の修煉は、気を練るところから始まります。たとえば石を割るとき、初めは腕を振り回して気を巡らせますが、時間が経てば、気が質的変化を起こして、ある種の光のようなエネルギーの塊を形成します。

この程度に達すれば、功は役に立つようになります。なぜなら功は高次物質であり、霊性を帯びているからです。それは大脳思惟の制御を受けますが、他の空間に存在しています。攻撃のとき、気を巡らせるまでもなく、思っただけで功がやってきます。修煉するにつれて、功はますます強化され、粒子が細かくなり、エネルギーが増大して、「鉄砂掌（てっさしょう）」、「朱砂掌（しゅさしょう）」のような功夫が現れるようになります。映画やテレビ、雑誌では、近年「金鐘罩（きんしょうとう）」、「鉄布衫（てっぷさん）」の技能が現れましたが、それは武術と内修功法を同時に修めた結果であり、内外兼修によって得られたものです。内修をするには、徳を重んじなければならず、心性を修めなければなりません。理論から言えば、その功夫が一定のレベルに達すると、功が体内から発せられ、体外に打ち放たれますが、密度が高いので、防護の覆いができあがります。理論的に言って、武術気功とわれわれの内修功法との最大の違いは、武術は激しい運動の中で修煉しており、入静（にゅうせい）が取り入れられていないということです。入静しなければ、気が皮膚の下を走り、筋肉を貫（つらぬ）きますが、丹田（たんでん）に入らないので、命（めい）を修めませんし、修めることもできません。

### （三）返修と借功

気功をやったことがないのに、一夜のうちに功を得る人がいます。その人はエネルギーがけっこう大きく、他人の病気も治すことができますので、人々から気功師とも呼ばれ、人に教えたりもしています。中には功法を習ったことさえない人もいますし、いくつかの動作を習っただけなのに、それをちょっとアレンジしてすぐ他の人に教える人もい

ます。このような人は、気功師と称する資格がなく、他人に伝承するものを何ももっていません。彼らの教えているものは、実際に高い次元を目指して修煉することができないもので、せいぜい健康増進と病気治療ぐらいのものに過ぎません。このような功はどのようにして湧いてきたのでしょうか?　まず「返修」についてお話しします。返修は、心性がきわめて高く、非常に良い人に見られます。普通は年をとっており、五十歳以上で、一から修煉させるにはもう間に合わず、性命双修の立派な師に出会うこともなかなか容易ではありません。そこで、その人が煉功しようと思いたったとき、上師が彼の心性の基礎に、かなり大きなエネルギーを加え、上から下へと逆方向に修煉させます。これでずいぶん速くなります。上師は空中で演化して、体外から絶えずその人にエネルギーを注ぎます。特にその人が病気治療を行ったり、大勢集めて何かしたりする場合、上師からエネルギーがパイプを流れるように送られてくるのですが、時々自分でもそれがどこから来たのか分かりません。これが返修です。

もう一つ「借功」というのがあります。借功は年齢に制限がありません。人間は主意識のほかに、副意識もあり、普通は、副意識のほうが主意識より次元が高いのです。副意識の次元がかなり高く、覚者と交流できる人もいますが、このような人が煉功しようとすると、副意識も次元を高めようと思うので、すぐさま大覚者と連絡をとって功を借りてきます。功を貸してもらったら、やはり一夜のうちに功が湧いてきます。功を得てからは同じく人の病気を治すことができますし、患者の苦痛を解いてあげることもできます。このような人は通常、大

勢の人を集めて治療活動を行いますが、個別にエネルギーを授けたり、手法を教えたりすることもできます。

普通、こういう人は、初めはけっこう立派です。ただ、功を身につけると、名声が広がり、名利とも手に入るようになります。そして名利が頭の中で大きな比重を占め、煉功を超えるようになりますと、それ以降功が堕ちはじめ、功がますます減り、しまいには何も残らなくなります。

## (四) 宇宙語

突然ある種の言語をしゃべり出す人がいます。けっこう流暢に操るのですが、それは人類社会の言語ではありません。どんな言語でしょうか？　それは宇宙語と言います。宇宙語とはいっても、あまり高くはない生命体の言語のひとつに過ぎません。目下国内で気功をやる人のなかに、このような状況が少なからず現れており、いくつもの違う言語を操ることができる人もいます。もちろん、われわれ人類社会の言語もかなり複雑で、一千種類以上あります。宇宙語は功能と言えるのでしょうか？　わたしはそうではないと思います。それは自分自身の功能でもなければ、外から与えられた功能でもなく、外来の生命によって制御されているものです。その生命体は比較的次元の高いところ、少なくともわれわれ人類より少し高いところから来ており、ほかでもなくその生命体がしゃべっているのです。宇宙語を口にする人間は単に媒介(ばいかい)の役割を果たしているに過ぎません。ほとんどの人は、何をしゃべっているのか自分でも分からず、「他心通(たしんつう)」を備えた

人だけが、おおよその意味を感じ取ることができます。功能ではないのに、多くの人が言うものだから、いい気になって大したものだとうぬぼれ、功能だと思い込んでしまいます。実際は、天目の次元の高い人には見えるのですが、その人の斜め上の方におしゃべりをしている生命体がいて、人の口を借りて話しているのです。

その生命体が人に宇宙語を教え、同時に功も一部伝えますが、しかしその人はそれ以降それに牛耳（ぎゅうじ）られてしまうことになるので、これは正法ではありません。その生命体はいくらか高い次元の空間にいるとはいえ、正法修煉ではないので、いかに修煉者に健康増進と病気治療のことを教えていいかが分かりません。ですからこのような方法を用いて、おしゃべりをすることによってエネルギーを放出するのです。このエネルギーは散って放射されるので、力が弱く、一部の軽い病気にはある程度効きますが、重い病気には役に立ちません。佛教では天上の人間は苦労がなく、トラブルもないと言われます。そのために修煉ができず、試練を与えてもらえず、次元を向上させることができないので、そこでなんとかして人間の健康増進と病気治療に手を貸すことによって、自分をいくらか高めようとするのです。これが宇宙語です。宇宙語は功能ではなく、気功でもありません。

## （五）信息憑き物

信息憑（しんそくつ）き物のなかで、危害が大きいのは低い霊体の憑き物であり、これらはいずれも邪法を修練したことによって招いたものです。人間に害を与えること甚だしく、取り憑かれた人の結末は非常に恐ろしい

ものです。練功もそれほどしていないのに、人の病気を治し、金儲けをしようとばかり考え、そういうことが頭から離れない人がいます。もともとその人はけっこう立派な人であり、ひょっとしたらすでに師が面倒を見てくれているのかもしれません。しかし人の病気を治そうとか、金儲けをしようとかを考え出すととんでもないことになり、自分でそういうものを招いてしまうのです。そういうものはわれわれの物質空間にいませんが、まぎれもなく存在しています。

　この練功者は突然、天目が開いた、功が身についたと思い込みますが、実は憑き物が彼の大脳をコントロールしているのであり、憑き物が見た映像が彼の大脳に反映されているのです。自分の天目が開いたと思い込みますが、実は全然開いていないのです。憑き物がどうして彼に功を与えようとしたのでしょうか？　どうして彼を助けようとしたのでしょうか？　われわれのこの宇宙では、動物が修煉して得道（とくどう）することは許されないからです。動物は心性を重んぜず、向上できないので、正法を得ることが許されないのです。そこで動物が人間の身体に取り憑いて、人体の精華を得ようとするわけです。宇宙にはもう一つ、「失わないものは得られず」という理があります。憑き物があなたの名利心を満たしてくれ、あなたに金儲けさせ、あなたを有名にしてくれます。しかしただでは助けてくれるわけがなく、憑き物も何かを得ようとしており、あなたの精華を得ようとしているのです。憑き物があなたから離れたとき、あなたにはもう何も残っておらず、衰弱しきって、あるいは植物人間になってしまうかもしれません！

これは心性が正しくないために招いたものです。一正が百邪を圧する、

と言われるように、あなたの心性に少しの歪みもなければ、邪を招くことはありえません。つまり、でたらめなものは一切もらわず、正々堂々とした煉功者になるように、ひたすら正法に従って修煉しなければならないということです。

### （六）正しい功法でも邪法を練ることがある

習っているのは正法であるとはいえ、自分を厳しく律することができず、心性を重んじようとしないで、練功するときに良くないことを考える人がいますが、これでは無意識に邪法をやっていることになります。たとえば站樁功（たんとうこう）をやっているにせよ、坐禅をしているにせよ、たしかに練功はしてはいますが、実際は、頭のなかではお金のことや、名利のことや、誰それがわたしをいじめたので、功を身につけたら懲らしめてやろうとか考えています。あるいはあれやこれやの功能を欲しがったりして、良くないものを功に加えてしまいますので、実際には邪法をやっていることになります。これは非常に危険なことです。良くないもの、たとえば低い次元の霊体のようなものを招いてしまう可能性があるのですが、招いてしまっても気がつかないかもしれません。執着心を強くもったまま、求める心を抱いて道を学んだりしてはいけません。心が歪んでいれば、師もあなたを守るすべがないのです。つまり、煉功者としては必ず厳しく心性を守り、心を正しく持ち、何も求めないようにしなければなりません。さもなければ問題が起きるかもしれません。

# 第二章　法輪功

　法輪功（ファールンゴン）は佛家法輪（ファールン）修煉大法に源を発する、佛家気功修煉の特殊な方法ですが、一般の佛家修煉方法とは異なる独特なところがあります。本功法は本来、きわめて高い心性を持つ大根器（だいこんき）の修煉者が学ぶ、特殊な強化修煉でしたが、より多くの煉功者が向上できるように、そして修煉に志のある多くの方々の要求を満たすために、本功法の中から普及に適した修煉方法を整理してここに公開することにしました。それでも、それは一般の功法で学ぶものと一般功法の次元を遙かに超えています。

## 一、法輪の作用

　法輪功の法輪は宇宙と同じ特性を持った宇宙の縮図です。法輪功を修煉する者は、功能と功力を速やかに伸ばすことができるばかりでなく、非常に短い時間内に威力この上ない法輪を修煉して得ることができます。法輪は形成されれば、一種の霊性をもった生命体の存在となります。普段は煉功者の下腹部で自動的に回転してやまず、絶えず宇宙からエネルギーを採りこみ演化して、最終的には煉功者の本体のなかでそれを功に転化させ、法が人を煉る効果を発揮します。

言い換えれば、人がいつも煉功していなくても、法輪が絶えず人を煉っているということです。法輪は内に向かっては自己を済度し、健康増進、知恵の開発および煉功者を逸脱（いつだつ）から守ってくれる作用がありますし、心性の劣っている人から妨げを受けないよう修煉者を守ることもできます。法輪は外に向かっては人を済度し、他人の病気を治し邪気を祓（はら）い、あらゆる異常な状態を直すことができます。法輪は下腹部で絶えず回転しており、右回り（時計回り）に九回、左回り（反時計回り）に九回回転します。右回りのときは、宇宙からエネルギーを猛烈に吸収し、そのエネルギーは非常に大きいものです。功力の増大に従って回転力はますます強くなり、人為的に気をすくい上げて灌頂（かんじょう）してもこれには遠く及びません。左回りのときは、エネルギーを放出して、衆生を普く済度し、正しくない状態を糾（ただ）しますので、煉功者のまわりにいる人がみんなその恩恵を受けます。我が国で伝えられているあらゆる功法の中で、法が人を煉ることのできる功法は、法輪功のみです。

法輪は最も貴重なものであり、千金でもっても替え難いものです。わたしの師は、私に法輪を伝えてくれたとき、この法輪は誰にも伝えてはならないものであり、千年にわたって道を修めている人でさえそれを得ようとしても得られないのだ、と言いました。われわれのこの法門は非常に長い年月を経て、はじめて一人の人に伝えられるものであり、数十年で一人に伝えるようなものとは違います。ですから法輪はきわめて貴重なのです。いま、われわれはそれを取り出して演化しましたので、本来ほどの大きな威力はなくなりましたが、それでもや

はりきわめて貴重なものです。修煉者がそれを得れば、修煉の半分が達成されたようなもので、あとは自分の心性を向上させさえすれば、将来かなり高い次元があなたを待っているのです。もちろん、縁のない人は、将来修煉していけなくなりますので、法輪も存在しなくなります。

法輪功は佛家功ですが、佛家の範囲を完全に超えており、宇宙全体を煉っています。昔、佛家修煉では佛家の理を、道家修煉では道家の理を唱えましたが、誰も根本から宇宙を完璧に説明できた人はいませんでした。宇宙も人間と同じように、物質的に構成されている以外に、その特性の存在をもっており、「真・善・忍」という三文字にまとめることができます。道家修煉は主として「真」を悟り、真実のことを話し、真実のことをし、返本帰真（へんぽんきしん）して、最終的に真人になることを目指します。佛家修煉は「善」に重点が置かれており、衆生を普く済度するために、大いなる慈悲心を生み出そうとします。われわれのこの法門は、「真・善・忍」を同時に修め、宇宙の根本特性から修煉して、最終的に宇宙との同化を果たします。

法輪功は性命双修の功法であり、功力と心性の上で一定の次元に達すると、世間にいる間にも悟りを開く（功を開く）状態に到達し、修煉によって不壊（ふえ）の身体を得るよう求めています。法輪功はおおよそ世間法（せけんほう）と出世間法（しゅっせけんほう）など多くの次元に分かれていますが、志のあるすべての者が修煉に勤め、絶えず心性を高めていき、圓満成就できるよう期待しています。

# 二、法輪の形態構成

法輪功の法輪は霊性をもった、回転している高エネルギー物質体です。法輪は天体宇宙全体の運行規則に従って回転しており、ある意味では、宇宙の縮図といえます。

法輪の中央は佛家の「卍」符で、梵語ではSrivatsa（シェリーバトゥサ）、「吉祥の集まるところ」（『辞海』）という意味であり、法輪の核心をなします。色は黄金色に近く、その地色は非常に鮮やかな赤、外の輪の地色はオレンジ色です。四つの太極と四つの佛家法輪が、交互に並んで、八つの方位に配置されています。赤と黒からなる太極は道家のものであり、赤と青からなるのは先天大道のものです。四つの小さな法輪も黄金色で、法輪の地色は、赤、橙、黄、緑、青、藍、紫、と周期的に変化し、色が非常に綺麗です（口絵参照）。中心の「卍」符と太極の色は変わりません。これらの大小の法輪と「卍」符はみな自転しています。法輪の根は宇宙におろされており、宇宙が回り、各恒星系も回っているので、法輪も回っています。天目の次元の低い人には、法輪が扇風機のように回転しているのが見えますが、天目の次元の高い人には、法輪の全景が見え、それは非常に美しく、鮮やかなものであり、煉功者をして修煉においていっそう勇猛邁進させてくれます。

# 三、法輪功の修煉の特徴

## （一）法が人を煉る

法輪功を学ぶ者は、速やかに功力と功能を伸ばすことができるばかりでなく、修煉によって法輪を得ることもできます。法輪は非常に短い時間で形成されますが、いったん形成されると、その威力はこの上なく大きく、煉功者を逸脱から守るとともに、本人が心性の劣る人に妨げられないように守ってくれます。理論の上でも伝統的な修煉法とはまったく異なっています。なぜなら法輪は形成されてから、絶えず自転を続ける、霊性をもった生命体の存在であり、普段は煉功者の下腹部に絶えずエネルギーを蓄えているからです。法輪は回転によって宇宙からエネルギーを採りこみます。自転して止まらないからこそ、法が人を煉る目的を達することができるのです。すなわち人が四六時中煉功していなくても、法輪は絶えず人を煉っているわけです。当然のことですが、常人は昼間は仕事をしなければならず、夜は睡眠をとらなければなりませんので、煉功時間は非常に限られています。二十四時間絶えず煉功していようとして、いわゆるつねに練功のことを考えておくというやり方ではいけません。あるいはほかのどんな方法を取り入れても、本当に二十四時間つねに煉功しているという目的を達することは難しいのです。しかし、われわれの法輪は絶えず回転しており、宇宙から内に向かって大量の気（初期エネルギーの存在形式）を採りこむ一方、採りこんだ気を昼夜を分かたず、つねに法輪の各方位に蓄え転化させ、気をさらに高次の物質に変え、最終

的に修煉者の身体で「功」に転化させます。法が人を煉るというのはこのことを言うのです。法輪功の修煉は各流派、各門派の丹道気功の煉功学説とまったく異なっています。

法輪功の修煉における最大の特徴は、法輪を修煉することであり、「丹」の道を歩みません。現在伝えられているどんな流派、どんな門派の功法にせよ、佛教、道教の各功派にせよ、また佛家、道家、民間のものに関わらず、多くの旁門の中の修煉方法にせよ、どれもこれも丹道を歩むものであり、丹道気功と呼ばれます。和尚、尼僧、道士の修煉は、いずれも丹道という道を歩んでいます。死後火葬すると、舎利が出てきます。現在の科学測定機器でもそれがどんな物質によって構成されているのか分かりませんが、非常に硬くて、綺麗なものです。実はそれは他の空間から採集した高エネルギー物質にほかならず、われわれのこの空間のものではありません。それがつまり丹です。丹道気功で生存中に悟りを開く状態に達するのは非常に難しいことです。昔、多くの丹道を煉る人が丹を上へ引き上げようとして、泥丸宮まで上げるのですがそこで詰まってしまい、結局息ができなくなって死んでしまいました。人為的にそれを炸裂させようとする人がいますが、炸裂させようがありません。こんな例がありました。ある人のお爺さんが修煉して成就できなかったので、死後丹をお父さんに吐き残し、お父さんも成就できなかったので、死後その人に吐き残したのですが、今に至ってもその人は相変わらず何者でもありません。とても難しいのです！　もちろん、良い功法もたくさんあり、本当に直伝を得れば素晴らしいのですが、上級のものを伝えてもらえない

恐れがあります。

## （二）主意識を修煉する

　人にはそれぞれ主意識があり、普段何かをしたり、物事を考えたりするときは、主意識を働かせています。主意識のほかに、人には一つないしいくつかの副意識も存在していますし、さらには家族の間で先祖から伝わっている信息もあります。副意識は主意識と同じ名前をもっています。副意識は普通、主意識より力があり、次元が高いので、彼自身の特定の空間が見え、われわれの常人社会に惑(まど)わされません。多くの功法は副意識を修煉する道を歩んでおり、肉体や主意識は単なる媒体の役割しか果たしていません。こういうことは、煉功者には普通分かっていないのに、得意満面にさえなっている人もいます。人は社会に生活しているため、現実のものを捨て去るのは非常に難しいことです。とりわけその人が執着しているものならなおさらです。ですから多くの功法は入定の中で演化すること、完全に入定することを強調していますが、入定の中で演化するとき、その人の副意識がその社会の中で演化し、演化の過程で向上しているのです。そのうちあなたの副意識が修煉して成就し、功を携(たずさ)えて行ってしまえば、あなたの主意識と本体には何も残りません。一生の修煉が無駄になってしまいます。それは大変惜しいことです。一部の著名な気功師は、さまざまなすごい功能をもっており、高い名声を得ているのですが、その功が全然自分の身体についていないことに本人は分かっていないのです。

法輪功は主意識に焦点を定めて修煉しており、功が確実に本当にあなたの身体につくように求めています。もちろん副意識もその恩恵を受けるのですが、彼は従属しながら向上することになります。われわれのこの功法は何よりも厳しく心性を求めています。常人社会の中で、最も複雑な条件の下で心性を錬磨することによって、向上することを求めており、まるで泥沼から咲き出た蓮の花のようです。だからこそ、あなたの修煉の成就が許されるのです。法輪功が貴重なのはまさにこのためであり、あなた自身が功を得るということが貴重なのです。しかしこれは非常に難しいことです。その難しさはまさに、最も複雑な環境の中で錬磨する道を歩むことにあります。

煉功の目的が主意識を修煉することにある以上、つねに主意識で自分の煉功を支配しなければなりません。主意識が決定権を持たなければならず、副意識にそれを譲り渡してはならないのです。さもなければいつか、副意識が成就して去っていくとき、功も持って行かれてしまい、本体と主意識に何も残らなくなります。高い次元を目指して修煉しようとしているときに、主意識が眠っているかのように何も知らず、何の功を煉っているのかも分からないようではいけません。必ず自分が煉功し、上を目指して修煉しており、心性を向上させているということを自覚しておかなければなりません。そうしてこそはじめてあなたに主導権があり、功を得ることができるのです。あなたがぼうっとしている間に、やろうとしていたことがやり遂げられて、あなたにもどうしてそうなったのか分からないときがありますが、実はそれは副意識が役割を果たし、副意識が指揮を執ったのです。もし坐禅

の途中で目を開け正面を見たとき、向かいにもう一人の自分がいたとすれば、それはほかでもなくあなたの副意識です。ところが、北に向かって坐禅をしているのに、突然自分が北にいるのに気づいたとします。どうして出てきたのだろうか、と不思議に思うでしょうが、それは本当のあなたが出てきたのであって、そこに坐っているのはあなたの肉体と副意識です。これは区別できることです。

法輪功を修煉するのに、我を忘れてはいけません。我を忘れるのは、法輪功の修煉大法に適いません。煉功では、必ず頭がはっきりしていなければなりません。煉功のとき主意識が強ければ、逸脱することがなく、たいていのものはあなたを害することができません。主意識が弱ければ、何かがつけこんでくることがあります。

### (三) 煉功は方位や時間を問わない

多くの功法は、煉功するのにどの方向を向いたらよいか、何時に煉功すればよいかにこだわりますが、われわれはまったくそういうことを問いません。法輪功は宇宙の特性に従って修煉し、宇宙演化の原理にしたがって修煉しているのですから、方向や時間を問わないのです。われわれは法輪の上に坐って煉功しているのに等しく、全方位的であり、つねに回転しています。つまりわれわれの法輪は宇宙と歩調を同じくしているのです。宇宙も銀河系も運動しており、九大惑星も太陽を巡って回転していますし、地球自身でさえも自転しているのですから、東西南北などどこにあるのでしょうか？　われわれの言う東西南北は、地球人が地球の角度から区分けしたものです。です

からどの方位に立って煉功しても、全方位に立って煉功していることになります。

子の刻に煉功するのがよいとか、午の刻に煉功すればよいとか、あるいはこれこれの時間がよいとかと言う人がいますが、われわれはそういうことは言いません。なぜならあなたが煉功をしていなくても法輪があなたを煉り、四六時中あなたの煉功を手助けしており、法が人を煉っているのです。丹道気功では、人が丹を煉りますが、法輪功では法が人を煉っています。時間に余裕があれば多めに煉功すればいいし、なければ煉功時間を減らしてもかまいません。全く自由です。

# 四、性命双修

法輪功の修煉では、心性も修めるし命も修めます。煉功を通してまず本体を変え、本体を捨てずに、主意識と肉体が一つになって、全体で成就することを目指します。

### (一) 本体を変える

人間の身体は肉と血液と骨格からなっており、異なる分子構造と成分を有しています。煉功を通して身体の分子成分を高エネルギー物質に転化しますが、そうすることによって人体の構成は本来の物質成分ではなくなり、本質的な変化が起きます。しかし、修煉者は常人

の中で修煉しており、人の群の中で生活しているのですから、人類の社会状態に背いてはいけません。ですからこのような変化は、その人本来の分子構造を変えるものではなく、分子の配列順序はそのままで、本来の分子成分のみを変えるのです。人体の肉は相変わらず軟らかく、骨格は依然硬く、血液はもとどおり流れており、ナイフで切りつければやはり血が出ます。中国の五行説によれば、金・木・水・火・土が万物を構成しているのですが、人体も同じです。煉功者に本体の変化が起き、高エネルギー物質が本来の分子成分に取って代わるようになれば、その時点で人体は本来の物質構成ではなくなっています。いわゆる「五行の中に居ず」とはこのことです。

性命双修功法の最大の特徴は、人間の生命の進度を遅らせ、老衰を遅らせることにあります。われわれ法輪功はまさにこのような際立った特徴を持っています。法輪功は次のような道を歩んでいます。つまり、根本から人体の分子成分を変え、採り入れた高エネルギー物質を一つ一つの細胞の中に蓄えていくことによって、最終的に高エネルギー物質が細胞成分に取って代わります。すると、新陳代謝が停止し、その人は五行を抜け出し、他の空間の物質から構成された身体になり、われわれの空間時間の制約を受けなくなりますので、いつまでも若々しさを保つことができるようになるのです。

歴代の高僧は寿命が非常に長いのですが、今数百歳の人が街を歩いたとしても誰にも気づかれません。非常に若々しく見えるし、常人と同じ身なりをしていますので、見た目には分からないのです。人間の寿命は、本来今のように短いはずはないのです。科学の角度か

ら言って、人間は二百歳あまりまでは生きられるはずです。記録によれば、イギリスにフィムカスという人がいて、二百七歳まで生きました。日本には満平という人がいて、二百四十二歳まで生きました。我が国では唐の時代に、恵昭という和尚がいて、二百九十歳まで生きました。福建省永泰県の県志の記載によれば、唐の時代の僖宗(きそう)中和元年（紀元八八一年）生まれの陳俊という人は、元の時代の泰定年間、紀元一三二四年に死去したので、四百四十三歳まで生きたことになります。これらはいずれも記録があって調べられるもので、おとぎ話でも何でもありません。われわれの法輪功学習者は修煉によって、顔の皺が明らかに減り、顔色がつやつやし、身体が非常に軽やかになり、道を歩いても仕事をしても疲れを感じなくなりました。これらは普遍的に見られる現象です。わたし自身も数十年修煉して来ましたが、二十年あなたの容貌があまり変わっていないと言われました。ほかでもなくこれが原因です。われわれの法輪功は命を修める強烈なものを持っているため、法輪功の修煉者は年齢から見て常人と大きく異なり、見た目には実際の年齢と一致しません。つまり、性命双修功法の最大の特徴は人間の生命の進度を遅らせ、人間の老衰を遅らせ、寿命を延ばすことができることにあります。

### （二）法輪周天

われわれの人体は一つの小宇宙であり、人体のエネルギーが身体を一巡りするのを、小宇宙循環、あるいは周天循環と言います。任、督二脈がつながるのは、次元から言えば、まだうわべだけの周天で

あり、命を修めるのには役に立ちません。本当の小周天は、泥丸宮から丹田まで、中で循環しています。中の循環によって、身体を率いて中から外へと広げていき、百脈を開かせます。われわれの法輪功は、初めから百脈を開かせるようにしているのです。

大周天とは奇経八脈（きけいはちみゃく）の運行のことで、体中を一回りします。もし大周天が通れば、その煉功者が舞い上がる、という状態が現れるのですが、『丹経』に書かれている「白日飛昇（はくじつひしょう）」とはこのことなのです。しかし通常は、舞い上がらないように、あなたの身体のある部位に鍵をかけます。しかし、道を歩くときは非常に軽やかで、山登りをするときは誰かに押されているかのように感じる、という状態がもたらされます。大周天が通るようになると、人体の内臓各部位の気を交換させることができる、という功能も身に付くようになります。心臓の気が胃に移り、胃の気が腸に移り、……功力の増強にしたがって、体外にそれを打ち放つと運搬功になります。このような周天は子午（しご）周天、あるいは乾坤（けんこん）周天とも呼ばれます。その運行だけではまだ身体を演化するという目的を達成することができず、もう一つそれと対応する周天の存在が必要とされます。それは卯酉（ぼうゆう）周天と呼ばれます。卯酉周天の運行は、会陰（えいん）または百会穴（ひゃくえけつ）から突き出て、身体の陰陽両面の境目、つまり身体の側面を走ります。

法輪功の周天運行は一般功法で言う奇経八脈の運行よりずっと大きく、身体全体を縦横して交錯する気脈が一斉に運行しています。ですから、身体全体が一気に打ち通され、打ち貫（ぬ）かれ、一斉に回転するよう要求されます。われわれの法輪功はこれらのものを自ら

持っており、人為的に煉る必要がなく、意念で導く必要もありません。もしあなたがそういうことをすれば、間違った方向にずれてしまうことになります。わたしが講習会であなたの体外に気機を植え付けましたが、それは自動的に循環するものです。気機とは高い次元における煉功に特有なものであり、われわれの自動的な煉功の一部をなし、法輪と同じように絶えず回転し、身体の中の気脈を率いて運行しています。あなたが周天を修煉したことがなくても、実際に気脈がすでに率いられて、縦横に一緒に運行しています。われわれの煉功の動作は体外の気機を強化するためです。

### （三）脈を通す

脈を通すのは、エネルギーを運行させ、細胞の分子成分を変え、高エネルギー物質へ転化させるためです。煉功しない人の場合、脈は塞がっており、中には非常に細々としたものもあります。煉功者の場合、脈は次第に明るくなり、通らないところが通るようになります。煉功に素養のある人は、脈が広くなります。高い次元の修煉になると脈はますます広くなり、人によっては手の指ほどになるのもあります。とはいえ、脈が通ること自身が修煉の到達したレベルや功の高さを示すものではありません。煉功によって脈が明るく広くなり、最終的に脈という脈が一つにつながるようになれば、その人には脈もなければツボもなくなり、言い換えれば、体中が脈でありツボであるようになります。このような状態になっても、まだ得道したとは言えません。それは法輪功の修煉過程における一つの現れであり、ある

一つの次元の現れに過ぎません。ここまで来ると、世間法修煉はすでに終点に達したことになりますが、同時に外観にも顕著な状態——「三花聚頂」が現れてきます。功はすでに形状としてみえるほど物凄く伸びており、功柱もかなり高くなり、しかも頭上に三輪の花——一輪は蓮花に似ており、一輪は菊の花に似ている——が現れてきます。三輪の花は自転しますが、自転しながら順番に回転もします。どの花にも一本の天に通じる柱があり、とてつもなく高いのです。この三本の柱も花に従って順番に回転し、自転しますので、頭がずしりと重い感じがします。ただ、これでもまだ、彼は世間法修煉の中で、最後の一歩を歩み終えたに過ぎません。

## 五、意念

法輪功の修煉は意念を用いません。意念そのものは何の役にも立ちませんが、指令を出すことができます。本当に役に立つのは功能であり、それは霊体の思惟能力をもっており、大脳信息の指揮を受けます。しかし多くの人、特に気功界の間ではさまざまな説があって、意念そのものによってさまざまなことができると思われています。意念で功能を開き、意念で天目を開き、意念で病気治療をし、意念で運搬するなどと言う人がいますが、それは間違っています。常人のいる低い次元では意念が感覚器官と四肢を支配していますが、煉功者のいる高い次元では、意念が昇華し、功能を操って働かすことが

できます。つまり功能が意念に支配されることになるのです。これが意念についてのわれわれの考え方です。気功師が人の病気を治療するとき、手も動かしていないのに病気が治ったのを見ると、意念がその病気を治したと思われがちですが、実際は彼は功能を打ち放ち、それを操って病気治療や何かをさせているのです。功能は他の空間を通るので、常人の目には見えず、知らない者は意念がやったと思い込むわけです。意念で病気治療ができると思って、人を間違った方向へ導いてしまう人がいますが、こういう見方は正さなければなりません。

人間の思惟は一種の信息であり、エネルギーであり、物質的存在の一種の形式です。人間が物事を考え、思惟するとき、大脳に周波が生じます。呪文を唱えると効き目の現れることがありますが、なぜでしょうか？　それは宇宙にも周波の振動があり、あなたの唱えた呪文と宇宙の周波との間に共振が起きて、効き目が生じるためです。もちろん良性の信息であってはじめて作用します。なぜなら宇宙では邪なものの存在が許されないからです。意念は特定の思惟方式でもあり、高い次元の大気功師の法身は主体の思惟から制御と支配を受けます。法身にも自分の思惟があり、独自に問題を処理し仕事をする能力をもっています。つまり、それは完全に独立した自我なのです。同時に、法身は気功師の主体の思惟を察知し、主体の思惟に従って仕事をすることもできます。たとえば気功師がある人の病気を治そうとすれば、法身はそこへ行きます。その意念がなければ法身は動かないのです。非常に素晴らしいことを目にした場合、法身は自ら進ん

でそれを行います。まだ悟りを開くまでには至っていない大気功師がおり、自分ではまだ分からないことがあるのですが、法身にはそれが分かっているのです。

意念には霊感という意味合いもあります。霊感は人間の主意識から出たものではありません。主意識は知識の幅が限られており、社会に存在しない物事を行うには、主意識だけではうまくいきません。霊感は副意識から来ています。執筆や科学研究に取り組んでいて、どんなに脳みそを絞り尽くしても良い考えの出てこないとき、ひとまず休憩して、外を一回りしているうちに突然、無意識のうちに霊感が湧いてくる人がいます。その勢いでペンを走らせると、ものが書けてしまうのです。これは主意識が強すぎると、大脳が支配されて、考えを絞り出せないからです。ところが主意識が緩むと、副意識が働き出して、大脳をコントロールするようになります。副意識が他の空間のものなので、この空間の束縛を受けず、新しいものを作り出すことができます。しかし副意識といえども、常人社会の状態を超越し妨害して、社会発展の進行を妨げてはなりません。

霊感は二つの面からきています。一つは副意識が提供するものです。副意識は世間に惑わされないので、霊感を生み出すことができるのです。もう一つは高次元の高い霊の支配、指示に由来します。高い霊から指示を受けているときは、思惟活動が活発なので、あっと人を驚かすようなことをなし遂げることができます。社会全体と宇宙の発展にはそれ自身の特定の法則があり、偶然なことは何一つないのです。

# 六、法輪功の修煉次元

## （一）高い次元の修煉

法輪功はきわめて高い次元において修煉しているので、非常に速く功が伸びます。大道はいたって簡単で易しいものです。マクロ的に見れば法輪功の動作は少ないのですが、しかしそれは身体の各方面を制御しており、現れようとする多くのものを制御しています。心性が追いついてくれば、功は飛躍的に伸びていきますので、人為的にあれこれと苦労したり、鼎を立て竈を設け、薬を採集し、丹を煉るなどということをしなくてもかまいません。どれだけ火を添えればよいかとか、どれだけ薬を採集すればよいかとか気にする必要がないのです。意念による導引は非常に複雑であり、間違った方向へずれてしまいやすいものです。われわれはここで皆さんに最も便利な、最も良く、かつ最も難しい法門を提供しています。煉功者の身体が乳白体状態に達するには、他の功法では十数年、数十年ないしもっと長い時間修行しなければなりませんが、われわれはあなたを一気にそのレベルまで押し上げていきます。あなたがまだ感じないうちに、その次元は通り過ぎてしまいます。ほんの数時間の間のことであるかもしれません。ある日、あなたは非常に敏感に感じとれたかと思うと、しばらくすると敏感に感じとれなくなることがあります。実はそれは大きな次元を一つ通り過ぎたということなのです。

## （二）功の表現形式

法輪功の学習者の身体は、調整を経れば大法修煉に適する状態に達しますが、それがつまり「乳白体」状態なのです。調整を受けてこの状態に達して、はじめて功が現れてきます。天目の次元の高い人なら見えるのですが、功が一旦煉功者の表皮に現れたのち、身体のなかに入り、再度出てきてはまた入るというように繰り返しながら、一つ一つの次元を通っていき、時には素速く通っていきます。これは一回目の功です。一回目の功が出た後、煉功者の身体はもはや一般の身体ではなくなります。乳白体に達すれば、今後二度と病気になることはありません。これ以降はたとえここかしこが痛んだり、どこかの具合が悪くなったりして、病気のように見えても、それは病気ではなく、業力（ごうりき）が作用をしているのです。二回目の功が出たときには、この霊体は大きく成長しており、動いたりおしゃべりしたりすることができるようになります。まばらに出てくるときもあれば、隙間なくぎっしりと出てくるときもあり、互いにおしゃべりもします。この霊体には本体を変えるためのエネルギーが大量に蓄えられています。

法輪功の修煉が非常に高い次元に達すれば、体中に「嬰孩（えいがい）」が現れてくることがあります。彼らは非常に腕白で、遊び好きですが非常に善良です。このほかにもう一つの身体、すなわち「元嬰（げんえい）」を修煉して得ることもできます。元嬰は蓮花台に坐っており、とても綺麗です。煉功によって得た元嬰は、人体の陰陽の和合からなるもので、男女の修煉者とも修煉によって元嬰を得ることができます。元嬰は初めは非常に小さいのですが、徐々に成長して、最終的には煉功者と同じ

大きさ、同じ姿かたちになり、修煉者の体の中にいます。特異功能のある人はその人を見て、二つの身体をもっていると言いますが、実際はその人の真身が修煉によってできあがったのです。このほかに、多くの法身も修煉して得ることができます。要するに、宇宙にある功能は法輪功の中に全てあり、他の功法で得ることができる功能は全て法輪功でも得られるということです。

## （三）出世間法修煉

煉功者は煉功を通して脈を絶えず広げ、一つにつなげることができます。つまり脈もなくツボもない状態まで修煉することができるのです。言い換えれば、体中が脈でありツボであるようになります。しかし、これでもまだ得道したとは言えません。それは法輪功の修煉過程における一つの現れであり、ある一つの次元の現れに過ぎません。ここまでくれば、世間法修煉ではすでに終点に達しており、功も形状として見えるほど物凄く伸び、功柱もかなり高くなり、しかも頭上に三輪の花が現れてきます。ただこれでも、その人は世間法の中で最後の一歩を歩み終えたに過ぎません。

さらに一歩前進したとき、何もかも無くなり、功を全部身体の中の最も深い空間に沈めますので、その人は「浄白体」状態に入り、身体が透明なものになります。そしてさらに一歩進めば、「佛体修煉」とも言う出世間法の修煉に入ります。それから出てくる功は神通力の類いのものになりますが、この時になれば、その人の威力は無尽蔵で、とてつもなく大きくなります。そしてさらに高い境地に達するといよい

よ大覚者になります。全てはあなたがいかに心性を修煉するかにかかっていますが、あなたの修煉した次元まで果位も到達します。大きな志をもつ者は正法を修煉し、正果(しょうか)を得れば、それは圓満成就にほかなりません。

# 第三章　心性を修煉する

法輪功（ファールンゴン）修煉者は、心性の修煉を第一として、心性が功を伸ばす鍵だということをはっきり認識しなければなりません。これは煉功が高い次元に達したときの理なのです。厳密に言えば、次元を決定する功力は、「煉」によって得られるのではなく、心性を修めることによって得られるのです。心性を向上させるのは、言うのは簡単ですが、実行するのはとてもとても難しいことです。修煉者はきわめて大きな犠牲を払い、悟性を高め、苦の中の苦を嘗（な）め、忍び難いことを忍ぶ、などなどができなければなりません。なぜ一部の煉功者は長年煉功しても功が伸びないのでしょうか？　その根本的な原因は、一つは心性を重んじないこと、もう一つは高い次元の正法を得ていないことにあります。このことははっきり指摘しておかなければなりません。多くの師は功を教えるときに心性も説きますが、それこそが本当に功を教えるということです。動作や手法だけ教えて心性を説かないのは、実質的に邪法を教えているのに等しいのです。したがって、煉功者は心性を向上させることにおいてしっかり努力しなければなりません。そうしてはじめてさらに高い次元の修煉に入ることができるのです。

# 一、心性の内涵

法輪功でいう心性は、「徳」でもって包含(ほうがん)しきれないものであり、それは「徳」のカバーする範囲よりずっと広く、「徳」を含むさまざまな内容を内にもっています。「徳」に現れる一人の人間の心性はその現れの一つに過ぎず、単純に「徳」でもって心性の中味を理解しようとするのは不十分です。心性は「得」と「棄」という二つのことにいかに対処するかという問題を含んでいます。「得」とは、宇宙の特性との同化を得ることです。宇宙特有の性質を構成しているのは、「真・善・忍」であり、一人の煉功者と宇宙との同化はまさに個人の「徳」に現れます。「棄」とは、貪婪(どんらん)・利・色・欲・殺し・殴り・盗み・強奪・詐欺・嫉妬などなどのような良くない考えや行為を放棄することです。高い次元へ修煉しようとするには、さらに欲望に対する人間本来の追求を放棄しなければなりません。つまりあらゆる執着心を放棄し、個人にまつわるあらゆる名、利に対して無頓着にならなければなりません。

人間の肉体と天性が人間を人間たらしめています。宇宙も同じく物質としての性質以外に、「真•善•忍」という特性を同時にもっています。どの空気の微粒子の中にもこのような特性が存在しています。常人社会では、良いことをすれば誉められ、悪いことをすれば懲罰されるという形で現れますが、高い次元では功能態として現れます。このような特性に適うのは良い人、背くのは悪い人であり、それに合致し、同化した人は得道した者になります。ですから煉功者はきわめて高い心

性でもってこの特性に同化して、はじめて高い次元を目指して修煉することができます。

良い人になるのは比較的容易ですが、心性を修煉しようとするのはそれほど容易ではありません。その心を正そうとするには、まずその意を誠にすることを、修煉者は覚悟しなければなりません。人間はこの世界に生きており、社会は複雑なので、あなたが善を行おうとすれば、あなたに善を行わせない人がいます。あなたが他人を侵害しなくても、他人がさまざまな原因であなたを傷つけます。ここには非自然的な原因によるものもありますが、なぜなのかについてあなたは悟れるのでしょうか？　あなたはどう対処するのでしょうか？　世間のあらゆるいさかいやトラブルが、いつでもあなたの心性を測っています。いわれもない屈辱を前にして、あなたの切実な利益が損害を被ったとき、金銭の前で、女色の前で、権力闘争の最中に、足を引っ張り合う嫉妬の中で、さまざまな社会的ないざこざや家庭内のトラブル及び有形無形の苦痛の中で、あなたはいつでも厳しい心性の要求に従って自己を制御することができるのでしょうか？　もちろん、あなたが何でもうまく乗り越えられれば、あなたはすでに覚者です。煉功者はなんといってもたいてい常人から始まったものであり、心性も徐々に修煉して向上していくものです。修煉に志のある者は大きな苦に耐え、大きな困難を乗り越える決意をもっていれば、最終的に正果を得るに違いありません。修煉者の皆さんが厳しく心性を守り、一日も早く功力を高めるよう切に望みます！

## 二、失と得

気功界でも宗教界でも失と得のことを問題にします。一部の人は、失とは喜捨（きしゃ）のことで、良いことをし、困っている人を助けることだと思い、得とは功を得ることだと思っています。お寺の僧侶もそういうことを言い、喜捨を求めます。これでは失をあまりにも狭くとらえすぎています。われわれの言う失は広義のことで、非常に大きなものです。われわれが失おうとするのは常人の心であり、執着して放さない心ですが、本当にあなたが重要だと思うもの、放棄できないと思うものを棄てることができれば、それは本当の失になります。人助けをして、慈悲心をちょっと示すのは、失のわずかな一部に過ぎません。

常人としては、有名になり、利益を得て、暮らしを良くし、快適にし、金儲けをしようとしますが、それは常人の目標です。これに対してわれわれ煉功者は違います。われわれが得るのは功であって、そういうものではありません。われわれは個人の利益を少しばかり放棄して、それに対して淡泊でいられるようにと言っているのであって、本当にあなたに何かを失わせようとするわけではありません。われわれは常人社会の中で修煉しているので、常人と同じようにしなければならず、肝心なのはその心を放下することであり、本当にあなたに何かを失わせようとするものではありません。あなたに属するものなら失うことはありませんが、あなたに属しないものは手に入れようとしても得られませんし、もし手に入れても人に返さなければなりません。得があれば必ず失もあります。もちろん、一気に非常に高いところまで到達す

ることは不可能であり、一夜のうちに覚者になろうとしてもできるわけがありません。少しずつ修煉し、一歩ずつ向上していくなら可能であり、失えばその分だけあなたは得るのです。利害関係においてつねに無頓着でいられて、得が少なくても心は安らかです。物質において、損をするかもしれませんが、徳において、功において多く得ることができます。これはそういう道理であり、あなたにわざと名誉や利益で交換させようとしているわけではありません。このことはさらに悟性によって体得しなければなりません。

ある大道を修める人はかつてこう言いました。「他人が欲しがるものはわたしは要らない。他人が持っているものはわたしは持っていない。しかしわたしが持っているものは、他人にはない。他人が要らないものをわたしは要る」、と。常人は、地面に転がっている石ころ以外、何でも欲しがり、満足する時がなかなかありません。そこでこの修道者は、わたしはその石ころを拾うことにしよう、と言っています。俗に、物は稀(まれ)なものを貴しとし、少ないものを奇とする、と言いますが、石ころはこの空間では価値がありませんが、ほかの空間に行けば最も価値のあるものになります。この言葉には常人では語り得ない哲理が道破されています。修煉して成就した多くの高人はいずれも無一物(むいちもつ)ですが、彼らにとって、放棄できない個人のものは何一つありません。

煉功という道は最も正しいものであり、煉功者こそが最も賢い者です。常人が争おうとする物、得ようとする利益は一時的なもので、たとえ争いによって得たとしても、拾ってきたとしても、あるいは何かの利益を得たとしても、それでどうなるというのですか？　常人の言葉

に、生まれてくるときに持って来られず、死ぬときにも持っていけない、というのがあります。来るときは裸、去るときも裸、骨まで灰に焼かれてしまいます。どんなにたいへんな金持ちになったとしても、赫々（かっかく）とした高官になったとしても、あなたは何も持っていくことができません。しかし、功は持っていけます。なぜならそれはあなたの主意識に付いているからです。言っておきますが、功は容易（たやす）く手に入るものではありません。それはあまりにも貴重で得難いので、千金でもっても替え難いものです。あなたの功が非常に高く伸びたとき、もしある日あなたが煉功をやめようとしたら、悪いことさえしなければ、あなたの功があなたの欲しいありとあらゆる物質的なものに転化されるので、何でも手に入れることができます。ただし、世間で得たもの以外に、修煉者が得るものをあなたは二度と得られなくなります。

一部の人はなんらかの個人の利益のために、本来自分に属さないものを、不正な手段を使って手に入れて、本人が得したと思い込んでいますが、実際のところ彼が手に入れた利益は徳でもって人と交換してきたものであり、ただ本人がそれを知らないだけです。煉功者なら功を減らされますが、煉功していない者なら寿命を減らされるか、他のものを減らされます。要するに、この債務は清算されなければなりません。これは天の理です。いつも人をいじめたり、口汚く人をののしり傷つけたりする人がいますが、こういうことをする度に、彼はそれ相応の徳を相手に投げ渡し、徳でもって人を侮辱する代償を払っています。

善人は損をする、と考える人がいます。常人から見ればその人は損

をしているように見えても、常人では得られないものをその人は手に入れています。それはほかでもなく「徳」――白い物質であり、きわめて貴重なものです。徳がなければ功はない、これは絶対の真理です。なぜ多くの人は煉功しても功が伸びないのでしょうか？　それは徳を修煉していないからです。多くの人はみな徳を説いており、みな徳を求めるようにと言っていますが、彼らは徳が実際に功に転化される道理を明らかにしていないため、個々の人が自分で悟るしかありません。万巻(ばんかん)の大藏経、釈迦牟尼の在世中における四十年以上の説法は、いずれも徳のみを語っています。中国古代の修道の書はみな徳のみを語っており、老子が書いた五千言の『道徳経』も徳のことしか語っていません。にもかかわらずどうしても悟らない人がいます。

　失についてですが、得があれば失があります。本当に修煉しようと決めたとたん、何らかの魔難にさいなまれることがあります。日常生活においては、まず身体が辛い目に遭い、ここかしこに調子が悪いと感じることがありますが、病気ではありません。それから社会や家庭、勤め先などでも見られますが、突如として、利益のためにトラブルが起こったり、感情の摩擦が生じたりすることがあります。それはあなたの心性を高めるためです。これらの出来事は往々にして突然やってくるもので、見た目にはとても激しいように見えます。もしあなたが非常に面倒なことに遭遇して、それによってあなたがさんざんな目に遭ったり、恥をさらしたり、面子を失ったりした場合、あなたはどう対処しますか？　あなたが平然としていられたとします。そのようにできれば、あなたの心性はこの一難で高められ、あなたの功もそ

の分だけ伸びたことになります。少しでも乗り越えられれば、その分だけ得ることになります。代価を払えば、その代価分だけ得ることになります。人は難の最中にいるとき、往々にして悟ることができないかもしれませんが、しかし悟らなければなりません。常人と混同してはならず、トラブルが起きたとき、淡々としていられなければなりません。われわれは常人の中で修煉しているので、心性も常人の中で錬磨しなければなりません。何回かつまずき転んでいるうちに、その中から教訓を学びます。何の面倒なことにも遭遇せず、心地よく功を伸ばそうとしても、それは不可能です。

## 三、「真・善・忍」を同時に修める

　われわれのこの法門では、「真・善・忍」を同時に修めます。「真」とはすなわち真実なことを話し、真実なことをし、返本帰真して、最終的に真人になるということです。「善」とはすなわち慈悲心を生み出し、善を行い人を済度することです。とりわけ「忍」ができなければならないことが強調されます。「忍」ができてはじめて、修煉して大徳の士になれます。「忍」は非常に強いものであり、「真」と「善」を超えています。修煉の全過程を通してあなたは忍耐しなければならず、心性を守って、妄りに行動してはなりません。

　何かがあったときに「忍」は容易なことではありません。「殴られても殴り返さず、罵られてもやり返さず、親戚友人の前で面子を失い

かねない状況でもひたすら我慢するなど、まるで『阿Q』になってしまうのではないか？！」と言う人がいます。わたしに言わせれば、あなたはあらゆる面で何ら異常もなく、知能でも他人に比べてちっとも劣っておらず、ただ個人の利益に無頓着でいるだけですから、誰もあなたのことを薄のろなどと言いません。「忍」ができるというのは、軟弱無能でもなければ、「阿Q」でもなく、意志が強いことの現れであり、教養が高いことの現れです。中国歴史上の人物で韓信という人が、かつて股くぐりで屈辱を受けましたが、それがまさに大きな「忍」です。古代に、「匹夫が辱められると、剣を抜いて立ち上がる」という言葉があります。一人の常人としては、侮辱を受けたとき、剣を抜いて立ち上がり、口を開いて人を罵り、拳骨を振り挙げて人を殴ることになりかねません。人間としてこの世にやってくるのは容易なことではないのに、意地のために生きている人がおり、それはあまりにもそうするに値しないばかりでなく、あまりにも疲れます。中国語に、「一歩引き下がれば、世界が広々と開ける」という言葉があります。面倒なことに遭遇して一歩引き下がったときに、あなたはまったく違う世界を目にするでしょう。

煉功者として、あなたといざこざがあった人、目の前であなたを辱めた人に対して、あなたは「忍」をしなければならず、淡々としていなければならないばかりでなく、その人に感謝しなければなりません。もしその人があなたにいざこざを起こさなければ、あなたはどうして心性を高めることができるのでしょうか。辛い目に遭ったときに黒い物質を白い物質に転化させることができるのでしょうか。どうやって

功を伸ばすのでしょうか？　人は劫難（ごうなん）の中にあるときは非常に辛いものです。しかしこの時こそ自制しなければなりません。なぜなら功力が伸びるに従って、劫難というのも絶えず増大するものであり、あなたの心性が向上するかどうか量られるからです。初めはあなたの気にさわるようなことをし、あなたをかんかんに怒らせるので、それによってあなたはいたたまれないほどいらいらし、肝臓が痛み出し、胃が痛み出すかもしれませんが、それでもあなたは爆発せずに、耐えることができたとします。それは大変けっこうなことで、あなたが「忍」を始めたのです。意識的に「忍」を実行したのです。少しずつ絶えず心性を向上させていくに従って、あなたは本当にそういうことに対して平然としていられるようになりますが、そうなればさらに大きな向上になります。常人はわずかな摩擦やささいなことを一大事と見て、意地のために生きているので、「忍」ができず、追いつめられれば何でもやってしまいかねません。しかし修煉者としては、他の人にとってはとてつもなく大きいと思われることを、あなたはごくごく小さいことだと見なします。あなたの目標はとても永久（とわ）なるものであり、遠大であり、あなたが宇宙と齢（よわい）を等しくしようとしているからです。振り返って見れば、そういうものはあってもなくてもよいものであり、大きく考えれば、そういうものはみな放下できるものなのです。

## 四、嫉妬心を取り去る

嫉妬心は修煉にとってきわめて大きな障害であり、煉功者への影響が非常に大きく、煉功者の功力に直接影響を与え、修煉仲間を傷つけ、上を目指して修煉することを甚だしく妨げるものです。修煉者としては百パーセントそれを取り去らなければなりません。煉功して一定の次元に達した人がいますが、嫉妬心をなかなか取り去ることができず、しかも取り去らなければますます強くなる一方です。このような反作用は、その人のすでに高められた他の心性をも脆弱にしてしまいます。どうして嫉妬心をわざわざ取り上げて問題にしなければならないのでしょうか？　それは嫉妬心が中国人の間で最も激しく、突出しており、人々の心の中で最も大きな比重を占めていながら、多くの人に意識されていないからです。嫉妬心は東洋特有のものであり、東洋嫉妬またはアジア嫉妬と呼ばれています。中国人は非常に内向的で、控え目であり、軽々しく表に露わさないので、嫉妬心が生じやすいのです。物事にはみな二つの側面があり、内向的な性格には良い面もあれば、悪い面もあります。一方、西洋人は比較的外向的です。たとえば、子供が学校で百点とったら、喜び勇んで家へ走って帰りながら、「ぼく、百点とったぞ、……」と叫びます。隣近所の人もドアを開け、窓をあけて、「トム、おめでとう！」とお祝いをし、喜びを分かち合いますが、中国であれば、皆さん考えてみてごらんなさい。それを聞くとすぐに反感を覚え、「百点をとったぐらいで何を偉そうに、何を見せびらかしているんだ！」というように全然違う反応が返ってき

ます。そこには嫉妬心が働いています。

嫉妬心のある人は人を軽蔑し、他人が自分を上回るのが我慢なりません。他人が自分よりできるのを見ると、心のバランスを失い、耐えられなくなり、認めようとしません。昇給は等しく、ボーナスは同額でなければならず、天が崩れるほど悪い出来事があれば、みんなで責任分担します。他人の稼ぎが多ければ妬んでしまうし、いずれにせよ人が自分を上回るのを許せません。科学研究で成果を上げても、嫉妬を恐れて、奨励金をもらいに行く勇気のない人がいますし、嫉妬とからかいを恐れて、何か受賞しても黙って人に言えない人がいるほどです。他の気功師が講習会を行っているのを見て認めようとせず、道場破りに行く人がいますが、それはまさに心性の問題です。一緒に煉功している仲間のなかに、煉功の日が浅いのに功能が出た人がいたとしましょう。すると、「なんだそれは、俺は何年も煉功しており、修了証書も山ほど持っている。俺に功能が出ていないのに彼に出るはずなんてありえない」と言って、嫉妬心をむき出しにする人がいます。煉功とは内に向かって、自分自身の修煉に勤め、自分自身から原因を探すことです。自分に足りないところがあれば、自分で向上させ、内に向かって努力すべきなのです。外にばかり目を向けていると、人が修煉をやり遂げ、向上していったのに、あなただけが向上できずじまいになってしまいます。それでは何にもならないのではありませんか？　修煉とは自分を修煉することなのです！

嫉妬心のために、たとえば耳障りなことを言って、他人の心を乱し入静を妨げるなど、修煉仲間に害を与えることがあります。一定の功

能をもつようになってからは、嫉妬心のために、功能を用いて修煉仲間に害を与えることがあります。たとえば、修煉にかなり素養のある人が坐禅を組んで煉功していたとしましょう。その人は身体に功がついているから、山のようにどっしり坐っていました。そこへ二つの物体が漂ってきました。そのうちの一人はかつて僧侶だったもので、嫉妬心のために修煉が成就できませんでした。一定の功力はあるものの、修煉は成就できなかったのです。二人がその坐禅を組んでいる人のところへやってきたとき、一人が、「だれだれがここで修煉しているので、道を変えよう！」と言いました。するともう一人が、「昔わしは掌を一振りして泰山の一角を切り落としたことがあるんだ」と言いながら、煉功者に向かって、掌を振り下ろそうとしました。しかし、振り上げた手は下ろせませんでした。なぜなら正法を修煉している煉功者は、防護の覆いに守られており、切りつけようと思っても切りつけられないからです。ところでその人は正法修煉者を傷つけようとする深刻な問題を起こしたので、懲罰を受けました。嫉妬心のある人は、自分を害するばかりでなく人をも害してしまいます。

## 五、執着心を取り去る

　執着心とは、煉功者がある物事、ある目標にこだわって、それを過度に追求し、超脱できず、甚だしきに至ってはそれに頑なに固執し、人の忠告を聞き入れようとしないことを指します。世間で功能を

得ようと求める人がいますが、これは必然的に高い次元を目指す修煉に影響を与えることになります。このような気持ちは強ければ強いほど、容易に棄てられなくなり、心がますます均衡を失い不安定に陥り、しまいには、自分が何も得ていないと思い込み、あるいは習ったものに対してすら疑いを持つようになります。執着心は人の欲望からきており、目標または目的がいかにもせせこましく、細かくて具体的であるのが特徴ですが、本人は往々にして気づきません。常人の執着心はさまざまですが、あるものを追求して目的を達するために、常人は手段を選ばずそれを手に入れようとしかねません。これに対して、煉功者としての執着心は違った表れ方をします。たとえばある種の功能を追求し、ある種の光景に夢中になり、ある種の顕現に熱中する、などなど。煉功者としては、どんなものであれ、求めてはならず、こういうものは取り去らなければなりません。道家では「無」を唱え、佛家では「空」や「空門に入る」ことを唱えますが、われわれは最終的に「空無（くうむ）」の境地に達し、一切の執着心を取り去り、あなたの放下できないあらゆるものを放下しなければなりません。たとえば、功能への追求ですが、求めるのはそれを使おうとしているからにほかなりません。それは実際にわれわれの宇宙の特性に背きますので、結局やはり心性の問題です。得ようとする以上、人の前でひけらかし、見せびらかそうとするに決まっています。そういうものは人に見せびらかすようなものではありません。たとえ非常に純粋な目的で、つまり良いことをしようとしてそれを用いるにしても、その良いはずのこともあなたがやり出すと必ずしも良いことにはなりません。常人のことを

超常的な方法で干渉しようとすれば、必ずしも良いことにはなりません。わたしが講習会で七十パーセントの人の天目が開いたと言ったのを聞いて、「なぜ自分は何も感じていないのか?」と、思索を巡らす人がいます。帰ってから煉功するとき、天目のことにばかり神経を注ぎ、頭痛がするほど考え込みますが、結局相変わらず何も見えません。これがまさに執着心です。人はそれぞれ体質が異なり、根基も違いますので、天目が同時に見えることはありえませんし、同じ次元に到達することもありえません。見える人がおり、見えない人もおり、どちらも正常なのです。

執着心は、煉功者をして功力が停滞し、徘徊する状態に陥らせ、さらに深刻な場合は煉功者を邪道に導いてしまいかねません。とりわけ一部の功能は、心性が良くなければそれを用いて悪事を働くことがあり得るのです。心性がしっかりしていないために功能を用いて悪事を働く例もあります。某地のある男子学生に思惟制御功能が現れました。この功能を使えば、自分の思惟でもって他人の思惟活動を支配することができるので、彼はそれを用いて悪いことをしました。一部の人は、煉功の時に現れた何らかの光景をどうしてもはっきり見ようとし、それを突き止めようとしますが、これも執着心です。また一部の人は、ある嗜好(しこう)に溺れ病みつきになって、なかなかそれをやめることができないのですが、それも執着心です。根基が違い、目的が違うので、最も高い境地に達するために煉功している人もいれば、何かを得ようとして煉功している人もいます。後者の考え方の場合は、必然的に煉功の目的を狭めてしまいます。このような執着心が取り去

られなければ、たとえ煉功していても功が伸びることはありません。したがって、煉功者は一切の物質的利益に完全に無頓着になっていなければならず、いかなる追求も持たずに、すべて自然の成り行きに任せるようにしなければなりません。こうすれば執着心が再び現れるのを免れることができます。すべては煉功者の心性にかかっています。心性が根本から高められず、何らかの執着心を持っていたのでは修煉は成就できません。

## 六、業力

### （一）業力の由来

業力は徳と相反する黒い物質です。佛教ではそれを悪業(あくごう)と言いますが、われわれはここで業力と言います。ですから悪事を働くことは、業力を造ることだと言われます。業あるいは業力は、本人がこの世あるいは前世で犯した間違いに由来しているのですが、たとえば殺生(せっしょう)をしたとか、誰かをいじめたとか、誰かの利益を奪ったとか、陰で誰かを非難したとか、誰かに冷たくしたとかなどなど、いずれも業力を作り出すことになります。一部の業力は先祖や親戚友人から移ってきたものもあります。人は拳骨を振り挙げて他人を殴るとき、それと同時に、白い物質を相手に投げ渡し、自分の身体のその部分は黒い物質に取って代わられてしまいます。殺生は最大の悪行で、悪事を働くことであり、非常に重い業力を造り出してしまいます。業力は人を

病気に至らしめる重要な原因です。もちろん業力は必ずしも病気として現れてくるとは限らず、厄介なことに遭遇するなどということもあり得ますが、いずれも業力が作用しています。ですから修煉者は決して良くないことをしてはなりません。あらゆる良くない行為がみな良くない信息を作り出し、あなたの煉功に深刻な影響を与えてしまうからです。

植物の気を採るよう主張する人がおり、功を教えるときも植物の気の採り方を教えています。どんな樹が良いとか、どんな樹の気が何色をしているとか、興味津々に話しています。中国の東北のある公園で、何の功をやっているのか分かりませんが、何人かの人が地面を転げ回り、起きあがっては松の木の周りをぐるぐる回って、松の木の気を採るものですから、わずか半年であたり一面の松の木を枯れさせてしまいました。これは業を造る行為であり、殺生でもあります！国土の緑化や生態均衡の維持から言っても、高い次元から言っても、植物の気を採るのは良くないことです。浩瀚(こうかん)たる宇宙は果てしなく広がっており、どこにでも好きなだけ採れる気があるのですから、そこから思う存分採ればよいのに、どうしてよりによって植物をいじめるのでしょうか？　煉功者として、あなたの慈悲心はどこにいったのでしょうか？

万物にはみな霊があります。現代科学は植物に生命があるばかりでなく、霊性もあり、思惟や感情もあり、さらには超感覚功能もあることを認識しています。あなたの天目が法眼通に達すると、世界がまるっきり違う様相を呈しているのに気づくでしょう。外に出かけると、

石ころも、壁も、樹も、みなあなたに話しかけてきます。いかなる物体にも生命体が存在しており、その物体が形成されるとき、すでに一個の生命体が入っているのです。有機物質と無機物質はわれわれ地球人が区分けしているものです。寺の人は茶碗が割れても非常に気の毒に思います。なぜならいったん壊されると、その生命体が解放され出てくることになりますが、生命の過程を歩み終えていないため、行くところがなくなるからです。ですから自分を殺した人を憎み、憎めば憎むほどその人の業力も大きくなります。「気功師」と称する人のなかに狩りをする人がいますが、慈悲心はどこへいったのでしょうか？　佛道両家はいずれも天の理に背いて物事を行ったりしません。そんなことをするのは殺生にほかなりません。

鶏を殺したり、魚を殺したり、釣りをしたりなど、過去にたくさんの業を造ったので、煉功できないのではないかと言う人がいますが、そうではありません。それは無知の時にやったことなので、さらに大きな業力を造ることはありません。これから二度とこういうことをしなければいいのです。ただ、今後こういうことをすると、分かっていながらわざと罪を犯すことになるので、いけません。一部の学習者はまさにこういう業力を持っています。あなたが講習会に参加したのはまさに、縁があったからであり、上を目指して修煉できるのです。蠅や蚊が部屋に入ってきたら殺すかどうか？　皆さんは現在この次元で殺しても間違いではありません。追い払えなければ殺してしまえばいいのです。ものは死ぬべき時には、自ずと死ぬのです。釈迦牟尼は在世中、湯浴みをしようと思って、弟子に浴槽の掃除をさせようとしたことがあ

ります。ところが弟子は浴槽に虫がいるのを見て、どうしたらいいかと聞きに戻ってきました。釈迦牟尼は今一度、「お前に掃除させるのは浴槽なのだ」と、言いました。弟子は悟り、浴槽をきれいに掃除しました。一部のことはあまり重く見過ぎてはいけません。われわれはあなたに何事にもびくびくするような人になってほしいとは望んでいません。複雑な環境の中に身を置きながら、ミスを犯してはいけないと、四六時中神経を高度に緊張させるのも、わたしに言わせれば、いけません。これも一種の執着心になります。恐れること自体が執着です。

われわれが慈悲心を持ち、如何なることに対しても慈悲の心を抱いていれば、それほど簡単に問題が起きることはありません。個人の利益に対して淡々としていて、心根が善良であれば、そこから制約を受けるので、何事をするにしても、悪いことをしでかすことはありません。信じられないのならやってみてください。いつも怒りっぽい態度で、いつも争い闘おうとしていれば、良いことでもあなたの前では悪くなってしまいます。理を握ってしまうと譲ることを知らない人をよく見かけますが、そういう人は理を握ると、人を懲らしめるものをつかんだかのようになります。それからあることが気にくわないからといって、もめごとを引き起こしてはいけません。あなたが気にくわないことが必ずしも間違っているとは限りません。煉功者として絶えず次元を高めているとき、あなたの一言一言にはエネルギーがあって常人を制約することができるので、無分別に言ってはいけません。特にあなたに真相が見えないとき、因縁関係が見えないときは、悪いことをして

しまいやすいし、業を造りやすいのです。

## （二）業を消す

世間の理と天上の理は同じであり、他人に借りがあれば、返さなければなりません。たとえ常人でも人への借りは返さなければならないのです。一生の間にあなたが遭遇する難や劫はいずれも業力から生まれたものなので、あなたはそれを返さなければなりません。本当に修煉する人にとって、あなたの人生の道はこれから変わります。あなたの修煉に適する道を改めて段取りしてあげなければなりません。師があなたの業力の一部を減らしてくれますが、残りはみなあなたの心性を高めるためのものですので、あなたが自分で煉功と心性の修煉を通してそれを返却し償えばよいのです。今後あなた方が遭遇するあらゆる問題は決して偶然なものではないので、心の準備をしておいていただきたいのです。難に遭遇させたり、常人が放下できないありとあらゆるものを放下させたりなど、あなたはあれこれと面倒なことに出会い、家庭をはじめ社会のあらゆる面から問題が現れてきます。突然何か災難に見舞われたり、本来相手に非があるのに、理不尽なことにあなたが責められ、濡（ぬ）れ衣（ぎぬ）を着せられたりするようなことまで起きてくる､などなどです。煉功者は病気になるはずがないのですが、突然重い病気に見舞われることがあります。病気の勢いがすさまじく、ひどくさいなまれるものですから、病院で検査を受けるのですが、何の異常も見つかりません。ところがそのうちどういう訳か、治療も受けていないのに病気が治ってしまいます。実は、あなたのある種の

借りがこういう形で返されたわけです。もしかすると、いつかあなたの配偶者が何のいわれもなくあなたに八つ当たりし、かんしゃくを起こし、どうでもよいことで大喧嘩してくるかもしれませんが、あとから考えてもどういう訳なのか自分でもよく分からないことがあります。煉功者としてあなたは、どうしてそのようなことが起こったのかについて、はっきり分からなければなりません。ほかでもなくあのものがやってきて、あなたに業の償いをさせようとしているのです。その時、あなたはしっかり自分を制御し、心性を守って、事をうまく解消させなければなりませんし、それがあなたの業の消去に手を貸してくれたことをありがたく思い、それに対して感謝しなければなりません。

坐禅の時間が長ければ足が痛くなりますが、気絶するほど痛くなる人もいます。天目の次元の高い人には見えるのですが、非常に痛いとき、煉功者の身体の内外で、黒々とした大きな塊が消えていきます。坐禅の痛さは一頻り一頻りの痛さで、しかも胸が刺される思いがします。悟性のある人は、何が何でも足を崩さずに耐えますが、そうすれば黒いものが消されて白いものへと転化され、功に転化されるのです。煉功者の業力は坐禅と煉功で完全に消されるわけではなく、そのほかにも心性や悟性を高め、魔難に耐えなければなりません。肝心なのは、われわれは善良な人でいることです。われわれの法輪功では善の心がとても早く表れてくるので、多くの煉功者は煉功の時坐禅をはじめると、いわれもなく涙が湧き、何を考えても悲しく思われ、誰を見ても気の毒に思いますが、それはほかでもなく慈悲心が生まれてきたのであり、あなたの天性や本当の自我が宇宙の特性である「真・

善・忍」と通じ始めているのです。あなたに善の心が表れれば、あなたのなす事も善になります。あなたの内心から外在的顕現まで、きわめて善良なのが一目で分かります。その時になれば、誰もあなたをいじめたりしなくなります。本当にあなたをいじめる人がいても、あなたの大慈悲心が作用して、相手に仕返しをしません。それも一種の力であり、あなたが常人に陥らないように助けてくれているのです。

あなたが劫難に遭遇したとき、その慈悲心がこの難関を乗り越えるのに力を貸してくれますし、同時にわたしの法身もあなたを見守り、あなたの生命を守ってあげますが、難は必ず通らなければなりません。たとえばわたしが太原で講習会を開いたときのことですが、ある老夫婦がわたしの講習会に参加しに来る途中急いで道路を渡ろうとして、道路の真ん中へ来たとき、一台の車が飛ぶように走ってきて、いきなりお婆さんを引っかけ、十数メートル引きずってから、道路に振り落としました。車は二十数メートル先でようやく止まり、運転手が車から飛び降りてきて失礼なことを言いました。車に乗っていた人も聞き苦しいことを口にしました。しかしお婆さんは何も言わずに、わたしの言ったことを思い出して、立ち上がると、「大丈夫、何でもありませんよ、どこも怪我していませんよ」と言いながら、お爺さんを引っ張って会場へと入って行きました。その時、彼女がもし「ここも駄目、そこも駄目だわ、病院へつれて行ってほしい」とでも言ったら、それこそ本当に駄目になってしまいますが、彼女はそうしませんでした。お婆さんはわたしに、「先生、どういうことなのか分かっています。これは業を消してくださっているのですね！」と、言いました。大きな

難がひとつ解消され、大きな業力が一塊取り除かれたのです。このことから彼女の心性、悟性がとても良いということが分かります。あのお年で、あのスピードの車にあれだけ引きずられて地面にあんなにたたき付けられたにもかかわらず、立ち上がりました。心がきわめて正しいのです。

劫難が来たとき、見た目にはとてつもなく大きく、あたかもどう考えても脱け出す道がないように思われる時があります。ところが何日かどたばたしているうちに、突然、道が見えてきて、一瞬のうちに事情ががらりと変わったりすることがあるかもしれません。実はわれわれの心性が向上し、あのものが自然に消えたためです。

思想の境地を高めようとすれば、世間のさまざまな魔難による試練を乗り越えなければなりません。この過程において、あなたの心性が本当に向上し、安定してきて、業も消されれば、魔難を乗り越えたということですので、功も伸びます。もし心性の試練において、心性を守ることができず、間違ったことをしたとしても、落ち込んだりせずに、積極的に教訓を汲み取り、足りないところを見つけ、「真•善•忍」に照らして努力してください。心性を測る次の難題がもしかすると踵（きびす）を接してやってくるかもしれません。功力の向上につれて、心性を試す魔難はますます激しく、ますます突然にやってくるかもしれません。関門をひとつ乗り越えるたびに功力が少しだけ伸びますが、乗り越えられなければ功もとどまります。小さい試練では、少しだけ伸び、大きい試練なら大きく伸びます。煉功者は一人一人大きな苦しみに耐える用意、大きな困難を迎える決意と気力を持ってください。代

価を支払わなければ、本当の功を得ることはできません。代価も支払わず、苦しみを嘗めることもせず心地よく功を得ようとしても、それはあり得ない話です。心性が根本から良くならず、如何なるものであれ個人の執着心を持ったままでは修煉して大覚者になれるはずがありません。

## 七、魔を招く

魔を招くとは、煉功者の煉功の過程において現れる煉功を妨げる現象や光景を指しており、それらは煉功者が高い次元を目指して修煉するのを阻もうとするものであり、魔が債務の取り立てに来たものとも言えます。

功法の修煉が高い次元に達すると、必然的に魔を招く問題に遭遇します。人間の一生やその先祖は多かれ少なかれ何らかの悪いことをしており、これらの悪いことを業力と言います。人の根基が良いかどうかは、彼の持っている業力の量によって決定されますが、たとえ非常に良い人であっても、業力がないはずはありません。修煉していないので、分からないだけです。もしあなたが単に病気治療と健康増進のためにやっているのなら、あなたを相手にする魔はいません。いったんあなたが高い次元を目指して修煉しようとすれば、魔はあなたに干渉してきます。魔はありとあらゆる方法であなたを妨害することができますが、目的は、高い次元への修煉を妨げ、修煉を成就させ

ないことです。魔の現れ方はさまざまですが、日常生活上の現象として現れてくるのもあれば、他の空間から来た信息の形で妨害するのもあり、坐禅をすれば何かが邪魔しに来て、入静させてくれず、高い次元への修煉をさせてくれません。時にあなたは、坐禅をすればうとうと居眠りしたり、あるいは次々と雑念が浮かぶなど、煉功状態になかなか入れません。時にはあなたが、煉功し始めたかと思うと、もともとまわりが非常に静かだったのに、突然足音をはじめ、門をバタンと閉める音、車のクラクション、電話のベルなど、さまざまな騒音が起こり、入静させてくれません。

もう一つは色魔です。煉功者が坐禅中あるいは夢の中で、目の前に美男子あるいは美女が現れ、あなたを誘惑し、刺激的なしぐさで美しい異性に弱いあなたの心をくすぐります。一度でも乗り越えることができなければ、どんどんエスカレートして、高い次元を目指して修煉する心を棄てるまで、あなたを誘惑しに来ます。この関門はなかなか乗り越えるのが難しく、これで挫折した煉功者は少なからずいました。皆さんには心の準備をしておいてほしいのです。もし心性をしっかり守れず、一回乗り越えられなかったら、そこから真剣に教訓を汲み取らなければなりません。あなたが心性を本当に守れて、その執着心を完全に取り除くまで、それは繰り返し誘惑に来るものです。これは大きな関門なので、乗り越えなければなりません。さもなければ得道することはできず、修煉して成就することもできません。

魔のもう一つの形は、煉功中あるいは睡眠中、突然おぞましい顔が見えることがあります。いかにも憎々しげに、まぎれもなく目の前に

いて、刀を持って人殺しをしようとしているように見えますが、しかしそれは脅しに過ぎません。たとえ本当に切りつけようとしても切りつけることはできません。師が煉功者の体外に防御の覆いをかけてくれているので、刃物も届かないのです。人を脅すのは煉功をやめさせようとするためです。これらのことは、あるひとつの次元、ひとつの段階の現れに過ぎないので、数日、一週間あるいは数週間ですぐに通過することができます。心性がどれほど高いか、こういうことをどう受け止めるかが問われるのです。

## 八、根基と悟性

根基とはその人の先天から携えてきた白い物質、すなわち徳という有形の物質のことを指しており、多く携えていれば根基が自ずと良いのです。根基の良い人は返本帰真しやすく、道を悟りやすいのです。彼の頭の中には妨げるものがなく、気功を学ぶと聞けば、修煉のことを聞けば、興味を持ち、学ぼうとしますので、宇宙と通じあうことができます。老子が言ったように、「上士、道を聞けば、勤めて之を行う。中士、道を聞けば、存るが若く、亡きが若し。下士、道を聞けば、大いに之を笑う。笑わざれば、以って道と為すに足らず」。返本帰真しやすく、すぐ道を悟る人は、「上士」に属するものです。反対に、黒い物質の多い人、根基が劣っている人は、良いものに接することができないように、身体のまわりに障壁のようなものができてしまい

ます。良いものに接したとしても、それを信じないようにその人を阻みますが、実はこれはほかでもない業が作用しているのです。

根基の問題を取り上げれば、必然的に悟性の問題に触れなければなりません。悟とは賢いことだと思い込んでいる人がいます。常人が言う賢い、ずる賢いというのは、われわれの言う修煉からあまりにもかけ離れています。このような賢い人は往々にして悟りを開きにくいものであり、彼らは現実の物質世界のみを重視し、如何なる損もしようとせず、如何なるメリットも手放そうとしません。とりわけ一部の人は、自分に学問があり、知識があり、賢いとうぬぼれて、修煉のことを荒唐無稽な話だと見ています。煉功して心性を修煉することは、彼らにとって摩訶不思議なことであり、彼らは煉功者がみな薄のろだ、迷信をやっているのだと思っています。われわれの言う「悟」は、賢いことを意味しているのではなく、人間性が返本帰真して、良い人になり、宇宙の特性に合致することを指しています。根基はその人の悟性を決定づけるので、根基が良ければ、悟性も良いはずです。ただ根基が悟性を決めるのですが、悟性が完全に根基の制約を受けるわけでもありません。根基がいくら良くても、理解力が劣り、悟れなければいけません。根基があまり良くなくても、悟性が良い人もいますが、上を目指して修煉するのに何ら問題はありません。われわれは衆生を普く済度するから、悟性を問いますが、根基は問題にしません。良くないものを少なからず持っていても、上を目指して修煉する決意さえあればよく、この一念が出ればそれはまさに正念です。この一念さえを持っていれば、他人に比べせいぜい多めに代価を払うだけ

で、最終的に修煉して成就することができるのです。

煉功者の身体はすでに浄化されており、功が出てからは身体に病気があるはずがありません。なぜなら体内の高エネルギー物質はすでに黒い物質の存在を許さないからです。しかしそれを信じない人がおり、自分に病気があるとばかり思い込み、「どうしてわたしはこんなに辛いのか！」と言います。あなたは功を得ており、あんなに素晴らしいものを得たのに、辛くないはずがありますか？　修煉ですから、それ相応の代価を払わなければなりません。本当のところそれは表面上のものに過ぎず、あなたの身体には何の影響もありません。病気のように見えていても、全然病気ではありません。あとはあなたがいかに悟るかにかかります。煉功者は苦の中の苦に耐えることができなければならないばかりでなく、悟性も良くなければなりません。面倒なことに遭遇しても、悟ろうとしない人がいます。わたしがここで高い次元のことや、いかに高い基準で自己を律するべきかについて話しているのに、そういう人は相変わらず自分を常人と混同しており、甚だしきに至っては、自分を本当の煉功者の状態に置いて煉功することができず、自分が高い次元に身を置けることすら信じようとしません。

高い次元で言う悟とは、悟りを開くことを指します。悟には、頓悟（とんご）と漸悟とがあります。頓悟とは、修煉の全過程を通して何もかも鍵を掛けられて修煉していることを指します。修煉の全過程を歩み終え、心性が向上し、最後の一瞬になって、功能が炸裂して出てきます。天目が一瞬のうちに高い次元まで開き、思惟が他の空間の高次生命

に接触して、一度に宇宙の各空間、各単元世界の真相が見えます。その上彼らと意志疎通ができ、大きな神通力を発揮することができるようになります。頓悟の道はもっとも難しく、歴代において根基の相当高い人を弟子に選り抜き、代々一人にしか伝えませんでした。普通の人ではとうてい耐えられるものではありません！　わたしはこの頓悟の道を歩んできたのです。

わたしがいま皆さんに伝えるのは、漸悟に属するものです。それは修煉の過程において、現れるべき功能があればその功能が現れるようになっているものです。とはいえ功能が現れたからといって、絶対に使わせてくれるとは限りません。あなたの心性がまだ一定の次元まで高まっておらず、自分を制御することができず、悪いことをする恐れがあるときは、功能はしばらくの間使わせてくれません。しかし最終的にはあなたに与えるものです。修煉を通して、次元が徐々に高まり、徐々に宇宙の真理を認識していって、頓悟と同じように、最終的に圓満成就に達することができます。漸悟という道は比較的歩みやすく、危険性はありません。難しいのは、修煉の過程がすべてあなたに見えていることであり、あなたはより一層厳しく自分を律しなければなりません。

## 九、清浄心

煉功の時に入静できないため、入静の方法を探し回っている人が

います。「先生、わたしは煉功の時どうして入静できないのですか。何か方法を教えてください。どんな手法を用いれば、坐禅の時入静できるようになるのでしょうか」と、わたしに尋ねてくる人がいます。わたしに言わせればあなたは入静できるはずがありません！　たとえ神仙があなたに方法を教えてもあなたは入静できません。なぜでしょうか？　あなた自身の心が静かで清らかではないからです。人間はこの社会に生きており、七情六欲をはじめ、さまざまな個人の利益や、自分自身のこと親戚友人のことまであなたの心に引っ掛かっています。頭の中でそれらの占める比重があまりにも大きく、相当重要な位置に置かれているのですから、坐禅の時にどうして入静できるでしょうか？　人為的にそれらを抑えつけようとしても、それらが勝手に飛び出してきます。

佛教の修行方法では、「戒・定・慧」が重んじられます。「戒」とは、執着するものを放棄することです。佛の名号を念じる人がいますが、それは自分の思惟が、一念で万念に追い払うような状態になるまで、一心不乱に念じなければなりません。しかしそれも一種の功夫であって、方法ではありません。信じられなければ念じてみてください。口で佛の名号を念じていながら、頭の中ではまったく違うものがかき乱れるに違いありません。昔チベットの僧侶は佛の名前を一日数十万回、一週間念じなければなりませんでした。頭がぼうっとして麻痺し、しまいには頭の中に何もなくなります。つまり一念で万念を追い払ったのです。それは一種の功夫であって、あなたには無理かもしれません。「丹田を意守する」とか、数を数えるとか、目で何かをじっと見

つめるとかいった方法を教える功法もありますが、実のところ、これらはどれもあなたを完全に入静させることができません。煉功者は静かで清らかな心を持たなければならず、個人の利益を棄てて、貪欲(どんよく)の心を放下しなければなりません。

実は、入静できるかどうか、入定できるかどうかは、その人の功夫の高さ、次元の高さを示しています。坐禅するやいなや入静できるのは、次元の現れです。しばらく入静できなくても、構いません。修煉の過程で徐々にできるようにしていけばよいのです。心性は徐々に高まり、功は徐々に伸びるものです。個人の切実な利益と欲望に淡々としていられなければ、功は伸びるはずがありません。

煉功者はいつ如何なる時でも高い基準で自己を律しなければなりません。社会のあらゆる複雑な現象やさまざまな低俗で不健全なもの、七情六欲にまつわるものが、いつでも煉功者を妨害しています。テレビや映画、小説の中で宣伝しているのは、常人の中の強い人になり、一層現実的な常人になることです。これらから超脱することができなければ、あなたは煉功者の心性、心境との差もますます広がり、あなたの得る功もますます少なくなります。煉功者は低俗で不健全なものになるべく少なくあるいはまったく接触しないようにすべきで、視て見ぬ、聴いて聞かぬように、他人に動かされず、心を動かされないようにしなければなりません。わたしがよく言うことですが、常人の心はわたしを動かすことができません。わたしを誉めてくれる人がいても、わたしはそのために喜ぶこともなく、わたしを罵る人がいても、わたしはそのために怒ることもありません。人間同士、常人同士のど

んなにひどい心性の妨害もわたしには作用しません。煉功者はあらゆる利益に無頓着で、何もかも気に掛けないようにしなければなりません。そうなれば、あなたの悟道(ごどう)の心が成熟したことになります。名利を強いて求める心がなければ、名利や地位をどうでもよいものと見ることができれば、あなたは煩悩(ぼんのう)にさいなまれることも、立腹することもなく、永遠に心が穏やかな状態でいることができます。何でも放下できれば、自ずと清静(せいせい)になります。

わたしは大法を皆さんに伝えました。五式の功法も皆さんに教え、皆さんの身体を浄化し、皆さんの身体に「法輪」や「気機」を植え付け、その上わたしの法身も皆さんを守ってあげることになっています。皆さんに与えるべきものは全て与えました。講習会の間は、わたしが主役ですが、これからは皆さん次第です。師は門まで導きますが、修行は各自にかかっています。皆さんは大法を隅々まで理解し、丹誠(たんせい)を込めて悟り、いつ如何なる時でも心性を守り、着実に修煉に勤め、苦の中の苦に耐え、忍び難いことを忍ぶことができれば、きっと修煉して成就することができるものと思います。

功を修するに路有り、心が徑(みち)となり
大法に辺(はてし)無く、苦が舟と作(な)る

# 第四章　法輪功の功法

　法輪功(ファールンゴン)は佛家修煉の一種の特殊な方法であり、一般の佛家修煉法と異なる独特なところがあります。本功法は上乗修煉大法であって、昔は心性のきわめて高い者あるいは大根器の人がはじめて習うことのできる特殊な強化修煉法であったため、普及させるには向いていませんでした。しかしより多くの煉功者に本法門を理解してもらい、向上させるために、そして修煉に志のある大勢の皆さんの要望を満たすために、本功法から普及に適する修煉方法を整理して世に伝えることにしました。それでもこれは一般功法で学ぶものと一般功法の次元を遙かに超えています。

　法輪功を修煉する者は、功力と功能を速やかに伸ばすことができるばかりでなく、非常に短い間に威力この上ない法輪を修煉して得ることができます。法輪は形成されると、普段は下腹部で自動的に回転して止まらず、絶えず宇宙からエネルギーを採りこみ演化して、最終的に修煉者の本体の中でそれらを功に転化することになっており、それによって法が人を煉る目的を達成します。

　本功法は、五式の動作、すなわち佛展千手法、法輪樁法、貫通両極法、法輪周天法および神通加持法からなっています。

# 一、佛展千手法（Fozhan Qianshou Fa）

**功法の原理：**

「佛展千手法」の要点は伸びやかにすることであり、脈という脈をみな貫通させるようにします。初心者は、煉功によって気を速やかに得ることができますし、煉功に素養のある者は飛躍的な向上を果たすことができます。この功法は最初から脈という脈を開かせ、煉功者をして非常に高い次元に立って煉功させます。本功法の動作は比較的簡単ですが、「大道は簡を極め易を極める」ものですから、動作は簡単であっても、マクロで功法全体の煉り出してくるものを制御しています。この功を煉りはじめると、身体が熱くなり、エネルギー場が非常に強いという特殊な感覚を覚えることがありますが、それは全身のあらゆる気の通路を開かせ、通じさせたからです。気が塞がっているところを滞りなく通じさせ、体内及び皮下の気を激しく運動させて、宇宙の中のエネルギーを大量に吸収させるのが目的ですが、同時に、煉功者をして速やかに気功エネルギー場の状態に入らせることもできます。本功法は法輪功の基礎功法として煉るべきで、煉功の始めにまずこの功法を煉ったほうが良いでしょう。これは一種の強化修煉の方法です。

訣[1]： 身神合一 (Shenshen Heyi)　　(体と心が一つになり)
動静随機 (Dongjing Suiji)　　(動と静は機に随い)
頂天独尊 (Dingtian Duzun)　　(天ほど高く最も尊い)
千手佛立 (Qianshou Foli)　　(千手佛が立つ)

[1] 煉功音楽では動作が始まる前に、一回のみ中国語で訣が読み上げられます。五式の動作の訣はそれぞれ異なり、声に出して暗誦しても、音声を聴くだけでも、どちらでも構いません。

図 1-1

### 構え

全身を緩めますがだれないようにします。両脚は肩幅ぐらいに開き、自然に立ち、両足は少しまげて、膝と股の二カ所はなめらかな状態にします。下あごを微かに引き、舌は上あごにあてがい、歯と歯の間は微かに開け、唇を閉じ、両目は微かに閉じ、表情を安らかにします。煉功中は自分が非常に高大だと感じられます。

### 両手結印（Liangshou Jieyin）　両手を結印する

両方の手を持ち上げ、掌を上向きにします。両手の親指先を軽く触れ合わせ、他の各四本の指は開かずに重ねます。

男性は左手を上にし、女性は右手を上にして、楕円のような形をつくって、下腹の前に置きます。両上腕を少し前に出し、両肘を張って、わきは空かせておきます。（図 1-1）。

図 1-2

### 弥勒伸腰（Mile Shenyao）　弥勒佛が腰を伸ばす

「結印」から始まります。手印の形のままで上にあげ、手が上がるにつれて、両足を徐々にまっすぐ伸ばし、手を頭の前に持ち上げて来た時、結印を解き、掌を徐々に上に反転し、頭上に達した時、掌を上向きにし、十本の指を相対させます。両手の指先の間の距離は20 ～ 25 センチ（図 1-2）。同時に、頭は上へ突き、両脚は下へ踏んばり、身体をまっすぐに伸ばし、両手の掌根に力を入れて上へ上げ、全身を徐々にぴーんと張ります。約 2 ～ 3 秒間張ってから、全身を突如緩めます。特に膝と股の二カ所はなめらかな状態に戻すようにします。

図 1-3　　　　図 1-4

**如来灌頂（Rulai Guanding）　如来佛が頭上からエネルギーを注ぎ込む**

上式に続いて行います。両掌を同時に外側へ 140 度回し、手を「漏斗状（ろうと）」にし、手首を伸ばし掌を下ろします（図 1-3）。両掌を下ろしながら胸のほうに向け、手と胸の間に約 10 センチの距離を置きながら、そのまま下腹部へ持っていきます（図 1-4）。

図 1-5

図 1-6

**双手合十（Shuangshou Heshi） 両手を胸の前で合掌する**

手が下腹部に達すると、引き続いてすぐ両手を胸の前まで上げて「合掌」します（図 1-5）。「合掌」の際、手指と手指、掌根と掌根をしっかり合わせますが、掌の中心には隙間をもたせ、両肘を張って、両前腕を一直線にします。（両手は「合掌」「結印」以外、すべて「蓮花掌」です。以下同じ）

**掌指乾坤（Zhangzhi Qiankun） 手のひらが天と地を指す**

「合掌」から始まります。両掌を約２～３センチ離し、それと同時に掌を回し始めます。男性は左手（女性は右手）を胸のほうへ回し、右手を胸の外へ回して、左手を上、右手を下にして前腕と「一」の字の形状にします（図 1-6）。

図 1-7　　図 1-8

続いて、左前腕を左斜め上方へ伸ばします。掌を下向きにし、手の高さは頭と同じ。右手はやはり胸の前に置き、掌を上向きにします。左手を徐々に伸ばしながら、全身を徐々にぴーんと張り、頭は上へ突き、足は下へ踏んばります。左手は左斜め上方へまっすぐに張り、右手は胸の前で、上腕に従って外へ張ります(図 1-7)。約２～３秒間張ってから、全身を突如緩めます。左手をまた胸の前に戻して右手と「合掌」します。それから、また掌を回し、右手（女性は左手）を上にし、左手を下にして（図 1-8）伸ばします。

図 1-9

右手は先ほどの左手の動作を繰り返し、即ち右前腕を右斜め上方へ伸ばします。掌を下にし、手の高さは頭と同じ。左手はやはり胸の前に置き、掌を上向きにします。ぴーんと張ってから（図 1-9）全身を突如緩めます。手を戻してから、胸の前で「合掌」します。

図 1-10

### 金猿分身（Jinhou Fenshen） 金の猿が分身する

「合掌」から始まります。両手は胸の前で分けて両側へ伸ばし広げ、肩と「一」の字の形にします。全身は徐々にぴーんと張り、頭は上へ突き、足は下へ踏んばり、両手は両側へ力を入れ、四方へ均等に力を入れて張ります(図 1-10)。約２～３秒間張ったら、全身を突如緩め、両手を胸の前へ戻して「合掌」します。

図 1-11　　図 1-12

## 双龍下海（Shuanglong Xiahai）　二匹の龍が海に下りる

「合掌」から始まります。両手を分けながら、前下方へ伸ばします。両腕を分けて平行にし、まっすぐに伸ばした時、大腿との角度は約30 度（図 1-11）にします。全身を徐々にぴーんと張り、頭は上へ突き、足は下へ踏んばります。約２～３秒間張ってから、全身を突如緩め、手を戻して胸の前で「合掌」します。

## 菩薩扶蓮（Pusa Fulian）　菩薩が蓮の花に手を差し伸べる

「合掌」から始まります。両手を分けながら、体の両側斜め下方へ伸ばし広げます。手が体の脇に達した時、両腕をまっすぐに伸ばし、大腿との角度を 30 度ぐらいにします（図 1-12）。この時、全身は徐々にぴーんと張り、手の指先は下へ力を入れます。それから、全身を突如緩め、両手を戻して胸の前で「合掌」します。

図 1-13

**羅漢背山 (Luohan Beishan)　羅漢が山を背負う**

「合掌」から始まります。両手を分けながら、体の後ろへ伸ばし、同時に両掌を後方に向けるように回します。両手が体の脇にきた時、両手首を徐々に曲げ始め、手が体を過ぎてから、手腕を 45 度まで曲げます (図 1-13)。全身は徐々にぴーんと張ります。手を後ろへ伸ばしてから、頭は上へ突き、足は下へ踏んばり、身体はまっすぐにします。約 2 〜 3 秒間張ってから、全身を突如緩め、両手を戻して胸の前で「合掌」します。

図 1-14

図 1-15

**金剛排山（Jingang Paishan）　金剛力士が山を押す**

「合掌」から始まります。両手を分けながら、掌を立てて前方へ押し出し、指先を上向きにし、腕は肩と同じ高さにします。腕をまっすぐに伸ばしてから、力を入れて張り、頭は上へ突き、足は下へ踏んばり、身体はまっすぐにします（図 1-14）。約２～３秒間張ってから、全身を突如緩め、両手を戻して胸の前で「合掌」します。

**畳扣小腹（Diekou Xiaofu）　両手を下腹部の前で重ねる**

「合掌」から始まります。両手をゆっくり下ろしながら、掌を腹部に向くように回し、手が下腹部に達した時、両手を重ねます。男性は左手を内側に、女性は右手を内側にして、掌を手の甲に向けます。手と手、手と下腹の間は約３センチ空け、手を重ねる時間は普通 40 ～ 100 秒間です（図 1-15）。

図 1-16

終了の姿勢

両手を結印します（図 1-16）。

# 二、法輪椿法（ファールンとうほう）（Falun Zhuangfa）

**功法の原理：**

本功法は「法輪功」の第二式功法で、静椿法に属するものです。四つの法輪を抱える動作から構成されています。動作は比較的単調で、しかも各動作は長時間煉功することが要求されます。初めて站椿（たんとう）を学ぶ人は、煉功を始めたころは両腕がとても重く、だるく感じられますが、煉り終わるとすぐ身体が軽快に感じられ、仕事をした後のような疲労感はありません。時間が経ち、煉功の回数が増えるにつれて、両腕の間に「法輪」の回転が現れます。常に法輪椿法を煉功すれば、全身を隅々まで貫通させ、功力を増加させることができます。「法輪椿法」は智恵を増し、次元を高め、神通力を加持する全面的な修煉方法です。功は簡単ですが、煉るものはとても多く、非常に全面的なものです。本功法の動作は自然でなければならず、自分が煉功しているということを忘れてはいけません。揺れてはいけませんが、少しくらい動くのは正常です。本功法は法輪功の他の功法と同じく、煉り終わっても功を収めません。法輪は常に回っており、それを止めることはできないからです。煉功において、各動作の時間に対する要求は人によって違いますが、長ければ長いほどいいのです。

訣：　生慧増力　（Shenghui Zengli）（智慧を生み力を増し）
　　　容心軽体　（Rongxin Qingti）　（心は溶けて身体は軽く）
　　　似妙似悟　（Simiao Siwu）　　（玄妙のようで悟ったよう）
　　　法輪初起　（Falun Chuqi）　　（法輪が起こり始める）

図 2-1

図 2-2

### 構え

全身を緩めますが、だれないようにします。両脚は肩幅ぐらいに開き、自然に立ち、両足は少しまげて、膝と股の二カ所はなめらかな状態にします。下あごを微かに引き、舌は上顎にあてがい、歯と歯の間は微かに開け、唇を閉じ、両目は微かに閉じ、表情を安らかにします。両手は結印します (図 2-1)。

### 頭前抱輪 (Touqian Baolun) 頭の前で法輪を抱える

「結印」から始まります。両手を腹の前からゆっくり持ち上げながら結印を解きます。両手を頭の前まで持ち上げた時、手の掌を顔に向け、高さは眉毛と同じにし、十本の指先は相対させます。指先は約 15 センチ離し、両腕は丸く抱えるようにし、全身を緩めます (図 2-2)。

図 2-3

図 2-4

**腹前抱輪（Fuqian Baolun）　腹部の前で法輪を抱える**

両手を「頭の前で法輪を抱える」の状態からゆっくり下げ、姿勢を変えずにそのまま下腹部まで下ろします。手と下腹との距離は約 10 センチ。両肘を張り、わきを空かせ、掌を上に向け、十本の指先は相対させます。指先は約 10 センチ離し、両腕は丸く抱えるようにします（図 2-3）。

**頭頂抱輪（Touding Baolun）　頭上で法輪を抱える**

「腹部の前で法輪を抱える」から始まります。姿勢は変えず、両手をゆっくり頭上まで持ち上げ、頭頂抱輪を行います。両手の十本の指は相対させ、掌は下に向けます。両手の指の間の距離は 20 ～ 30 センチ。両腕は円形に抱えるようにし、両肩、上腕、肘、手首をみな緩めます（図 2-4）。

図 2-5

### 両側抱輪（Liangce Baolun）　頭の両側で法輪を抱える

両手を「頭上で法輪を抱える」の状態から直接、頭の両側まで下ろし、掌を両耳に向けます。両肩を緩め、前腕をまっすぐ立てます。手と耳との距離はあまり近くならないようにします（図 2-5）。

図 2-6

**畳扣小腹（Diekou Xiaofu）　両手を下腹部の前で重ねる**

両手を「頭の両側で法輪を抱える」の状態から直接、下腹部まで下ろし、両手を重ねる状態にします（図 2-6）。両手を結印して終了させます。

## 三、貫通両極法（Guantong Liangji Fa）

**功法の原理：**

本功法は宇宙の気と体内の気を混ぜ合わせ貫通する法です。排出・採集する気の量は多く、煉功者はきわめて短い時間で、体内の病気や黒い気を体外に排出し、そして大量の宇宙の気を採りこみ、身体を浄化させて、早くに「浄白体」の状態に入ることができるようになります。同時に、この功はまた「衝灌（腕を上下に動かす動作）」中に「開頂」することができ、「衝灌」中に脚の裏の人体通路を開くこともできます。

煉功する前に少しばかり、自分は二本の高くて大きな空のパイプであり、天を頂き地に立ち、高大無比だと想像してみてください。体内の気は手の上下に従って動き、頭のてっぺんから衝き出て、宇宙の最も上の果てに直接達します。下へ衝く気は一方の脚から衝き出て、宇宙の最も下の果てにまで達します。そして気は手の動きに従って、両方の果てから再び体内に戻り、今度は反対の方向から発せられます。あわせて九回往復します。九回目まで「衝灌」した時、左手（女性は右手）は上で、右手（女性は左手）が上がってくるのを待ちます。それから同時に下へおろし、下の果てに「灌」してから戻します。身体を通して上下に「衝灌」し、九回往復してから気を戻します。戻した後、下腹部で時計回りに法輪を推し回して、体外の気を体内に引き戻し、そして結印します。煉り終わってから姿勢を戻しますが、功は収めません。

訣：浄化本体（Jinghua Benti）　（本体を浄化し）
法開頂底（Fakai Dingdi）　（法は頂きから底まで開き）
心慈意猛（Xinci Yimeng）　（心に慈しみを持って意は強く）
通天徹地（Tongtian Chedi）　（天と地を突き通す）

**構え**

全身を緩めますがだれないようにします。両脚は肩幅ぐらいに開き、自然に立ち、両足は少し曲げて、膝と股の二カ所はなめらかな状態にします。あごを微かに引き、舌は上あごにあてがい、歯と歯の間は微かに開け、唇を閉じ、両目は微かに閉じ、表情を安らかにします。両手を結印し、合掌します。

図 3-1　　図 3-2

**単手衝灌 (Danshou Chongguan)　片手を衝灌する**

「合掌」から始まります。一方の手で上へ「衝(チョン)」し、もう一方の手で下へ「灌(グワン)」します。手は体外の気機に従ってゆっくりと動き、体内の気は手の上下に従って動きます。男性はまず左手を上に上げ (図 3-1)、女性はまず右手を上に上げます。手は頭の横前方をゆっくり上へ「衝」し、頭のてっぺんから突き出ます。同時に、右手 (女性は左手) をゆっくり下へ「灌」します。それから、もう一方の手と入れ替えて「衝灌」します (図 3-2)。両掌は身体に向け、身体との間に 10 センチの距離を保ちます。行うとき全身を緩めます。手が上下に一往復するのを一回とし、あわせて九回「衝灌」します。

図 3-3　　図 3-4

## 双手衝灌（Shuangshou Chongguan）　両手を衝灌する

「片手を衝灌する」を九回目まで行った時、即ち左手（女性は右手）が上にある時に、もう一方の手も上げます。つまり、両手とも上へ「衝」します（図 3-3）。それから両手を同時に下へ「灌」します（図 3-4）。両手で「衝灌」する時、掌を身体に向け、身体から 10 センチ離します。上下に一往復するのを一回とし、合わせて九回「衝灌」します。

図 3-5　　図 3-6

**双手推動法輪（Shuangshou Tuidong Falun）　両手で法輪を押し動かす**

九回を終えたのち、両手を頭の上から頭、胸を通って下腹部まで下ろし、下腹部で法輪を押し動かします（図 3-5、3-6、3-7）。男性は左手を内側にし、女性は右手を内側にして、手と手の間、手と下腹の間をそれぞれ約 4 センチ開け、時計回りに法輪を四回押し回し、体外のエネルギーを体内に戻します。法輪を押し回す時、両手は下腹の範囲を超えないようにします。

図 3-7　　図 3-8

両手を結印します (図 3-8)。

# 四、法輪周天法（Falun Zhoutian Fa）

**功法の原理：**

この法は人体のエネルギーを幅広く流動させるもので、一本とか数本の脈が流れているのではなく、人体の陰面から陽面にまで全面的に循環し、たゆまず往復しており、一般の通脈法や大、小周天を遥かに超えています。本功法は「法輪功」では中級功法に属します。前の三式の功法の基礎の上で、この功法を煉ることによって、速やかに全身の気脈（その中に大周天を含む）を開き、上から下へ徐々に全身を遍く通すことができます。本功法の最大の特徴は「法輪」の回転によって人体の不正常な状態を正し、人体という小宇宙を初期状態に戻して、全身の気脈が滞りなく通じるようにします。この状態まで煉った時、世間法の修煉の中ではすでにかなり高い次元に達しており、大根器の人は大法の中に入って修煉することができるようになります。この時、功力と神通力は大いに増すはずです。煉る時、手は気機に従って動き、動作はゆるやかに、ゆっくりと、なめらかでなければなりません。

訣：　旋法至虚（Xuanfa Zhixu）　（法は回転して虚に至り）
　　　心清似玉（Xinqing Siyu）　（心は玉のように清らか）
　　　返本帰真（Fanben Guizhen）　（本来の真の自分に返り）
　　　悠悠似起（Youyou Siqi）　（悠々として浮き上がるよう）

図 4-1

図 4-2

**構え**

全身を緩めますが、だれないようにします。両脚は肩幅ぐらいに開き、自然に立ち、両足は少し曲げて、膝と股の二カ所はなめらかな状態にします。下あごを微かに引き、舌は上あごにあてがい、歯と歯の間は微かに開け、唇を閉じ、両目は微かに閉じ、表情を安らかにします。両手は結印し、合掌します。

両手は「合掌」の状態を解きながら、下腹部に下ろし、同時に、両掌を回して身体に向けます。手を身体から約 10 センチ離したまま、下腹前を通って、両足の内側に沿って下へ下ろします。同時に腰をまげて下へしゃがみ (図 4-1)、両手の指先が地面に近づいた時、手をつま先から脚の外側を通してかかとの外側まで回します (図 4-2)。

図 4-3

図 4-4

それから、両手首を少し曲げて、踵から徐々に足の後側に沿って持ち上げます (図 4-3)。両手を背後から上へと上げながら腰を伸ばします (図 4-4)。法輪周天法の間はずっと、両手は身体のいかなる部位にも触れないようにします。もし触れてしまえば、両手のエネルギーが体内に回収されてしまいます。

図 4-5　　　　図 4-6

両手はそれ以上持ち上げられなくなった時、空拳を握り（図 4-5）、わきの下を通して前へ出し、両腕を胸の前で大きく交差させてから（どちらの腕を上にするかは、特に要求はなく、個人の習慣によって自ら決めればよく、男女の別もない）（図 4-6）、両拳を開いて両掌を肩の上に運びます（肩につけないように）。

図 4-7

図 4-8

続いて両掌を両腕の陽の面に沿って両手首のところまで引き、両掌を向き合わせます。即ち外側の手の親指が上を、内側の手の親指が下を向くようにします。両掌は約３～４センチ離し、手と腕は「一」の字状にします (図 4-7)。続いて球を握った格好で掌を捻じって、外側の手と内側の手を入れ替えます。それから、両手を前腕の陰面と上腕の陰面に沿って押し進めながら、上へ持ち上げて頭上を越します。(図 4-8)。

図 4-9

図 4-10

頭上を越してから、両手を交差させ、引き続き脊椎に向かって運びます (図 4-9)。両手は交差を解いて、指先を下に向け、背部のエネルギーと接してから、平行にして頭の上を通って胸の前まで運びます (図 4-10)。これを一つの周天の循環とし、合わせて九回行います。九回終わったら、両手を胸の前を通して下腹部に下ろします。

両手を下腹部の前で重ねた後、両手を結印します。

## 五、神通加持法（Shentong Jiachi Fa）

**功法の原理：**

「神通加持法」は「法輪功」の静功修煉法に属し、「佛」の手印で「法輪」を回して神通力（功能を含む）と功力を加持する複数の項目を同時に修める功法です。本法は中級以上の功法に属し、元は秘密の煉功法に属するものでした。一定の基礎を持った者の要求を満たすために、特にこの功法を世に伝えることにし、それによって縁のある者を済度します。本功法は坐禅して煉功するものであり、結跏趺坐（両足を上げて組む）が最も良いのですが、半跏趺坐（片足を上げて組む）でも結構です。修煉の時、気の流れはかなり強く、体外のエネルギー場もかなり大きくなります。動作は師の植え付けてくれた気機に従って行うもので、手を動かし始めると、心は意に従って動きます。神通を加持する時、意は空となり、潜在意識を微かに両掌に置きます。掌の中心は熱く、重く、痺れ、何か物があるような感じがするはずです。しかし意識的に求めてはならず、自然にまかせます。坐禅の時間は長ければ長いほどいいのですが、自分の功の基礎によって決めてください。時間が長くなればなるほど、強度が増し、功の出るのも速くなります。煉功の時、（何も考えず、いかなる意念もなく）徐々に入静し、静のようであるが定ではない動功状態から徐々に入定していきます。しかし主意識は自分が煉功していることを自覚しています。

| 訣： | 有意無意 (Youyi Wuyi) | （意が有って意が無く） |
| --- | --- | --- |
| | 印随機起 (Yinsui Jiqi) | （印は機に従って動かし） |
| | 似空非空 (Sikong Feikong) | （空のようで空ではなく） |
| | 動静如意 (Dongjing Ruyi) | （動と静は思うがまま） |

図 5-1

図 5-2

### 両手結印（Liangshou Jieyin）　両手を結印する

足を組んで坐禅し、全身を緩めるがだれないようにし、腰を伸ばし頚をまっすぐにし、下あごは微かに引き、舌は上あごにあてがい、歯と歯の間は微かに開き、唇を閉じ、両目も微かに閉じます。心には慈悲を生み、表情を安らかにします。両手は「結印」にして下腹に置き、徐々に入静します（図 5-1）。

### 手印その一

（手を動かし始める時には、心が意に従って動く、師の植え付けてくれた気機に従って動き、その動作はゆるやかに、ゆっくりと、なめらかであることが必要）――両手は「結印」の状態からゆっくり上へ上げ、頭の前方に達した時、徐々に掌を上に反転し、両掌が上向きになった時、手も頭の頂点に達します（図 5-2）。

図 5-3

図 5-4

続いて両手を分けて、頭上で弧を描いて両側へまわし、そのまま頭の横前方にまわします（図 5-3）。引き続き、両手をゆっくり下ろし、両肘はできるだけ内側に寄せ、両掌を上向きにし、指先を前に向けます。（図 5-4）。

図 5-5

図 5-6

それから、両手首をまっすぐに伸ばしながら、胸の前で交差して通過させます。男性は左手を外側、女性は右手を外側にして（図 5-5)、両手を交差させて通過し「一」の字の形になった時、外側にある手は、手首を外側に回し、掌が上を向くように反転させながら、半円を描いて、掌が上向きになるように変え、指先が後ろに向くようにします。手にはある程度力を入れて動かします。内側にある手は外側の手と交差し通過した後、掌を徐々に下方に向くように回し、まっすぐに伸びるまで続けます。手と腕を掌が外向きになるように回し、身体の正面の斜め下方で身体との間の角が 30 度になるようにします。（図 5-6)。

図 5-7

図 5-8

**手印その二**

図 5-6 に続いて行います。左手（上にある手）は内側を動き、右手は掌が内側に向くように回しながら上へ運びます。動作はただ「手印その一」の左右を入れ替え、手の位置を反対にするだけです（図 5-7）。

**手印その三**

男性は右手（女性は左手）の手首をまっすぐに伸ばしながら、掌を身体に向け、胸の前を通過し交差してから、掌が下に向くように回し、引き続き斜め前方下方のすねのところまで持っていきます。腕は必ずまっすぐに伸ばします。男性の左手（女性の右手）は掌が内側に向くように回しながら、上へ運び、右手と交差させてから、掌をひっくりかえしながら、左肩（女性は右肩）前方へ運び、そこで掌を上向きにして、指先を前に向けます（図 5-8）。

図 5-9

### 手印その四

「手印その三」と手の形を入れかえるだけです。男性は左手（女性は右手）が内側、右手（女性は左手）が外側を通ります。動作はただ左右の手を交換し、手の位置を反対にするだけです（図 5-9）。手印の四つの動作は連続しており、途切れることはありません。

図 5-10

図 5-11

**加持球状神通（Jiachi Qiuzhuang Shentong）　球状の神通を加持する**

「手印その四」に続いて行います。上の手は内側、下の手は外側を通します。男性は右掌を徐々に回し、胸に向かって下ろします。男性は左手（女性は右手）を持ち上げ、両前腕が胸の前で「一」の字の形となった時（図 5-10)、両手を両側へ分けながら、（図 5-11）掌が下に向くように回します。

図 5-12

両手が膝の外側上方にきた時、手の高さを腰と同じくし、前腕と手首を水平にして、両腕を緩めます（図 5-12）。この姿勢は体内の神通を手に打ち放って加持するものであり、それは球状を呈する神通です。神通を加持する時、掌は熱く、重く、痺れ、何か物があるような感じがするはずですが、意識的に追求してはならず、自然にまかせます。この功法は行う時間が長ければ長いほど良く、続けられなくなるまで続けます。

図 5-13

図 5-14

**加持柱状神通（Jiachi Zhuzhuang Shentong）　柱状の神通を加持する**

上式に続けて行います。右手（女性は左手）は掌が上に向くように回しながら、下腹部のほうへ移し、掌を上向きにして下腹部に置きます。右手の動きに合わせて、左手（女性は右手）を上げながら、下あごのところへ運びます。掌は下向きのままで、手の高さを下あごと同じにし、前腕と手は平らにします。この時、両掌を相対させ、定式します（図 5-13）。これは柱状に加持する神通であり、「掌手雷」の類いです。自分がもう続けられないと思うまでやります。それから、上の手を前方に半円を描きながら、下腹部まで下ろし、同時に、下の手を掌が下向きになるように反して、下あごのところまで持ち上げます（図 5-14）。腕は肩と水平にし、両掌を相対させます。これも柱状を加持する神通で、ただ手の型を反対にするだけです。行う時間は腕が疲れて続けられないと感じるまでを目安とします。

図 5-15

**静功修煉**

上式に続けて行います。上の手を前方に半円を描きながら下腹部まで下ろし、両手を結印の状態にして（図 5-15）、静功修煉に入ります。入定する時間は長ければ長いほどよいです。

図 5-16

### 終了の姿勢

両手を「合掌」し (図 5-16)、出定して、坐禅の状態を解きます。

# 法輪功を修煉する際の基本的な要求と注意事項

１、法輪功の五式の功法は、順番通りに煉ってもよく、任意に選んで煉ってもかまいません。但し、一般にはまず第一式を煉るのがよく、しかも三回煉るのがよいのです。もちろん、第一式を煉らずにほかの各式を先に煉ってもかまいません。各式はいずれも単独に煉ってもかまいません。

２、動作は正確に、リズムは明確に、手と腕はなめらかにし、上下、前後、左右、いずれも「ゆるやかに、ゆっくりと、なめらかに」を守って、気機に従って行わなければなりません。速すぎても、遅すぎてもいけません。

３、煉功中は主意識で自己を制御しなければなりません。法輪功は主意識を修煉するのですから、わざと揺らそうとしてはいけません。もし揺れることがあれば押さえてください。必要な場合は、目を開けても結構です。

４、全身を緩めます。特に膝と股は緩めなければなりません。あまりにもまっすぐに立つと、気脈がスムーズに通じません。

５、煉功中、動作は軽快で自然に、のびやかに行い、柔の中に剛

があり、途切れることなく思いのままに行ってください。一定の力を入れながらも、硬くぎくしゃくしないようにします。こうすれば、著しい功の効果が得られます。

６、煉功を終える時は、「ただ動作を収めるだけで、功は収めず」、「結印」の動作だけすれば結構です。結印が終われば、動作を収めたことになります。意念で功を収めてはいけません。なぜなら、法輪の回転を止めてはならないからです。

７、久しく病気を患い体が弱っている人は、実際の状況を見て煉功を控えめにしてもよく、任意にどれか一式を選んで修煉してもかまいません。動功を煉ることができないのなら坐禅でもかまいません。一般に煉功は中断するのは良くありません。

８、煉功の場所、時間と方向に関して特別な要求はありませんが、きれいな場所で、静かな環境であることが必要です。

９、この功を煉る時には意念さえ持たなければ、間違いが起きません。しかし別の功法を混ぜてはいけません。煉功の時に別の功法を混ぜたら、法輪が変形してしまいます。

１０、煉功の時にどうしても入静できなければ、師の名前を念じてもかまいません。そのうち自然に入静できるはずです。

１１、煉功の時には多少魔難に遇うことがあります。魔難は「業」を返す方法の一つです。誰にでも「業」はあるのですが、身体の具合が悪くなった時、病気だと思ってはいけません。「業」を消して、修煉のための道をきれいに掃除するために、魔難の到来は速くなり、前倒しにやって来ます。

１２、坐禅の時に足を組めなければ、まず椅子のへりに坐って煉功してもかまいません。同様の効果が得られます。しかし、煉功者としては、足を組めるようにならなければなりません。時間が経つうちに次第に組めるようになるはずです。

１３、静功を煉っているときに、もし画像や何らかの光景が見えたとしても、それを気に留めず、自分の功を煉ってください。もし恐ろしい現象が邪魔してきた時、あるいは何か脅迫を受けた時は、ただちに、法輪功の李先生が私を守ってくれているのだから、何も怖くないと考えてください。あるいは李先生の名前を呼んで、煉功を続けてください。

# 第五章　質疑応答

## 一、法輪と法輪功

弟子：法輪（ファールン）はどんなものから構成されているのですか？

師：法輪は高エネルギー物質から構成されている霊体であり、自動的に功を転化することができますが、われわれのこの空間には存在していません。

弟子：法輪とはどんなものですか？

師：法輪の色は黄金色としか言いようがありません。われわれのこの空間にはまだこのような色はありません。輪の地色は非常に鮮やかな赤で、外輪の地色は橙色になっています。赤と黒の二つの太極は道家のもの、赤と藍の二つの太極は先天大道のものであり、これらは二種類の異なるものです。「卍」は黄金色です。天目の次元の低い人から見れば、扇風機のように回転しているように見えますが、はっきり見えるならそれは非常に美しいもので、煉功者をして修煉において一層勇猛邁進させることができます。

弟子：法輪ははじめはどこにありますか？　その後はどこにありますか？

師：わたしが本当に皆さんに与える法輪は一つしかなく、それは下腹部、つまりよく言う「煉丹」「守丹（しゅたん）」の部位にあり、その位置は変わりません。おびただしい法輪が回転しているのが見える人がいますが、それはわたしの法身が皆さんの身体を調整するために体外で働いているのです。

弟子：煉功して、法輪を作り出すことができますか？　どれくらい作り出せますか？　それは師が授けてくださるのとどう違いますか？

師：煉功して法輪を作り出すことができます。あなたの功力が絶えず高まっていけば、法輪もますます多くなりますが、法輪はいずれも同じものであり、ただ下腹部にある法輪はあちこち動かないもので、根本です。

弟子：どうすれば法輪の存在と回転を体感することができますか？

師：体感する必要はありません。非常に敏感な人がいて、法輪が回転しているのを感じることができますが、法輪を植え付けられたばかりの時は、体内に違和感を覚えたり、腹痛や、何かが動いているのを感じたり、熱い感じがあったりします。慣れてきたら、感じなくなります。しかし功能のある人には見えます。胃袋と同じです。誰も胃袋が動いていると感じません。

弟子：法輪図における法輪の回転方向と学員証（北京第一、二期を指す）のそれとは違いますが、聴講用の学員証における法輪が逆

時計回りをしているのはなぜでしょうか？
師：それは皆さんに良いものを与えてあげようとするためです。法輪が外に向かってエネルギーを放出するのは、皆さんの身体を調整するためなのですから、時計回りに回転していません。皆さんにはそれが回っているのが見えます。

弟子：師が学習者に法輪を植え付ける時機は？
師：ここで皆さんに断っておきますが、われわれの一部の学習者はいろいろな功法を学んできているので、彼らの身体にあるごちゃごちゃしたものを片づけて、良いものを残し悪いものを取り除いてあげることは本当に難しいことで、そのために手続きがひとつよけいに増えました。これを終えてはじめて、法輪を植え付けることができます。その人の煉功の次元の高さによって、法輪の大きさも違います。煉功した経験のない人がいますが、根基は悪くないので、調整をしてあげると、この講習会で病気が取り除かれ、気を煉る次元を通過して、乳白体状態に入ります。そうなると法輪を植え付けてあげることができます。身体が相当悪く、ずっと調整中の人も多くいますが、調整も済んでいないのにどうして法輪を植え付けてあげられますか？　しかし植え付けてあげられない人は少数の人に過ぎませんので、問題がありません。わたしはすでに法輪を形成する気機を植え付けておきました。

弟子：法輪はどういうふうに身につけるのですか？

師：それは身につけるのではありません。わたしは法輪を打ち放って皆さんの下腹部に植え付けますが、しかしそれはわれわれのこの物質空間にあるのではなく、他の空間にあります。この空間では、皆さんの下腹部に腸がありますから、それが回転しだしたら大変ではないでしょうか？　それは他の物質空間にあるもので、こちらと衝突しません。

弟子：次の講習会でも続けて法輪を植え付けてもらえますか？
師：法輪は一つしか得られません。たくさんの法輪が回っているのを感じる人がいますが、それは体外で用いられ、あなたの身体を調整するために用いられるものです。われわれのこの功の最も大きな特徴は、エネルギーを放出するときに、次から次へと法輪を打ち放つことにあります。ですからあなたが煉功していなくてもおびただしい法輪があなたの身体を回っており、あなたの身体を調整してあげています。本当にあなたに与えた法輪は、下腹部にあるそれです。

弟子：煉功しなければ法輪は消えて無くなりますか？　法輪はどれくらい長く持ちますか？
師：あなたが自分を煉功者として自覚し、わたしの言う心性の要求に従って行動すれば、あなたが煉功していなくても、それが消えて無くなることはないばかりか、逆に強化され、あなたの功力も伸びます。しかし反対に、あなたが誰よりもまめに煉功していても、わたしの要求した心性に従って行動していなければ、おそらく煉功は無駄になる

かもしれません。煉功していても役に立ちません。どんな功法をやるにせよ、要求通りにやらなければ、邪法をやっていることになるかもしれません。もしあなたが頭の中で、「誰それはなぜあんなにいまいましいのか？　功能を持つようになったら懲らしめてやる」などと、良くないことを考えていれば、たとえ法輪功を学んでいても、煉功にこんなものを加え、わたしの言う心性の要求に従っていないのですから、それは邪法をやっているということになるのではありませんか？

弟子：師は「法輪はたとえ一億元出しても得られません」とよくおっしゃいますが、それはどういう意味でしょうか？
師：つまり、それはあまりにも貴重だということです。わたしが皆さんに与えたものは法輪だけではなく、皆さんの煉功を保証する一連のものも貴重なものであり、みな千金を積んでも取り替えられないものばかりです。

弟子：遅れてきた者も法輪を得られますか？
師：最後の三日間の前に来た人であれば、みな調整をしてあげ、しかも法輪をはじめ他のものを植え付けてあげます。最後の三日間に来た人の場合は何とも言えませんが、調整は受けられます。何かを植え付けてあげるのは難しいのですが、もしあなたの条件が悪くなければ植え付けてあげることもあります。

弟子：法輪で人体の正しくない状態を直すというのは、一種の方法

ですか？

師：全部が全部法輪で直しているわけではなく、先生はさまざまな方法で直すことになります。

弟子：法輪功が創出される有史以前の背景はどんなものでしょうか？

師：この問題は大きすぎて、高すぎて、われわれのこの次元で知るべきことの範囲を超えていると思いますので、ここで話すわけにはいきません。ただし一つだけ、皆さんが知っておかなければならないのは、これは佛家気功であって、佛教気功ではなく、佛教ではない、ということです。しかし、われわれは佛教と共通した目標があります。修煉の法門が違い、歩む道が違いますが、目標は一致しています。

弟子：法輪功の歴史はどれくらいありますか？

師：わたしが煉っていた功法といま伝えているこのものとは完全に同じではありません。わたしが煉っていた法輪はいま伝えているものより威力がさらに大きく、功の伸びもいまのこれより速いのです。とはいえ、わたしがいま伝えているこの功法でも功の伸びはすでにかなり速く、そのため煉功者への心性の要求も一層高く一層厳しいのです。わたしがいま伝えているものは整理を経た上で公開したのであって、要求はそれほど高くありませんが、一般の功法よりは高いのです。それは元のものとは違っていますので、わたしが創始者だと言っています。法輪功の歴史の長さに関しては、公にして伝えたことがないので数えようがありませんが、わたしは去年（一九九二年）五月に中国の

東北で初めて功を伝えましたから、去年五月から始まったと言ってもよいのです。

弟子：先生は受講しているわたしたちに何を与えてくださいましたか？
師：皆さんに法輪を与えました。修煉用の法輪もあれば、身体を調整する法輪もあり、同時にわたしの法身が皆さんを見守っており、法輪功を煉っている者なら、誰にも付いています。あなたが煉功しなければ法身は当然構ってくれず、行かせようとしても行ってくれません。あなたが何を考えているのか、わたしの法身は手に取るようにはっきり分かっています。

弟子：法輪功は修煉するわたし本人に、正果を得させてくれますか？
師：大法には果てがありません。如来の次元まで修煉して到達したとしても、頂点ではありません。われわれは正法ですので、ひたすら修煉してください！　得るものはみな正果です。

## 二、功理と功法

弟子：「大周天」を終えて帰ったら、空を舞う夢を見る人がおり、非常にはっきり見えたと言いますが、これはどういうことでしょうか？
師：皆さんに教えますが、坐禅あるいは夢の中でこのような状況が現れたとき、それは夢ではなく、元神が身体を離脱したことであって、

夢とは全然違います。元神が身体を離脱したとき、あなたが何を見たのか、どういうふうに舞い上がったのかまで、あなたは非常に確実に見え、鮮明に記憶することになります。

弟子：法輪が変形したらどんな良くない結果になりますか？
師：その人が間違った方向へずれてしまったことを意味します。そうなれば法輪は効力を失い、しかもあなたの修煉にたくさんの面倒なことがもたらされることになります。あたかもこの大通りがあるのに歩まないで、脇道にそれて道に迷い、迷子になってしまったかのように、面倒なことに遭遇します。これらのことは常人の生活状態に反映されてきます。

弟子：一人で煉功する場合、家庭の環境はどう処理すればよいのでしょうか？　家に法輪をいただけるのですか？
師：ここにいる人の多くは、すでに家に法輪があるのを見ていますし、家の人も恩恵を受けはじめています。すでにお話したように、同じ時間、同じ場所に多くの空間が存在しているのであって、あなたの家庭も例外ではなく、処理をしなければなりません。処理の方法としては普通、良くないものを片づけたうえ、覆いをかけるのですが、そうすればどんな良くないものも入れなくなります。

弟子：煉功中に気が病のある部位を襲い、はれて痛むような感じがしますが、どういうことでしょうか？

師：病は一種の黒いエネルギーの塊です。講習会の初めにそれを打ち砕いてあげたら、病のある部位がはれるような感じがしますが、その黒い物質はすでに根っこを失っており、外へ向かって散っているので、すぐに排出されます。そうすれば病も存在しなくなります。

弟子：もともとあった病気は講習会を数日受講すると消えましたが、しかししばらく経ったらまた突然現れてきました。これはどういうことでしょうか？
師：この功では次元の飛躍が非常に速く、一つの次元はあっという間に通過しますので、あなたがまだ気づいていないのに、実際には病気がすでに治っています。その後の症状は、わたしのお話しした「劫難」がやってきたのです。気をつけて観察すれば分かりますが、もとの病状とは違います。他の気功師に調整を頼んでも、彼らもそれを動かせません。それは功が伸びるときの業力の反映なのです。

弟子：煉功してもまだ薬を服用する必要がありますか？
師：これはあなた自身で悟ってください。煉功しながら薬を服用するということは、煉功で病気が治るのを信じていないということです。信じているのならどうしてまだ薬を服用するのですか？　ところが、あなたは心性の基準に従って自分を律していないのに、問題が起きれば李洪志が薬を服用させてくれないと言うかもしれません。しかし、李洪志が心性を厳しく律するようにと言っているのに、あなたはそうしましたか？　本当に大法を修煉する人の場合、身体に持つのはみな

常人のものではないので、常人の病気はあなたの身体に上ることが許されません。あなたの心がしっかりしていて、煉功で病気が治ると信じて、薬をやめて、気にせず、治療にも行かなければ、治してくれる人が現れます。皆さんがここで日一日と元気になって、日一日と気分が良くなっているのは、なぜでしょうか？　多くの人の身体にわたしの法身がせわしく出入りしているのは、ほかでもなくあなたのためにそういうことをやっているのです。もし自分の心がしっかりしておらず、煉功していながら、信じないあるいは試してみようなどという態度をとっているなら、あなたは何も得られません。あなたが佛を信じるかどうかは、あなたの悟性や根基が決めるものです。もし佛が顕現してきて、ここからでも肉眼ではっきり見えるなら、人々はみな佛道に入りますので、考え方を変えるというような問題は存在しなくなります。まず信じることが先で、そうしてこそはじめて見えるのです。

弟子：師あるいは師の弟子に病気治療をお願いしたい人がいますが、お願いできるでしょうか？
師：わたしが世間に現れた目的は、病気治療のためではありません。病気になるべくしてなっている人がいます。わたしの言っていることは一部の人にはどうしても分かりませんが、わたしはそれ以上解釈をしません。佛家功法は、普く衆生を済度するためですから、他人の病気を治してもいいのです。われわれが病気治療を行うときは、組織的に行うのであって、宣伝を兼ねています。わたしは現れたばかりで、知名度が低く、人に知られていないため、功を伝えるときに聞きに来

る人がいないかもしれません。治療相談サービスを通して、みんなに見てもらい、実際に良い効果を上げていますので、それが宣伝になっていますが、専門的に病気治療をやっているわけではありません。高い功能で専門的に病気治療を行うことは許されません。超世間法をもって世間法に代えるのはいけないことで、そういう状態ではないので、治療効果も時々良くありません。煉功者に責任を持つためには、あなたの身体を無病状態にまで調整してあげなければなりません。そうしてはじめて高い次元に向かって修煉することができます。もしあなたが自分の病気のことばかり気になって、全然煉功するつもりがなければ、たとえ口に出して言わなくても、あなたの考えていることをわたしの法身は何もかも知っているので、最終的にあなたは何も得ることができません。われわれは講習会ですでに皆さんのために身体を調整してあげました。もちろんそれはあなたがまず煉功者でなければならないのですが。別途で皆さんのために治療を行い、しかもお金をとるようなことは、われわれはしません。もしあなたの病気が治らなければ、それは悟性の問題です。もちろん個別には病気が非常に重い人もいます。身体にはっきりとは現れていなくても、実際にはとてつもなく重いのです。一回で調整しきれないかもしれませんが、われわれは力を尽くしました。あなたに対して責任を負わないのではなく、あまりにも病気が重すぎるのです。あなたが帰ってからも煉功すれば、病気が治るまでずっと治してあげます。このような状況は少数の部類に入ります。

弟子：煉功の時、どうすれば入静できますか？　煉功の時仕事上の難問題を考えるのは、執着と言えるのでしょうか？

師：利益に関することに無頓着でいれば、平素から静かで清らかな心を保てます。心の準備があれば、劫難がいつ来ても、どんなものであっても、劫難とはなりません。往々にして突然やってくるのですが、覚悟を決めていれば間違いなく乗り越えられます。そうしてはじめてあなたの心性の高さが量られます。執着心が取り除かれ、心性が高まり、人との争いや怨恨などがみな放下できて、心が穏やかになって、はじめて定力のことが語れます。もしそれでも入静できなければ、自分を他者とし、いま考えているのは自分ではないと思うのです。海がひっくり返っているほど雑念が湧いてきても、あなたはそこから脱けだして、好きなようにさせておけばいいのです。佛の名前を唱えるとか、数を数えるとか言う人がいますが、これらはみな煉功の数々の手段です。われわれが煉功するとき「意守」を求めませんが、しかしあなたは自分が煉功しているのだということを分かっていなければなりません。仕事上の難問題などは、個人の利益に入らないので、執着心ではなく、良いことです。わたしはある僧侶を知っていますが、彼は修煉のこういうことをよく分かっています。彼は寺で住職をやっていて、けっこう忙しいのですが、坐禅を始めたら仕事を切り離して、絶対考えません。これも功です。いざ本当に煉功するときには、何も考えず、何の雑念もありません。仕事のことは個人のものを混ぜ入れなければ、きっとうまくできると思います。

弟子：煉功の時、頭に良くない考えが浮かんだらどうしますか？
師：煉功の時に、時々あれこれ良くないものが現れてくることがあります。皆さんが煉功を始めたばかりで、一足飛びで非常に高い境地まで達するのは不可能ですので、今の段階であなたに高すぎる要求もしません。頭の中に悪い考えが全く浮かばないよう求めても、非現実的です。初めは徐々に進んでもかまいませんが、自分を放任してはなりません。時間が経ち、思想が昇華すれば、自分に対してもっと高いことを要求しなければなりません。なぜならあなたはもう大法を修煉しており、この講習会から帰ると、あなたはもう常人ではないからです。身体に非常に特殊なものを持っているのですから、自分の心性を厳しく律しなければなりません。

弟子：煉功の時、頭と下腹部が回っているように感じられ、胸が苦しいのですが。
師：これは初期段階で法輪が回っているためであって、今後このような症状が出てくるとは思いません。

弟子：煉功の時、小さい動物を引き寄せますが、どうすればよいでしょうか？
師：どんな功を煉っても小さい動物を引き寄せることがありますが、気に掛けなければすむことです。良いエネルギーの場では、特に佛家功においては、功の中に普く衆生を済度する要素があります。われわれ法輪功が時計回りをするときに自分を済度しますが、逆時計

回りをするときは普く衆生を済度することになります。こうして循環を繰り返しますので、われわれのまわりの万物がみな恩恵を受けます。

弟子：貫通両極法では、手の上げ下げを一回と数えますか？　佛展千手法の時、手を伸ばす前に自分が非常に高大だとイメージした方がよいのでしょうか？
師：両手を一回ずつで一回とします。佛展千手法を行う時、自分のことを考えなくても、高大だと感じます。「天上天下（てんじょうてんげ）、唯我独尊（ゆいがどくそん）」という意念を持って、そこに立っていればけっこうです。常に意念で追求しないように。それは執着にほかなりません。

弟子：煉功して坐禅をする時、足が組めなければどうしますか？
師：組めなければ、椅子の端に坐って煉ればよく、同じ効果を得ることができます。しかしあなたが煉功者であるかぎり、両脚を煉らなければならず、組めるようにしなければなりません。椅子の端に坐り、徐々に脚を煉って、最終的には組めるようにならなければなりません。

弟子：もし家族の人が良くないことをして、「真・善・忍」に背けばどうすればよいのでしょうか？
師：家族の方が法輪功を修煉しているわけではないので、このことは問題になりません。要は自分を修煉することです。自分で修煉すればけっこうです。あまり複雑に考えずに、しかも少し融通が利くようにした方がよく、自分自身の修煉に勤めてください。

弟子：日常生活で時々間違ったことをした後、非常に後悔しますが、しかし同じ間違いをまた犯してしまいます。これは心性が低すぎるためでしょうか？
師：これを書けたこと自体、あなたの心性がすでに高まって、それに気づいたことを物語ります。常人は間違いを犯しても気づかないのですから、あなたがすでに常人を上回っていることを物語っています。一回目間違いを犯して、心性を守られなくても、物事には過程がありますので、次回また問題に出会ったときに、さらに向上するようにすればよいのです。

弟子：四、五十歳の人でも、「三花聚頂」に達することができますか？
師：われわれは性命双修の功法なので、年齢のことは問いません。一心に修煉して、わたしの言う心性で自分を律しさえできれば、煉功すればするほど寿命が延びる現象が現れます。そうすればあなたは煉功時間が足りるようになるのではありませんか？　しかし一つだけ、とりわけ性命双修の功法では、あなたの生命が延長されたとき、もし心性に問題が起きれば、すぐに生命の危険が現れてきます。煉功のために延長された生命ですから、心性が間違った方向へ行くと、すぐに生命の危険が起きます。

弟子：「柔の中に剛あり」の力具合を如何に心得たらいいのでしょうか？

師：これは自分で探るしかありません。たとえば、われわれが「大手印」を結ぶとき、見た目では手が非常に柔らかいように見えますが、実際にやるときはかなり力が入っています。この前腕と手首、指と指との間の力はかなりのものです。しかし見た目には非常に柔らかいのです。実際のところすごい力が入っています。「柔の中に剛あり」とはこのことです。こういうものは皆さんのために手印を結ぶとき、すでに皆さんに与えました。皆さんは煉功の中でゆっくり体感してください。

弟子：男女の間のことはあってもなくてもよいことでしょうか？　若い人は離婚しなければならないのでしょうか？
師：色欲のことについてはすでに述べましたように、皆さんのいまの次元では、僧侶や尼僧になれとは言っていません。皆さん自身がなろうとしているだけです。肝心なのはその心を放下することです！　放下できない心を全部放下してください。常人にとってはこういうのは一種の欲望ですが、われわれの場合は放下できて、淡々としていられなければなりません。こればかり追求している人がいて、溺れてしまって、常人としても度を超しています。煉功者としては言うまでもなくそうしてはいけません。あなたが煉功しても、配偶者が煉功していないので、正常な生活を過ごすのは現段階では許されることです。高い次元に達すれば、どうすべきか自分で分かるようになります。

弟子：坐禅するときに眠ってはいけませんか？　どうすればよいでしょうか？　三分間も気を失ってしまう時がありますが、どういうことな

のか分かりません。

師：眠ってはいけません。煉功しているのにどうして眠っていいのですか？　坐禅中に眠るのも魔の一つです。あなたの言う気を失うというのはあり得ないことです。質問をはっきり書けなかったのではありませんか？　三分間意識を失うのは大したことではなく、定力の高い人にはよく無意識状態がありますが、ずっとこのままではいけません。

弟子：修煉して正果を得ようとする決意のある人はみな正果を得られるのですか？　根基がちょっと劣った場合はどうしますか？

師：あなたにその決意があるかどうかにかかっており、その決意がどれほど大きいかが肝心です。根基が少し劣っている人でも、あなたの決意と悟性次第です。

弟子：風邪を引いて熱を出しているときでも煉功できますか？

師：皆さんが講習会から帰ったら病気は全てなくなっていると言いましたが、あなたは信じていないのかもしれません。わたしの弟子も時に風邪を引いて熱を出しているかのようになることがありますが、それは関門や難に遭遇したのであり、次元を高めるべきことの現れです。彼ら自身みんなよく分かっていますので、気にしなければすぐ通過するのです。

弟子：妊娠中の女性は法輪功を煉ることができますか？

師：構いません。法輪は別の空間に植え付けており、われわれの功

法には激しい運動がないので、妊婦に悪い影響はなく、かえって身体に良いのです。

弟子：先生がわれわれから離れたら、空間的な距離がありますか？
師：多くの人が、「先生が北京にいらっしゃらなくなったら、われわれはどうしたらいいだろうか？」と、思っています。あなたが他の功法を煉っても同じですが、先生といえども毎日そばにいてあげるわけにはいきません。法を、わたしは皆さんに教えました。理を、皆さんに教えました。この功法も、皆さんに教えました。完全に整ったものを全部皆さんに与えました。後はあなたがどう修めるかにかかっています。わたしのそばにいれば安心で、いなければ不安だということはありません。佛教徒の例を挙げましょう。釈迦牟尼がこの世にいなくなって二千年以上になりますが、彼らはそれを継承して、一心不乱に煉っているではありませんか？　ですから煉るかどうかは自分の問題なのです。

弟子：法輪功を煉れば、辟穀（へきこく）することがありますか？
師：ありません。というのは、辟穀は佛道がいまだ存在しなかったときに存在していた大道修煉であり、宗教になる前からあったもので、普通このような方法は単独修煉の部類に入るからです。当時寺院制度がなかったので、山の中腹でやるしかありませんでしたが、食べ物を提供してくれる人がいませんでした。修煉の時は閉じこもる必要があって、半年一年じっとしていなければなりませんので、このような

方法を採りました。われわれの今日の修煉では、そのようにする必要はありません。あれは特定の環境のもとで採られた方法であって、功能などではありません。これを教える人がいますが、わたしに言わせれば、世界中の人が食事をとらなくなったら、これは常人社会を破壊したことになるのではありませんか？　そうなってはならず、そういうことではないのです。

弟子：この五式の功法でもってどの次元まで修煉することができますか？

師：この五式の功法はあなたがとてつもなく高い次元まで修煉するのに十分間に合います。もちろんどの次元まで修煉したいのか、その時になれば自分で分かるようになります。功には終わりがないので、あなたが本当にそのレベルに達したら、それ相応の縁があって、さらに高い次元の大法を得ることができます。

弟子：法が人を煉るといいますが、法輪が常に回っているなら煉功しなくても良いということになりませんか？

師：煉功と寺院での修煉方法は違います。実際のところ、寺院では心の中で修行するといっても、やはり坐禅は必要で、あの功夫は煉らなければならないものです。功を伸ばすだけでいいからといって何も煉る必要がないというわけではありません。頭上に功があるだけでは、まだ煉功者とは言えないでしょう？　どの功法にも伝承されてきたものがあるので、それを煉らなければならないのです。

弟子：他の功法をやっている人が言うには、意念のない功は功法ではないと言いますが、正しいでしょうか？
師：さまざまな説があまりにも多いのですが、わたしのようなやり方で大法を皆さんに伝えた人はいません。佛家では、有為の法はあまり高くならないと言いますが、有為の法とは別に動作を指しているわけではありません。坐禅、結印も動作ですので、問題は動作の大きさにあるのではありません。有為か無為かはあなたの意念にあり、追求にあります。意念があり、追求があれば、執着にほかならず、有為にほかなりません。そういう意味です。

弟子：心性すなわち徳ではありません。徳の多さは次元を決めるとおっしゃりながら、心性の高さが功の高さともおっしゃいますが、両者は矛盾しませんか？
師：あなたははっきり聞き取れていないのかもしれません。心性の内容は非常に幅が広く、徳はその中の一部です。ほかには「忍」も、苦に耐える力も、悟性も、トラブルにどう対処するかも含まれており、これらすべてが心性の問題に入ります。中には功の演化、徳の演化も含まれており、非常に広義なものです。徳の多さは、功の高さを示しているわけではなく、将来功をどれだけ伸ばせるかを意味しています。徳は錬磨を通して心性を高めてから、はじめて功に転化されます。

弟子：家族同士で違う功を練っている場合、互いに邪魔することに

なりませんか？

師：なりません。しかし、他の功法同士で邪魔し合うことになるかどうかについてはわたしは知りません。われわれの法輪功は誰にも妨げられることがありません。それどころかあなたが彼らに良い影響を与えます。なぜならわれわれは正法修煉ですので、間違った方向へずれてしまうことがないからです。

弟子：現在、社会ではいろいろな言い方が飛び交っています。たとえば金の鎖とか何とかありますが、どう対処すればよいのでしょうか？

師：皆さんに言いますが、それは純粋に人を騙すものであり、そういうものに返事をしないでください。全くばかげていることで、無視すればよいのです。そういうものは正しいかどうか一目で分かります。われわれのこの法では心性の修煉を厳しく求めていますが、一部の気功師のことをわたしは気功商人と呼んでいます。気功を商品として、金に換える資本としていますので、このような人が功を教えても大したものは教えられません。何かを持っていても高いはずがありません。中には邪なものもあります。

弟子：法輪功の学習者が寺院で帰依（きえ）している場合はどうしますか？やめるべきですか？

師：それはわれわれとあまり関係がありません。帰依したと言ってもそれは形式上のものです。

弟子：われわれ数人は、習って以来、頭が張り、目眩（めまい）がするのですが。
師：これは新しく入ってきた学習者で、身体の調整がまだ済んでいないためかもしれません。わたしが打ち放ったエネルギーは非常に強いので、病の気が外へ出るとき、頭が張るように感じることがあります。頭が張るというのはあなたの頭にある病を取り除いてあげているからで、良いことです。しかしあまりにも激しく取り除いていると、反応も激しいのです。われわれが七日間で講習会を行うと、耐えられない人が出てきますが、それ以上に時間を縮めると、恐らく問題が起きます。打ち放ったエネルギーが強いので、反応も非常に激しく、我慢できないほど頭が張ってきます。ですから講習会は十日間にした方が無難かもしれません。あとから入ってきた人の場合は反応が激しいことがあります。

弟子：煉功者はタバコを吸い、酒を飲むことができますか？　仕事の関係で酒を飲まなければならない場合はどうしますか？
師：この問題についてわたしはこう思います。われわれ佛家功では、酒はやめなければなりません。しばらく飲まないとあなたは飲みたくなるかもしれません。少しずつやめていっても良いのです。しかしあまり時間がかかりすぎないように。あまり時間がかかりすぎると懲罰を受けることがあります！　タバコを吸うことについては、わたしは意志の問題だと思います。やめようと思えばやめられます。常人はよく「今日からタバコをやめる」と心に思いながら、数日も経たないうちに続けられなくなります。しばらくしてからまた思い出し、またやめようと

します。このようにいつまで経ってもやめられません。常人は世間に身を置いているので、世間の人と人との間ではこのようなつきあいは避けられません。しかし、あなたは自分がもはや常人ではなく、修煉を始めているのだと自覚しなければなりません。意志があれば、目的は達成できるものです。もちろん、わたしの弟子のなかにはタバコを吸う人もおり、自分ではやめられますが、人から勧められると、面子にこだわって、また吸いたくなります。二日間吸わないと我慢できなくなりますが、吸い出すとそれもまた辛いのです。必ず自分で制御しなければなりません！　つきあいで、しょっちゅうお客さんと酒を飲まなければならない人もいますが、これは難しい問題です。できるだけあまり飲まないようにしてみてください。あるいは自分で何とかして解決してください！

弟子：まだ法輪が回転しているのが見えない間は、もし時計回りの意念を与えると、ちょうど逆時計回りをしている法輪に影響を与えることになるのでしょうか？

師：法輪は自動的に回転しているので、あなたが意念で導く必要はありません。もう一度強調しておきますが、意念を用いないようにしてください。意念を用いてもそれを制御することはできません。意念で制御するとそれを逆方向へ回転させることができると思わないでください。下腹部にある法輪は、意念の制御を受けないものです。体外で身体を調整してくれる法輪は、あなたが回転させようと思えば、あなたの思惟活動を受け止めて、そういう感覚をあなたに与えるかもし

れません。皆さんに言っておきますが、そうしないでください。人為的に煉ってはいけません。人為的に煉ると、人が功を煉ることになってしまうのではありませんか。法輪が煉っているのであって、法が人を煉っているのです。なぜいつまで経っても意念というものを放棄できないのでしょうか？　如何なる功法も高い次元に達すると、たとえ道家の功法といえども、意念で導くことはありません。

弟子：法輪功を煉るにはどんな時間、場所、方位がいちばん効果があるのでしょうか？　何回煉ればよいのでしょうか？　食前と食後に煉ってもよいのでしょうか？

師：法輪は丸い形をしており、われわれのこの宇宙の縮図なので、われわれが煉っているのは宇宙の理です。そのうえ宇宙は運動しているため、逆に言えば、法が人を煉ると言えます。あなたが煉功していなくても、それがあなたを煉っているのです。いままで伝えられてきたすべての功法の理論と異なり、これは唯一、法が人を煉るものです。その他の功法は例外なく丹道を歩み、人為的に煉功したり、丹を蓄えたりしますが、われわれはそこまでする必要がありません。われわれのこの功はいつ煉ってもよく、あなたが煉功していなくても功があなたを煉るので、時間を選ぶ必要がありません。時間があればたくさん煉るし、あまり時間がなければ少なめにすれば良いのです。われわれのこの功法は要求がそれほど厳しくありません。ただわれわれの心性に対する要求は非常に厳しいものです。われわれの功法は方位も問わないので、どの方位に立っていても構いません。宇宙は回転

しており、変動しているので、あなたが西側に立っていても、必ずしも西とは言えず、東側に立っていても必ずしも東とは言えません。わたしが弟子たちに煉功の時に西に向かって立たせるのは、ただ敬意を表すだけで、実際には別にこれといった作用はありません。煉功はどこでやってもけっこうで、家の中でも外でも構いません。とはいえやはり、場所、環境、空気とも比較的良い、特に汚れ物たとえばゴミ箱とかトイレとかから離れているところを選んだほうがよいと思います。あとは特に気にしません。大法を修煉するのに時間や場所、方向を問いません。食前でも食後でも構いません。しかしあまりお腹いっぱい食べたら、すぐに煉るのも辛いので、しばらく間をおいた方がいいでしょう。またお腹がすいた時も入静しにくいので、皆さんは自分の状況に合わせてやってください。

弟子：煉功し終えてから何か注意事項がありますか？　手で顔を擦る必要がありますか？

師：煉功をし終えてから、別に冷たい水とかに触れてはいけないということはなく、手で顔をぬぐったり、手を洗う必要もありません。それらはいずれも初期の頃に、人体の穴脈（けつみゃく）を開かせるために採られた方法に過ぎません。われわれは大法を修煉しているので、そういうものは一切ありません。今はもはや人体を変えるという状態ではありません。常人から煉功者になるのはとてつもなく難しいことのように見え、そのうえ一部の功法には直接人体を変える方法もないので、そういう功法にはかなり複雑な要求もありますが、われわれには一

切なく、そういう説もありません。わたしが言っていないことは皆さんも気にせずに、ひたすら煉ってください。われわれは大法を修煉しているのですから、あなたの身体が初期の状態にあって、あれこれと恐れ、あるいはあれこれと要求するその過程は数日中に通過してしまいます。これは他の功法の数年間分の煉功に値するとまでは言いませんが、だいたいそれくらいでしょう。低い次元のもの、方位だとか、脈だとかについては、わたしは一切言いません。われわれは高い次元のものを説きます。大法修煉において、本当の煉功は「煉」という字であって、「練」ではありません。

弟子：煉功の後、すぐに大小便してもよいのですか？　小便のなかに泡が目立ちますが、気を漏らしたことになりませんか？
師：大丈夫です。われわれ煉功者は高い次元に立っており、大小便のとき確かにエネルギーがいっしょに出ていきますが、しかしそれぐらいのエネルギーは何でもありませんし、何の影響もありません。大法を修煉して、普く衆生も済度しなければならないのですから、これくらいのことは気にしないでください。われわれはもっともっと多くのものを得ています。この講習会で、わたしが打ち放ったエネルギーは非常に強く、壁にも多くのものが残っています。

弟子：法輪功を宣伝してもよろしいでしょうか？　講習を受けたことのない人に法輪功を教えてもよいのでしょうか？　講習を聞いたことのない人でも煉功場で煉功できますか？　録音テープと本を遠くにい

る親戚や友人に郵送してもよろしいでしょうか?

師:われわれの功法を普及させ、より多くの人に恩恵を受けさせても、問題が起こる恐れはありません。皆さんに多くの法を明らかにしたのは、皆さんに法を知ってもらい、高い次元のものを理解してもらい、高い次元のものを見てもらうためです。前もって明らかにしたのは、皆さんが見たあるいは遭遇したときに理解できないようなことがないようにしたいからです。皆さんは他人に煉功を教えることはできますが、しかし法輪を植え付けることはできません。どうすればいいでしょうか? わたしが言ったように、あなたがためらったり疑ったりしてあまり煉功もしなければ、わたしの法身があなたから離れていきます。もしあなたが本当に煉功すれば、法身があなたを見守ります。ですからあなたが人に功を教えるとき、わたしが教えた信息を携えており、法輪を形成させる気機を携えているわけです。あなたが教えた人が本気で煉功すれば、法輪を手に入れることができます。縁があり、根基が良い人は、その場で法輪を得ることができます。われわれの本に詳細にわたって書いてあるので、教える人がいなくても上手に煉ることができます。

弟子:法輪功の煉功では、呼吸は問われますか? 如何に息を調整すればよいのでしょうか?

師:法輪功の煉功では、息を調整する必要もなければ、呼吸も問いません。それは初級レベルの功法で習うものであって、われわれの煉功では必要がありません。なぜなら息を調整するのは、丹を煉り、

風を添え、火を加えるためだからです。逆式呼吸、順式呼吸、津を咽むなどはいずれも丹を煉るためのものであり、われわれはそれをやりません。あなたに必要なことはすべて法輪がやってくれます。さらに高い、さらに難しいものは、師の法身がやってくれます。どんな流派でも、たとえ道家がとりわけ細かいことを説いていても、人為的に煉功することによって成し遂げられるものではありません。実際はその流派の上師が煉ってくれて、演化してくれているのであって、本人にはそのわけが分からないだけです。自分で人為的にやってもできません。悟りを開き、功を開いた人でしかやり遂げられないのです。

弟子：煉功には意守がありますか？　功法の意念はどこにありますか？

師：われわれには意守がありません。一貫して皆さんに意守を教えておらず、皆さんに執着を放棄するよう、意念を求めないようにと言っています。第三式功法で、両手の掌が気を率いて両極を貫通させるとき、ちょっと考えるだけで結構です。その他は考えないようにしてください。

弟子：エネルギーを採りこむのは気を採りこむのと同じですか？

師：気を採りこんでどうするのですか？　われわれが修煉しているのは大法であり、そのうち気を発することができなくなります。われわれの煉っているのは低い次元の気ではなく、放出しているのは光です。エネルギーの採集は、法輪に任せているので、自分でやる必要があ

りません。ところで、貫通両極法では、気を採りこんでいるのではなく、実は身体を貫通させているのですが、エネルギーを採りこむ役割も果たしています。しかしそれが主な目的ではありません。気の採集はどうすればいいのかということですが、大法を修煉しているので、ちょっと手を振れば、頭上に圧力を感じ、あっという間に気が溢れるほど寄ってきます。しかし、気を集めてどうするのですか？　エネルギーもわざわざ採りこむものではありません。

弟子：法輪功には、「百日築基」や「胎息」がありますか？
師：それらはみな低い次元のものであり、われわれは煉りません。われわれはとっくに初級の不安定な時期を通過しています。

弟子：法輪功には陰陽の均衡がありますか？
師：これらはみな気を練る類いのもので、低い次元のものであって、気という次元を抜け出せば、あなたの身体には、陰陽という問題が存在しなくなります。どんな流派の功を煉るにせよ、本当に師の直伝を得ていれば、あなたが低い次元を通過するとき、間違いなく以前煉ったものをすべて捨てて、一つも残さないに違いありません！　新しい次元において、新しいものを煉り、さらにその次元を通過すれば、さらに新しいものを煉ることになるのです。そういうことです。

弟子：雷が鳴るときに煉功していいのでしょうか？　法輪功を煉功するのに音を気にしますか？

師：皆さんに一つ例を挙げましょう。以前わたしが北京のあるところで学習者に教えていたときのことですが、雨が降りそうで、雷がごろごろと鳴っていました。そのとき彼らが煉っていたのはわたしが弟子に伝えた功であって、煉るときは、法輪の上で煉功しなければなりません。雨が降りそうになったのに、彼らはまだ煉功が終わっていませんでした。しかし、雨は全然降ってきません。雲が非常に低く、ビルの上を雲の塊が翻り、雷がごろごろと大きな音を立て、空が真っ暗になりました。雷が法輪の輪に落ちましたが、われわれは傷ひとつありませんでした。雷が地面に落ちたときの様子が非常にはっきり見えましたが、われわれは傷つけられることがありませんでした。これはわれわれのこの功が守られていることを物語っています。普通わたしは、煉功するとき天気のことを気にしません。煉功しようと思うときに煉功し、時間があれば煉功し、音なども気にしません。他の功はみな音を気にします。静まり返ったときに突然大きな音が聞こえてくると、まるで体中の気が爆発して光を発しながら体外へほとばしるかのような感覚を覚えることがあるからです。しかし大丈夫です。われわれの功にはそういった間違いが起きません。もっともできるだけ静かなところで煉功するに越したことはありません。

弟子：先生のお姿を観想したほうがいいのでしょうか？
師：観想する必要はありません。あなたの天目が開いたら、わたしの法身がすぐ側にいるのが見えます。

弟子：五式の功法を煉功するとき何か注意することはありますか？　連続して煉らなければなりませんか？　九回繰り返す動作は、心の中で数を数えてもいいのですか？　九回を超えたり、あるいは動作を間違えたりしたら逆の作用が起きますか？
師：五式の功法はどれを煉っても構いませんが、できれば煉功を始める前に、第一式の功法を煉ったほうがいいと思います。それによって身体全体が伸びやかになるからです。まずそれを一回やって、身体が十分に伸びやかになってから、他の功法を煉った方が効果が良くなります。時間があればたくさん煉り、なければ少なめにしてもよく、あるいはその中の一式を選んで煉ってもけっこうです。第三、四式功法では、それぞれ九回やることになっており、本には心の中で数を数えるようにと書いてありますが、帰ってから試してみてください。お子さんに側に立って数えてもらい、やってみてください。九回し終えたら、気機を探そうと思っても見つかりません。これはこのようになっているのです。初めは頭で考えなければなりませんが、慣れたら自ずとそこで止まることになります。覚え間違ったり、あるいは回数をオーバーしたり足りなかったりしたら、直せばいいのです。

弟子：どうして終わるときに、功を収めることをしないのですか？
師：法輪は自動的に回転しており、あなたが煉功を終えたのが瞬間的に分かります。それのエネルギーは非常に大きいので、一瞬のうちに放出したものを回収してしまいます。あなたがいくら人為的にやってもそれには及びません。ただこれも功を収めるのではなく、エネル

ギーを呼び戻しているだけです。他の功法では、一瞬のうちに止まってしまいます。この功法では、ずっと煉っており、止まってからも煉っていますので、功を収めることによって止めるということはできないのです。法輪を止めようと思っても、あなたにはできません。あまり深遠なことを言っても理解してもらえませんが、あなたがもしそれを止めることができれば、わたしのところのも止まらなければならないことになってしまいます。あなたにはわたしのところのを止めることができますか？

弟子：結印、合掌は站樁として煉ってもよいのでしょうか？
師：第一式功法 —— 佛展千手法は站樁として煉ってはいけません。力一杯伸ばしすぎると、問題が起きかねません。

弟子：煉功のとき、脇の下を「虚」にしたほうがいいのですか？
第一式功法を煉るとき、脇の下がきつく感じるのはなぜでしょうか？
師：あなたに病気があるのではありませんか？　初期状態において、あなたの身体を変えるときに、あれこれの現象が現れ、少し症状があるかもしれませんが、それは功がもたらすものではありません。

弟子：李先生の講義を聞いたことのない人でも、公園で他の学習者と一緒に煉功できますか？
師：できます。学習者は誰でも他人に煉功を教えることができます。学習者が他の人に煉功を教えるのは、わたしが教えるのとは違いま

す。わたしは皆さんのために直接身体を変えてあげるのです。しかし煉功するとすぐ法輪を持つようになる人もいます。学習者の背後にみなわたしの法身がいて、それが直接処理してくれているからです。これは縁によります。縁の強い人は、その場で法輪を得ることができますが、縁の強くない人は、長期の煉功を通して、自分で徐々にこのような玄機(げんき)を形成していきます。そのうえでさらに煉功して玄機を法輪にしていきます。

弟子：静功「神通加持法」の手印動作の意味は何でしょうか？
師：これはわれわれの言語では解釈できません。ひとつひとつの動作に含まれている意味はたくさんありますが、要するに、わたしは煉功しようとしており、佛法を煉ろうとしており、身体を調整して、煉功状態に入ろうとしている、ということです。

弟子：煉功して乳白体に達すれば、毛孔までも開き、身体呼吸になるのですか？
師：皆さん体感してみてください。皆さんはすでにこの次元を通過しています。わたしが皆さんの身体を乳白体に調整してあげるのに、十時間以上法を説かなければなりません。これ以上短縮するのは無理です。皆さんは他の功法では十数年あるいはもっと長い時間煉らなければならないのですが、われわれはここで一気に皆さんをそのレベルまで持っていきます。そのレベルでは心性の要求がなく、師の能力によって行われるので、あなたがまだ気づかないうちに、この次元

はすでに通過してしまいました。場合によっては数時間しかかかりません。ある日、あなたは非常に敏感になったと感じるでしょうが、しばらくすると、また敏感ではなくなります。実は、それは大きな次元を通過したことにほかなりません。ところが他の功法ではあなたは一年あるいは数年間もこのような状態を保たなければなりません。しかし、実のところこれらはみな低い次元のものです。

弟子：バスの中であるいは列に並んでいるとき、法輪功の各動作を想像してもいいですか？

師：われわれの功は意念を用いるものではなく、毎日必ずどれくらいの時間煉功しなければならないというものでもありません。もちろん煉功の時間が長ければ長いほどいいのです。あなたが煉功していないときは、逆にそれがあなたを煉ってくれます。しかし煉功の初期段階では、それを強化させるために、やはりたくさん煉ったほうがよいのです。一、二カ月出張していて、その間仕事に追われて、煉功できませんでしたが、帰ってきてみると全然影響を受けておらず、法輪が相変わらず回っている、という人もいます。それは絶えず回転しているからです。頭の中で自分が煉功者だということを忘れずに、心性をしっかり守っていれば、それが作用します。ただ一つ、あなたが煉功もしないうえ、自分を常人と混同するようなことがあれば、それが消えてしまいます。

弟子：法輪功は密教と一緒に煉ってもいいのでしょうか？

師：密教も法輪ですが、われわれの功と一緒に煉ってはいけません。もしあなたが密教を煉って法輪をすでに形成していれば、密教を煉ればよいのです。密教も正法ですから。しかし同時に煉ってはいけません。密教の法輪は中脈を修めるもので、水平に回転します。その法輪はわれわれのと違い、呪文があります。われわれの法輪は下腹部に立っており、平面が外に向かっています。下腹部は決まった大きさしかなく、わたしの法輪ひとつで一杯になりますので、もう一つ入れるとごちゃ混ぜになります。

弟子：法輪功を煉ると同時に他の佛家功法を煉ってもいいですか？　観音の録音テープは聞いてもいいですか？　在家の居士が功を学んでから、お経を読んでもいいですか？　同時に他の功法を煉ってもいいですか？

師：わたしはしてはいけないと思います。どの法門もひとつの修煉方法であって、病気治療や健康増進のためではなく、本当に修煉しようとすれば、一つに専念しなければなりません。これは厳粛な問題です。高い次元を目指して修煉するには、一つに専念して修煉しなければなりません。これは絶対の真理です。佛家の中の異なる法門も混ぜてはいけないものです。われわれが説いているこの功法は高い次元のもので、悠久な年代を経て伝わってきたものですので、自分の感覚に頼ってはいけないのです。他の空間からその演化の過程を見れば、きわめて玄妙で、きわめて複雑なものなのです。あたかも精密機器が、一つの部品でも他のものに取り替えられたらすぐ壊れ

てしまうように。功法も同じで、如何なるものを混ぜてもいけません。混ぜれば間違いなく問題が起きます。各門派の功法はいずれも同じですが、煉ろうとすれば一つに専念しなければなりません。一つに専念しなければ、どうにも修煉はできません。それぞれの流派の長所を取り入れるというのは、病気治療と健康増進の次元の言い方であって、あなたを高い次元へ導くことはできません。

弟子：他の功法を煉っている人と一緒に煉功すれば、互いに影響し合うことがありますか？

師：相手がどんな功を煉っているにせよ、道家功でも、神功でも、佛家功でも構いませんが、正法であるかぎり、われわれには何ら妨げにならず、あなたも相手にとって妨げになりません。一方、相手はあなたの近くで煉功すればメリットがあります。丹を煉るのと違い、法輪は霊体であって、自動的に助けてくれるからです。

弟子：他の気功師に身体の調整を頼んでもいいですか？　他の気功師の講義を聞いたら影響がありますか？

師：この講習会から帰ると、皆さんは自分の身体がどう変わったのか分かると思います。しばらくすれば皆さんの身体に病気が現れることが許されなくなります。再び病気が現れても、たとえば風邪とか腹痛とかのように見えても、実はそういうのとはもはや違って、それは劫難であり、関門であることになります。あなたが他の気功師に調整を頼むのは、あなたが悟っておらず、わたしの言うことを信じていない

からです。求めようとする考えを持っていれば、あなたの修煉を妨害する良くない信息を招いてしまうことになります。その気功師の功が憑き物の功であれば、あなたはそれを招いてしまいかねません。講義を聞くのも同じで、聞きたいと思うのは求めることではありませんか？　この問題はあなた自身で悟ってください。これは心性の問題ですので、わたしは口出ししません。もしその人が非常に高い法を講義し、心性のことを説いていればそれでも構いません。わたしの講習会に参加してから、あなたの身体はやっとのことで調整してあげることができました。もともとあなたの身体には練功の信息がかなり乱雑に入り乱れていましたが、調整を経て、悪いものが取り除かれ、良いものだけが残りました。もちろんわたしは他の功法を学ぶことに反対しませんが、乱雑に学んではいけないと思います。あなたはすでに大法を修煉し始めており、法身があなたのすぐ側におり、高いものを得たにもかかわらず、引き返して探そうとしています！

弟子：法輪功を煉る一方、他の功法を学んでもよいのでしょうか？たとえば按摩（あんま）、護身功（ごしんこう）、一指禅（いっしぜん）、太極拳など、その功は練らないのですが、その方面の本を読んでもよいのでしょうか？

師：按摩、護身は学んでもよいのですが、闘う心を起こしたとき、ときどき違和感を覚えることがあります。一指禅、太極拳は気功の類いで、煉れば中に加えてしまう可能性がありますので、わたしのものがあなたの身体において純粋でなくなります。本を読むことですが、心性を説くものならまだ構いません。しかし一部の本の著者は自分で

もよく分からないのに、結論を下しているので、あなたの頭はそれによってかき乱されかねません。

弟子:「頭前抱輪」では、手が触れ合う時がありますが、大丈夫でしょうか?

師:触れ合わないようにしてください。われわれは離れるように要求していますが、触れ合うと、手のエネルギーは戻ってしまうことがあります。

弟子:第二式功法を煉るとき、腕が持ちこたえられなくなったら、しばらく下ろしてまた煉ってもいいのですか?

師:煉功は辛いものです。疲れたらすぐ下ろしたりすると、何の意味もありません。時間は長ければ長いほどいいのですが、自分の力に合わせて行ってください。

弟子:結跏趺坐のとき、どうして女性の場合、左足が下にあり、右足が上にあるのですか?

師:われわれの煉功には、女性の身体と男性の身体は違う、という一つの基点があります。ですから女性の本体で自分自身を煉るには、女性の生理に合わせてはじめて効果があります。女性は通常左足が右足を支えているので、自分自身の状態に合います。男性はその反対であり、基点が違います。

弟子：録音テープあるいは音楽を聞きながら、あるいは口訣(くけつ)を念じながら煉功していいのですか？

師：もし良い佛家音楽があれば聞いてもいいのですが、本当に煉功するには何の音楽も要りません。定力が求められるからです。録音を聞くのは、その一念で万念を追い払うためです。

弟子：「貫通両極法」では、力を抜いたほうがいいのですか、それとも力を入れたほうがいいのですか？

師：「貫通両極法」では、自然に立ち、力を抜くよう求められています。第一式功法の要求とは違い、その他の功法はいずれも力を抜くよう求められています。

## 三、心性を修煉する

弟子：わたしは「真・善・忍」に従おうとしたのですが、昨夜夢の中で人と喧嘩しました。すごい喧嘩でした。「忍」をしようとしましたが、「忍」ができませんでした。これはわたしの心性の向上を促しているのですか？

師：もちろんそうです。夢はどういうことなのかについて、わたしはすでにお話ししましたので、皆さんは自分で悟ってください。心性を高める出来事は突然やって来るのであって、あなたがそれを迎えるための心の用意をしてからやってくるものではありません。ある人が良い

か悪いかを見るのは、心の用意ができていないときにこそ分かるのです。

弟子：法輪功の「真・善・忍」の中の「忍」についてですが、如何なる出来事に対しても、正しいかどうかを問わず、「忍」をしなければならないのですか？

師：わたしが言っている「忍」は、あなたの個人の利益にかかわる問題において、あなたが執着して放下できないものにおいて、あなたの心性を高めることを指しています。実際に「忍」は決して悪いことではなく、たとえ常人にとっても悪くありません。昔の話を一つしましょう。大将軍韓信は小さいときから武術をたしなんでいましたが、当時武術をやる人間は好んで剣をさげていました。韓信が街を歩いていると、ならず者がやってきて、「お前はなぜそれをさげているのか？　人を殺すだけの勇気があるのか？　殺せるものならまずこの俺を殺せ。殺す勇気がなければ、俺の股下をくぐって行け！」と、そう言いながら、首を突き出してきました。すると韓信は本当にくぐっていきました。彼の「忍」は並大抵のものではありません。「忍」を軟弱でいじめられやすいものと見る人もいますが、本当のところ「忍」ができる人の意志はとてつもなく堅いのです。ある出来事が正しいかどうかは、それが本当に宇宙の理に合致しているかどうかによります。ある出来事はあなたのせいではなく、他人があなたを怒らせたものだと、あなたは思うのですが、実際、あなたにはなぜそうなのかが分からないのかもしれません。あなたは「知っているとも、つまらないことがきっか

けだった」と言うかもしれませんが、わたしが言っているのは別の理であって、われわれのこの物質空間で見えるものではありません。冗談ですが、もしかするとあなたが前世人に借りがあったせいかもしれません。あなたにどうしてそれが正しいか間違っているのか判断できるのですか？　われわれはだからこそ「忍」をしなければなりません。まず人を怒らせておいてそれから「忍」をする理屈がどこにあるのですか？　本当にあなたを怒らせた人に対しては、あなたは「忍」ができなければならないばかりか、その人に感謝しなければなりません。その人があなたを罵り、先生の前であなたの告げ口をしたとしても、あなたは後で心の中で、ありがとう、と言わなければなりません。「それでは『阿Q』になってしまうではないか」と言うかもしれませんが、それはあなたの考え方です。その出来事において、もしあなたが相手と異なる見方ができれば、あなたの心性はそれこそ高まったことになります。この物質空間においては相手が得をしたのですが、あちらでは相手があなたに何かを与えてくれたのではありませんか？　あなたの心性が高まれば、黒い物質が転化されることになり、一石三鳥なのに、どうして相手に感謝しない理由がありましょうか？　常人の角度からは理解し難いのです。わたしは一般の人に向かって言っているわけではなく、煉功者に聞かせているのです。

弟子：憑き物に憑かれていない人は、心性を高めれば憑き物を防ぐことができますが、憑き物に憑かれている人の場合はどうすればよいのでしょうか？　どうすれば憑き物から逃れることができますか？

師：一正が百邪を圧します。あなたは今日この法を得たので、これからたとえ憑き物があなたにおいしいことをもたらしてくれても、あなたはそれを欲しがらなくなります。それがあなたに金銭や名、利をもたらしてくれたとき、あなたはうきうきして、「ほら見てごらん、わたし、すごいでしょう」と、人の前で見せびらかしたりします。一方、辛い目に遭わされたときにはやめようと思って、先生に頼んで治してもらおうとします。ならばそれがあなたにおいしいことをもたらしてくれたときにどうして受け入れたのでしょうか？　そんな人の面倒を見てあげるわけにはいきません。あなたはメリットを受け入れたのですから。メリットばかり得ようと考えるなんて、いけません。あなた自身、心から求めず、メリットを与えられても欲しがらず、先生の言う方法に従ってひたすら修煉すべきです。正々堂々として、心がしっかりすれば、憑き物が恐れることになります。メリットを与えられても受け取ろうとしなければ、それは去っていかざるを得ません。それでも去らなければ悪事を働くことになりますので、その時になれば、わたしがそれを退治することができるようになります。手を一振りすれば跡形もなく消えてしまいます。ただしあなたがメリットを受け取ろうとすればそうはいきません。

弟子：公園で煉功したら、憑き物に憑かれることがありますか？
師：皆さんに何度も言いましたが、われわれは正法修煉なので、心が正しければ百邪を圧します！　正法修煉で、心が非常に純正なので、何ものも上ってくることはありません。法輪はすごいものですから、

良くないものが上って来られないばかりか、目の前に来ただけで恐れるのです。信じなければよそへ煉功に行ってみてください。みんなあなたを恐れるのです。数を言えば皆さん怖くなるでしょうが、多くの人が憑き物に憑かれているのです。あなたが病気治療と健康増進の目的を達してからもさらに練り続けているのは、何を得ようとしているのですか？　心が正しくなければこういう問題を起こしてしまいます。とはいえ、そういう人を責めているわけではなく、彼らにはこれらの理が分からないからです。わたしが現れた目的のなかにこれも含まれており、皆さんのためにこういった間違ったことを正してあげたいのです。

弟子：将来はどんな功能が現れてくるのでしょうか？
師：わたしは言いたくありません。人それぞれ状況が違うから、言いにくいのです。この次元に何が現れるか、あの次元に何が現れるかについて、肝心なのは、一つ一つの次元におけるあなたの心性です。執着心がこの方面で取り除かれたら、この方面で功能が現れてきます。しかしあなたに現れてくる功能は間違いなく初期のものであって、高くないはずです。心性が非常に高いところに達していなければ、あなたに功能を与えるはずがありません。ところでわれわれの講習会においては、一部の人は根基がかなり良く、すでに「神足通」が現れており、雨の中でも雨に降られることがありません。運搬功能が現れている者もいます。

弟子：心性を修煉して、一切の執着心を取り除くというのは、佛家の

「空」、道家の「無」に達することですか?

師:われわれの言う心性あるいは「徳」は、佛家の「空」、道家の「無」でもって包容できるものではありません。反対に、彼らのものはすべてわれわれの心性の中に含まれています。

弟子：佛は永遠に佛でいられますか?

師：修煉して得道した者が悟りを開けば、大覚者に属し、高次生命にほかなりません。しかしあなたが永遠に悪いことをしない保証はありません。もちろんあの次元では普通あなたは悪いことをしません。真相が見えているからです。しかしもし悪いことをしたら、同じように堕ちていきます。永遠に良いことをすれば、永遠にそこに居続けます。

弟子：大根器の人とはどんな人ですか?

師：これはいくつかの要素によって決まります。(一) その人の根基が非常によい。(二)悟性が非常に高い。(三)忍耐力が非常に強い。(四)執着心が小さく、世間のものに対して無頓着である。これが大根器です。大根器の人は非常に得難いのです。

弟子：大根基のない人が法輪功を煉っても功が出ますか?

師：大根基のない人にも功が現れてきます。なぜなら誰でも徳の成分を持っているからです。徳の成分を少しも持っていないことはあり得ないことで、そういう人はいません。たとえあなたの身体に白い物質が無くても、黒い物質があり、黒い物質が煉功によって白い物質

に転化されますので、手続きが一つよけいにかかるだけに過ぎません。煉功の中であなたは苦しみに耐えて、心性を高め、代価を払ったので、功も得られるわけです。煉るのが先決条件で、それから師の法身がそれを功に転化してくれます。

弟子：人は生まれたときから、その一生が定められています。では、努力によってそれを変えることができますか？
師：当然変えられます。努力するということも段取りされているのですから、努力しなければなりません。あなたは常人ですから。しかし大きなものは変えられません。

弟子：天目が開いていない状況で、どうして受け取った信息の善し悪しを判別できるのですか？
師：あなた自身では判別し難いです。煉功中、あなたの心性を試そうとすることがいっぱいあります。法身はあなたの生命に危険が生じないように守ってくれますが、一部のことについてはたとえ現れても必ずしも面倒を見てくれるとは限りません。自分でそれを乗り越え、自分でそれを解消させ、自分で悟らなければなりません。良くない信息が現れて、今日の金券くじの当選番号を教えてくれたりすることがありますが、それは正しいかもしれませんし、正しくないかもしれません。あるいはあなたにその他のことを教えてくれますが、どうするかはあなた次第です。心が正しければ、邪は侵入できません。あなたが心性をしっかり守っていれば何も問題が起きません。

弟子：気分、情緒が不安定の時に煉功してもよいのでしょうか？

師：気分があまり良くないときは、坐禅をしても入静できず、悪いことばかり考えます。煉功には信息がありますので、頭で良くないものばかり考えると、煉功にそれを持ち込んでしまうことになり、人為的に邪法を練ることになってしまいます。あなたが煉っている功は有名な師が教えてくれたものかもしれず、どこかの上師が教えてくれたものかもしれず、あるいは密教の活き佛が伝えたものかもしれませんが、しかしあなたは彼らの要求した心性に従って厳しく行わなければ、いくら彼らが教えたといっても、彼らの功ではなくなります。皆さん考えてみてください。もしあなたがそこで站樁をくたくたになるほど煉っていながら、頭の中では、「勤め先の誰それはなんであんなにいまいましいのか？　なんでわたしの告げ口をするのか？　どうすれば給料を上げてもらえるのか？　今は物価が上がる一方なので、買いだめしておこう」などと、あれこれ考えるとします。それではあなたが人為的に、あるいは無意識的に、知らないうちに邪法を練っていることになるのではありませんか？　ですから気分が良くないときはなるべく煉らないほうがよいのです。

弟子：「きわめて高い心性」の基準は何ですか？

師：心性は修煉するものですので、基準などなく、あなた自身がどう悟るかにかかっています。もしどうしても基準を示せと言うなら、何かが起きたときに、覚者ならどうするのか、を考えてみることに尽き

ます。模範人物はもちろん非常に素晴らしい人たちですが、それでもやはり常人の模範に過ぎません。

弟子：どの気功師の講演や言葉にも懐疑的な態度を抱いてはいけませんが、人を騙し、金を騙すものに出会ったらどうしたらいいのですか?
師：それは一概には言えません。まずその人が何を言うかによります。人を騙すものに出会えば、自分で判断しなければなりません。気功師の善し悪しを判別するには、その人の心性を見ればよいのです。心性の高さは、功の高さだからです。

弟子：どうすれば業力、つまり佛教で言う業障を消すことができますか?
師：煉功そのものが業を消すことです。いちばん良いのは、自分の心性を高めることです。それは黒い物質を白いもの、すなわち「徳」という物質に転化させ、徳を功に転化してくれます。

弟子：法輪功を煉るのにどんな戒律がありますか?
師：佛教の中で戒の対象となるものは、われわれはほとんど戒めなければなりません。しかし見方は違います。われわれは出家者ではなく、常人の中で生活しなければなりません。ですから異なります。一部のものはそれに対して淡々としていられれば結構です。もちろん、功力が絶えず向上するに従って、きわめて高い次元に達したときに、

あなたへの心性の要求もきわめて高いものになります。

## 四、天目

弟子：先生が説法されるときに、先生の頭上三尺のところに金色の光の環があり、背後に人の頭ぐらいの大きさの、多くの金色の光の環が見えますが。
師：そう見えた人の天目の次元は相当高いと言えます。

弟子：先生の弟子が人のために病気治療を行い、酒で噴霧をしたときに金色の光がその中に混ざっているのが見えましたが。
師：そう見えた人はかなりのところまで修煉していると言えます。打ち放たれた功能まで見えたからです。

弟子：子供が天目を開いたら、本人に影響がありますか？　天目が開いたらエネルギーを放出することになりませんか？
師：六歳以下の子供は天目が非常に開きやすいです。子供は煉功しないので、天目が開いたらエネルギーを放出することになりますので、家族の中で誰かが煉功していなければなりません。いちばん良いのは、毎日一回見させることです。閉じないようにするとともに、過度に外へ放出しないようにするのです。子供はできれば自分で煉功したほうがいいです。多く使えばエネルギーも多く放出することになりま

すが、影響を受けるのは肉体ではなく、もっとも根本的なものです。しかし、もししっかり保つことができれば、問題ありません。わたしが言っているのは子供のことで、大人ではありません。一部の人は天目が開けばエネルギーを放出するのではなく、開けっ放しにしているのであって、そもそもエネルギーの放出は問題になりません。しかしとても高い次元のものは見えません。高い次元が見える人もいますが、見るとき、法身あるいはその他の師がエネルギーを提供してくれますので、問題ありません。

弟子：先生の身体から金色の光が放たれているのが見え、先生の影も見えましたが、瞬く間に消えてしまったのはなぜでしょうか？
師：それはわたしの法身にほかなりません。わたしが説法するとき、頭上に功柱がありますが、わたしのこの次元ではそういうふうになっているのです。瞬く間に消えてしまったのは、あなたがまだ天目を使いこなせず、目で見てしまったからです。

弟子：特異功能はどういうふうに運用すればよいのでしょうか？
師：特異功能を軍事科学あるいはその他の高度な科学技術に用い、または情報収集に用いることについて、わたしはその中に一つの問題があると思います。われわれのこの宇宙には特性があります。この特性に合えば、効き目がありますが、合わなければ思い通りにいきません。いくらその人に良いことをさせようとしても、高い次元のものはその人には分からないので、せいぜい感応するだけに過ぎません。小

技を施しても社会の正常な発展に影響はありません。その人がもし何かを変えようとすれば、それは非常に大きなことになってきますので、彼にさせるかどうか、彼の一存では決められません。なぜなら社会の発展は人間の意志に左右されるものではないからです。その人がどこそこまで達しようと思っても、それは誰にも決められないことなのです。

弟子：人間の意識はどうやって出入りしているのですか？
師：われわれが言う意識は普通、頭のてっぺんから出ていきますが、もちろんそうとは限りません。それは如何なるところからも出ていくことができます。一部の功法が強調しているように頭のてっぺんからしか出られないということではありません。どんなところからでも離脱することができます。入るときも同じです。

弟子：天目の区域に赤い光がちらつき、真ん中が暗いトンネルで、次から次へと飛ぶように花を咲かせていますが、これは天目を開かせているのですか？　時々星の光や稲妻も見えますが。
師：星の光が見えるようになれば、そろそろ開かれようとしているのです。稲妻が見えたら、実際あと一歩のところまで開かれています。

弟子：先生の頭上に赤や緑の光の環が見えましたが、目を閉じると何も見えなくなりました。視角の端で見たものですか？
師：視角の端で見たものではありません。あなたは目を閉じて見るこ

とができないため、開けて見ているだけです。往々にして天目が開いた人は使い方を心得ておらず、時々目を開いて無意識のうちに見えることもありますが、しかし仔細(しさい)に見ようと思えば、目を使ってしまいますので、また見えなくなります。気がつかないときまた見えたりします。

弟子：娘は空に輪が見えました。どんなものかはっきり言えませんでしたが、法輪のバッチを見たとき、それだと言いました。娘には本当に天目が開いたのでしょうか？
師：われわれの法輪バッチは、六歳以下の子供なら一目見れば天目が開きます。しかしあなたはわざとそうしないようにしてください。いずれにしても子供には見えるのです。

弟子：天目が開きましたが、使い方が分かりません。先生にご教示願います。
師:天目が完全に開いたときは、使い方が分からない者でも使えます。非常に明るくて使いやすいときは、使い方が分からない者でも使えるようになります。天目で物を見るというのは、無意識の状態において見えるのであって、仔細に見ようと思えば、無意識のうちに目を働かせ、視神経を通ってしまうので、見えなくなります。

弟子：天目が開いてから見えるのは、宇宙空間全体の様子でしょうか？

師：天目が開くには次元の違いがあります。つまり、どれだけ真相が見えるかということは、次元の違いによって決まるのです。天目が開いたからといって、宇宙のありとあらゆるものが見えるというわけではなく、むしろこれからの煉功において徐々に自分の次元を高め、最終的に悟りを開くようになって、はじめてより多くの次元が見えるようになるのです。それでもあなたに見えるのが宇宙全体の真理かどうかは保証できません。なぜなら釈迦牟尼でさえ、在世中説法をしていた当時、絶えず自分を高めていたからです。次元を一つ高めるごとに、彼は以前説いたものに不安を覚え、さらに上へ行ってから下を見ればまた違うと思うようになりました。だからこそ彼は最後に、「法には定法(じょうほう)無し」と言ったのです。一つの次元に一つの理があり、彼でさえ宇宙全体の真理を完全に見極めることができませんでした。われわれ一般の人から見れば、世間修煉によって如来の次元に達することだけでも不可思議なことです。なぜなら一般の人は如来という次元しか知らないからです。さらに高いものは一般の人には知られていないので、受け入れられません。如来は佛法の中のごくごく小さい次元の一つであって、「大法無辺」とはこのことを指しているのです。

弟子：われわれに見えた先生の身体にあるものは、本当の存在でしょうか？

師：もちろん本当の存在です。すべての空間は物質によって構成されており、構造がわれわれのと違うだけに過ぎません。

弟子：わたしの予感は起きたこととしばしば一致しますが。

師：それはつまりわれわれの言う予測功能です。実際それは宿命通の低い次元のものです。われわれが煉っている功はみな他の空間にあり、その空間には時空の概念が無く、どんなに離れていても同じなのです。

弟子：煉功中に、色彩豊かな人や、色彩豊かな空、画像が見えましたが。

師：あなたの天目が開いたので、あなたに他の空間のものが見えたわけです。他の空間には次元の違いがあるので、あなたに見えたのはその中の一つの次元であるかもしれません。それは見えたとおりに美しいものです。

弟子：煉功中に突然バーンという音がして、身体が突き破られたかのように感じ、多くのことがぱっと分かったような気がしましたが。

師：煉功中にこのような状況が現れやすい人がいます。身体の一部を炸裂させて、一部の方面で悟りを開きますが、これは漸悟にみられる状況です。あなたの修煉が一つの次元を終えると、一部を炸裂させるのですが、これらはいずれも正常なのです。

弟子：動きがとれないように感じるときがありますが、どんな原因でしょうか？

師：煉功の初期において、あなたは突然手あるいはある部分が動か

なくなったような感覚を持つことがありますが、なぜでしょうか？
あなたに「定功（じょうこう）」という功能が現れたからです。それはあなた自身に存在する功能です。この功能はすごいもので、ある人が悪いことをして逃げているときに、あなたが「定」と言えば、その場でその人が動けなくなるのです。

弟子：どんな時に人のために病気治療をしてよいのでしょうか？　わたしは以前人のために病気治療を行って、一定の効果がありました。法輪功を学んでから、病気を治してほしいと頼んでくる人もいますが、治してあげてもよいのでしょうか？
師：この講習会にいる人には、以前どの流派の功法を学んだにせよ、どれくらい長く練功していたにせよ、病気治療ができるかどうかにかかわらず、低い次元では、わたしは皆さんに病気治療をさせたくありません。皆さんが自分自身がどの状況にあるのかが分からないからです。あなたは確かに人の病気を治したことがありますが、当時あなたの心が正しかったから、効き目があったのかもしれません。あるいはどなたか通りがかりの師がちょっと手伝ってくれたのかもしれません。あなたが良いことをしていたからです。しかしあなたが煉功して得たあれくらいのエネルギーが役に立つにしても、あなた自身を守ることはできません。あなたは人の病気を治しているとき、患者と同じ場にいるので、時間が経てば、あなたの身体にある黒い気は患者よりもひどくなります。患者に、「治りましたか？」と聞いて、その患者は「ちょっと楽になりました」と答えますが、それは病気治療と言えるで

しょうか？　「明日もあさっても来てください。一つの治療周期が終わるまで面倒を見てあげましょう」と言う気功師がいます。彼らも「治療周期」を必要とするなんて、これは人騙しではありませんか？　高い次元に達してから人の病気を治すならなんと良いことでしょう。治そうと思えば、すぐ治るのですから、なんと気分爽快なことではありませんか！　もしあなたにすでに功能が現れており、しかもそれが低くなければ、どうしても病気治療を行う必要のあるときに、わたしはあなたの手を開かせて、あなたの病気治療功能を取り出してあげることになります。しかし、あなたが高い次元を目指して修煉しているならば、わたしはやはりできればそういうことをしない方がよいと思います。大法を宣伝するため、また社会活動に参加するため、わたしの弟子のなかに病気治療を行っている者もいます。彼らはわたしの近くにおり、わたしが彼らを指導しており、彼らは守られているから、大丈夫なのです。

弟子：功能が現れたら、人に言っても構いませんか？
師：功能が現れたら法輪功を煉功している人に謙虚に言うのは構いません。皆さんを集めて一緒に煉功しているのは、ほかでもなく皆さんが切磋琢磨できるようにしたいからです。もちろん、よそで功能のある人に出会ってその人に言っても構いません。ただしひけらかそうとしないように。わたしはすごいだろう、とひけらかそうとすればだめになります。ひけらかしてばかりいると、その功能が消えてしまいます。もし気功現象について語るなら、探求の態度で、個人の雑念を少し

も混ぜ入れなければ、問題がないと思います。

弟子：佛家は「空」を唱え、道家は「無」を唱えますが、われわれは何を唱えますか？

師：佛家の「空」、道家の「無」はその功に特有なものです。もちろんわれわれもこのような境地に達する必要があります。われわれは「有心で功を煉り、無心で功を得る」ことを説きます。心性を修め、執着心を取り除くので、結局やはり「空・無」になります。しかしわれわれはそれをことさら強調しません。皆さんは物質世界に生活しており、勤めなければならず、仕事をしなければならず、必然的に何かをしなければならないからです。何かをしなければならない以上、必然的に良い事､悪い事の問題が生じてきます。どうすればよいのでしょうか？　われわれが修めているのは心性であって、これはわれわれのこの功の最も突出しているものです。あなたの心が正しく、行いがわれわれの要求に合致していれば、心性は大丈夫です。

弟子：われわれは普段どうすれば功能の伸びを感じ取ることができるのでしょうか？

師：煉功の初期において、もし功能が現れたらそれを感じ取ることができます。功能が現れていない場合でも身体が敏感であれば、感じ取れます。もしどちらも持っていなければ、感じ取りようがなく、目をつむって煉るしかありません。われわれの学習者は六、七割天目が開いており、見えています。わたしはそれを知っているのです。

皆さんは口に出さずひたすら目を大きくして見ていますが、なぜ皆さんにグループで煉功するようにと言っているのでしょうか？　グループ内で互いに切磋琢磨して交流してほしいからです。ただし功法に責任を持つために、よそでやたらとおしゃべりをしないように。内部で交流して、互いに向上を目指すのは結構です。

弟子：法身はどんな格好をしていますか？　わたし自身に法身はありますか？
師：法身は本人と同じ格好をしています。あなたには現在法身はありません。煉功がある程度に達し、世間法を通過して、修煉がきわめて高い段階に入って、はじめて法身が現れてきます。

弟子：講習会終了後、先生の法身はどれくらいの間ついていてくださいますか？
師：一人の学習者がいきなり高い次元のものを煉るというのは、その人にとって相当大きな転換です。思想の転換ではなく、人間全体の転換を指しています。一人の常人が突然常人として得るべきではないものを得たというのは、危険なことであり、生命が脅かされることがありますので、わたしの法身は彼を守ってあげなければなりません。もしわたしがそこまでできないのに、ここで説法をしているとすれば、それは人を害することです。多くの気功師がそれをやる勇気がなく、伝える勇気がないというのは、彼らはこの責任を負えないからにほかなりません。わたしの法身は皆さんが修煉して成就するまで、ずっと

皆さんを守りつづけます。途中であなたが修煉をやめれば、法身も去っていきます。

弟子：先生は、「普通の人の修行は、煉功ではなく、心性にかかっている」と、おっしゃっています。それでは心性さえ高ければ、煉功しなくても正果を得られると言ってもかまいませんか？
師：理屈からはそうなのです。心性を修めてさえいれば、徳は功に転化されます。しかし、あなたは自分を煉功者として自覚しなければなりません。煉功者として自覚しなければ、徳を積むことしかできません。あなたは徳をたくさん積むことができるかもしれませんが、良い人になり徳ばかり積んでも、そしてたとえ自分を煉功者として自覚していてもだめです。あなたは高い次元の法を得ていないからです。皆さんがご存じのように、わたしは多くのことを明らかにしましたが、師が守ってくれなければ、あなたはなかなか修煉して上へ上がっていくことができません。たとえ一日たりとも高い次元で煉功できないのです。つまり正果を得ようとするのはそんなに生やさしいことではありません。しかし、心性が高まれば、宇宙の特性と同化することになります。

弟子：遠隔治療の原理は何でしょうか？
師：理屈は非常に簡単です。宇宙は大きくも小さくもなれます。功能が打ち放たれてからも大きくも小さくもなれるのです。わたしが一歩も動かなくても、打ち放たれた功能はアメリカのような遠いところにいる患者にも届くのです。功を向こうに打ち放ってもよいし、その人の

元神を直接手元に引き寄せることもできます。これが遠隔治療の理屈です。

弟子：どれくらい功能が現れてくるのかを知ることができますか?
師：功能は一万種にとどまりません。具体的にどれくらいあるかを知るのは大事ではありません。この理、この法を知っていれば結構です。あとは自分で修煉することです。そんなに多くのことを知る必要もなく、あなたのためにもなりません。師が弟子を捜し、弟子をとりますが、弟子は何も知らないのです。教えてもくれないし、すべて自分で悟らなければなりません。

弟子：講習会の時に目を閉じると、先生が演壇で講義をされ、上半身が黒く、テーブルも黒く、バックの生地はピンク色なのが見えてきます。時々先生の周り一面に緑の光が見えますが、それはどういうことでしょうか?
師：それはあなたの次元の問題です。天目が開いたばかりの時、白を黒と、黒を白と見ることがあります。次元がちょっと向上すれば、何を見ても白になります。さらに向上すれば、色が分かれていきます。

## 五、魔難

弟子：魔難は師が弟子のために段取りされた試練ですか?

師：そうとも言えます。それは皆さんの心性を高めるために段取りされたものです。たとえて言えば、あなたの心性がそこまで高くなっていないのに、あなたを修煉して上へ上がらせることができるでしょうか？　つまり一人の小学生を大学へ送り込むことができるでしょうか？　そんなことはできないでしょう！　あなたの心性が本当に高まっておらず、何に対しても淡々としていられず、何も放下できない時に、あなたを成就させたら、あなたがつまらないことで覚者とトラブルを起こしてしまいかねないので、それはだめです！　なぜ心性をこんなに重要だと見ているのか、これがその理由です。

弟子：煉功者と常人の魔難に何か区別がありますか？
師：われわれ煉功者と常人とでは特に区別がありません。あなたの魔難は煉功者の歩む道に従って段取りしてあげているのであり、常人は常人としての業を返しているのであって、どちらにも魔難がありますので、煉功したからあり、常人ならないというわけではなく、どっちにしてもあるのです。ただあなたのこの魔難はあなたの心性を高めるために設けられたのに対して、常人の魔難は彼の業を返させるために設けられたのです。実は、魔難は自分の業力にほかならず、わたしはそれを弟子の心性を高めるのに利用しただけです。

弟子：魔難は天竺にお経を取りに行くときのあの八十一難のようなものですか？
師：似ているところがあります。煉功者の一生はすでに段取りされて

いるので、多くなることも少なくなることもありません。ただし必ずしも八十一難とは限りません。それはあなたの根基でもってどこまで高く修煉できるかによります。あなたが到達できるレベルに従って段取りされるのです。常人が持っているが、修煉者として取り除かなければならないものは、みな一通り乗り越えなければならないので、たしかにとても辛いのです。あなたの放下できないものは、さまざまな方法を工夫してあなたに放下させなければならず、魔難を通してあなたの心性を高めます。

弟子：煉功の時、撹乱する人が現れたらどうしますか？
師：法輪功を煉るのに際して他人の撹乱を恐れません。初期においては、わたしの法身があなたを守ります。かといってあなたが何事にも遭遇しないわけではありません。一日中ソファーに坐ってお茶を飲んでいれば功が伸びるなどといったことはありません！　あなたが魔難に出くわして、わたしの名前を呼び、わたしがあなたの目の前にいるのが見えたのに、助けてくれないときもありますが、それはあなたが乗り越えなければならない関門だからです。とはいえ、あなたが本当に危険に遭遇したときは助けてあげるのです。そうはいうものの、普通このような本当の危険はありえません。あなたの歩む道はすでに変えられており、予定外のものが入り込むのを許さないからです。

弟子：どのように魔難に対処すればよいのでしょうか？
師：繰り返し言っているように、あなたの心性をしっかり守ってくださ

い！　自分の成したことを自分で間違っていないと思えば結構です。とりわけあることが原因で他人があなたの利益を犯したとき、もしあなたも常人と同じように相手とやり合うようになれば、あなたも常人になってしまいます。あなたは煉功者だから、そのように対処してはいけません。あなたが出会う、あなたの心性を妨げることはすべて、あなたの心性を高めるためのものであって、あなたがいかに対処するか、しっかり心性を守れるかどうか、そのことにおいて自分の心性を高めることができるかどうかが量られます。

## 六、空間と人類

弟子：宇宙にどれくらいの次元の空間がありますか？
師：わたしの知っているところでは、宇宙には無数の次元の空間があります。さらに多くの次元の空間の存在について、及びその空間に何があるのか、誰がそこにいるのかについて、現代の科学方法で知ろうとするのは至難のことです。現代科学はまだそれを実証することができません。しかしわれわれ一部の気功師と特異功能者は他の空間を見ることができます。他の空間を見るには天目しか使えず、肉眼で見ることができないからです。

弟子：各空間とも「真・善・忍」の特性を持っていますか？
師：その通り、どの空間も「真・善・忍」という特性を持っています。

この特性に順応する人は良い人で、背いて反対に行く人は、悪い人になります。それに同化する人は得道者にほかなりません。

弟子：最初の人類はどこから来たのですか?
師：最初の宇宙はこんなにたくさんの縦方向の次元もなければ、こんなにたくさんの横方向の次元もなく、とても単一なものでした。その発展、運行の過程において生命が誕生しましたが、それがわれわれの言う最も原始的な生命であり、宇宙と同化しているのであって、良くないものの存在がありませんでした。宇宙に同化するというのは宇宙と同じであるということであり、宇宙にあるすべての功能は彼にもあるわけです。宇宙の発展、演化に従って、天国が現れました。その後、ますます多くの生命が現れてきましたが、われわれの低い次元で言えば、社会的な群ができ、互いに関係ができあがりました。この演化変遷の過程において、一部の人に変化が起き、宇宙の特性からますます遠ざかり、あまり良くなくなりましたので、神通力も小さくなりました。だからこそ煉功者は「帰真」、つまり原始状態へ回帰するということを言うのです。次元が高ければ高いほど、宇宙に同化する度合いも高く、神通力も大きいわけです。宇宙の演化する中で、一部の生命が良くなくなりましたが、それらを滅ぼすわけにもいかないので、それらを比較的低い次元に行かせて苦しみを嘗めさせることによって、それらを高め宇宙に同化させる工夫がなされました。その後絶えずこの次元にやってくる人がいました。そのうち、この次元でも分化が起き、心性がさらに悪くなった人がこの次元にもとどまれ

なくなったので、下にまた一つ次元が造られました。こうしてますます下へ堕ち、徐々に分化を経て、今日に至り、われわれ人類がいるこの次元が生まれました。これが人類の起源です。